
武田君のモッテモテ物語

さらさら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武田君のモツテモテ物語

【Nコード】

N2383X

【作者名】

さらさら

【あらすじ】

小学校、中学校。主人公・武田昴は、幼稚園の頃に得た幼馴染滋野重郎と野木久美の二人を描くと、さしたる友人を作る事も出来ず、高校生になった。引っ込み思案だった自分に区切りを付けようと思い定め、昴は高校一年生、初めての始業式へと向かう。

……基本的には、恋愛ゲームぐらいの話に、ファンタジーを入れ込んだ感じですか。もとい、入り込んだ感じですか。

序章的な扱いになる野木久美？は、殆どがブログ用に書いた物だ

ったので、一ページが長くなってしまっています。読みにくそうだったら、また訂正致します。また、以降は、更新頻度の関係から、三千〜六千文字程度で投稿するつもりです。

ブログに転載する可能性アリです。

野木久美?・前(前書き)

以下からの「野木久美?」の段は、プロローグ含みです。
ずっとこんな感じで書くつもりなので、雰囲気を見て頂ければと思います。

野木久美？・前

僕が通っていた幼稚園は、通う園児達の中で、大体三つのグループに分かれていた。

やたらと外で遊びたがる男の子グループ、おままごとが好きな女の子グループ、そして男の子ながらにして、女の子グループと遊ぶ子の小グループ。僕は、一番最後の小グループに属し、毎日数人の『おかあさん』とままごとをして遊んでいたと記憶している。

本来なら、園長さんはこう言った傾向を認めるべきではない。だが、僕の幼稚園の園長さんはその点一味違った。園長さんは、三つのグループに、それぞれ代表を立てたのだった。各グループを取り仕切るリーダー。突飛なアイデアであると、当時の僕も思った。

男の子グループからは、圧倒的な推薦を得て一人の男の子が選出された。彼は他の子に比べて群を抜いて力持ちで、周りから慕われていた。

女の子グループからは、積極的な立候補と自薦により、園児にしてポニーテールだった女の子が選ばれた。だが普段は、その行動力からは想像し得ないほどに、非常におとなしい子だった。

そして残る、小グループからは、元々少人数な上に自主性の薄い男の子が集まっていた結果、いくらかの押し付け合いの後、先生指名によって僕が選ばれた。

リーダーには、普通の子よりも優先して先生の手伝いなどがあてがわれるようになった。何度も何度も、そう言った手伝いの度に顔を合わせるのだから、僕と彼、彼女が言葉を交わし、仲良くなるのにそう時間は掛からなかった。

男の子の名前が、滋野重郎。女の子の名前が、野木久美。僕たちは、最初こそ気まずい空気をかもしいていたが、気がつくとそれぞれの集団から抜け出し、三人で新たなグループを築いていた。

「すばるくんは、ろーかにたつてなしゃい！」

驚いたのは、女の子……久美が、女子グループに居る時の彼女とは違い、実際には気性の荒い子だったと言う事、そして男の子……重郎が、力持ちと言うだけではなく、かなり気さくな子だと言う事だった。二日に一回は、久美に引っ掛かれた傷を付けて、僕は家に帰っていた。不思議と、それは苦痛ではなかった。

小学校も中学校も、家が近かったこともあって同じ所に上がった。長く一緒に過ごしていると互いに影響を及ぼし合うようで、久美は僕の消極性と重郎の気さくさを得て乱暴から陽気で気が利く子になった。僕も、彼女らからポジティブを得て、かなり外向的になったと思う。

「……つしゃー！ 受かってやんの、俺！」

「そりゃまあ、そんな高い高校じゃないし……ってあれ、私の番号どこだ」

「無いんじゃない？」

「ま、まっさかー……さかー……かー……」

「え、マジでねえのか？」

「……あ、あったあ！」

そうして、僕たち三人は、言葉に出さずとも互いに意識しあって、同じ高校へと進学したのだった。

「……わあ、もうこんな時間だあ」

目を覚ました僕は、鳴ったのか鳴らなかったのか分からない目覚まし時計を見て、ぽつつとそんな一言を漏らした。寝起きは頭がよく回らず、とりあえずそういう事を言うのが決まりのような気がしてしまう。とりあえず、ベッドから起き上がる。

「……………」

トイレに行き、顔を洗う。

「……………」

両親におはよう、と告げてから、用意してある食パンを頬張る。

「……………」

ベッドに腰掛ける。

「……ま、間に合わない……!」

時計は、既に八時十二分を指していた。八時三十分に始まる学校までは、徒歩二十分。普通に歩いていると遅刻してしまう。自転車通学は認められていないから、走るしかなさそうだ。

「行って来ます!」

入学式から遅刻しないようにねー、と言う母親の姿を後ろに、僕は家を飛び出し駆け出した。

最初は一人として同じ制服の人を見掛けなかったが、二、三分ほ

ど走ると、早足で急いで歩いている何人かに追い付いた。僕も同じぐらいの速さに戻して、歩いていく。

(……一番最初に入学式があつて……)

ちょうど良いので、学校説明会で貰ったプリントを出して、今日の予定を再確認することにした。

まずは入学式。ここで、入学のお祝いと教職員の紹介と、クラス分けの発表が行われる。それから各ホームルームに移動して、自己紹介などをし、後は帰宅。

(素っ気ない……)

とは言え、一目ならこんな物なのかも知れない。

もう一枚貰っている、入学式での席順のプリントを取り出して、確認してみる。五十音順で並んでいるから、『武田昴』である僕は、大体真ん中ぐらいに位置する事になる。左隣が『竹頭明菜』、右隣が『田中萌』……。

よく見れば、左右に加えて前後、更には斜めに至るまで、全員が女子っぽい名前をしていた。

(……神様は実在した……)

そんな事に熱中したせいか途中で足が止まっていたらしく、気付いた時にはもう誰も周りには居なかった。

学校に着いた時、手持ちの腕時計は三十二分を示していた。気まずい中、そっと校門をくぐり、音を立てないように体育館を

覗くと、中では肅々としたムードの中、今まさに教頭の先生が新入生に起立を命じている。非常に入りにくい空気に足踏みしていると、近くに居た先生が僕に気付いて、話し掛けて来た。

「あなた、新一年生の子？」

「あ、はい。遅れちゃいましたけど」

「毎年一人か二人居るのよねえ……。これも恒例なんだけど、入学式遅刻者は、式中に校長先生か教頭先生から戒めの言葉を受ける、みたいなしきたりがあってね」

「はあ」

その女先生の言葉によると、何やら、思っていたよりも更にまずい状況らしい。

全新生の前で、大恥を搔く羽目になるとは思いもしなかった。

「何か訊かれても、黙っていると良いわ。最近ほ、言えば言う程酷くなる傾向だし」

そう言いつつ先生は、僕を生徒達が座る一番右端に連れて行った。ここで待機せよ、という事らしい。その動きだけで既にかんりの注目を集めてしまっていて、しかもその視線一つ一つが突き刺さるように鋭かった。とても、怖い。

「次は、学校長様の言葉です」

これまでも相当だったが、更にたたずまいを直して、教頭の先生が宣言した。スキンヘッドの男がサツ、と立ち上がり、壇へと向かっていく。

「えー……ゴホン」

礼を済ませた校長が、莊嚴に咳払いをした。僕は、目を閉じる。少しでも、少しでも優しさがあるような人でありますように……。

「……入学、おめでっ……おめでとう。えーと……今日から君達も、ほん、本校の生徒であります」

思い切りどもっていた。ついでに、メモもちらちらと見ている。強面な外見の割に、声は少し弱々しい。有体に言って、口下手だ。髪が無い頭には、滝のような汗が見て取れた。

五分ほど、何度も詰まりながら話があった後、ついに僕にとっての本番が始まった。

「……えー、さて。入学式から遅刻して来た生徒が、えー、二人、居ます。前に出なさい」

後ろから、その担当らしい先生に背中を押されて、僕は壇の前に立った。もう一人遅刻したらしい女子生徒が、僕と反対側の端から歩いて来て同じように立つ。

女子生徒は、どこか猫っぽいや雰囲気を持っていた。

「ゴホン。……何故に遅れて来たああああ！」

突然、校長がシャウトした。僕と隣の子は、目を点にして校長を見上げた。

「何か言わぬ……かあああああ！」

今度は溜めて来た。在学生見学席から拍手が上がる。傍から見れば良い見せ物だろうが、受ける僕たちにとっては恐ろしい事この上

ない。

校長による叱責シャウトは、この後三分以上も続いたが、その間中一度も拍手が消える事はなかった。

シャウト校長が下がると、後はクラス分けの発表と、事務連絡を残すのみだった。

八クラス編成の、僕は七組に当たった。ある意味自分のクラスよりも二人のクラスを気にしていたのだが、残念な事に久美だけは、別のクラスになってしまったようだ。それも一組。かなり、遠い。

「さーみしーなぁーねー」

入学式が終わって各教室に移動する時、久美は僕に寄って来て、そう言った。僕は黙り込んだまま、小さく頷いた。

「ま、来年に期待だぁーねー」

そう言って、久美はそそくさと去っていった。

果たして一年後、僕や重郎と久美との絆は、ちゃんと残っているのだろうか。これまで、小学校も中学校もずっと同じクラスで来た分、その不安は大きかった。新しい生活の幕開けだと言うのに、どこか寂しい。

そんな憂悶に駆られている間も、遅刻して壇の前で叱られた僕の知名度は高いらしく、同じクラスと思しき何人かの生徒に話し掛けられた。中には、免許部を創設しようとしている男子生徒も居て、僕にしつこく入部を勧めて来た。何が悲しくて、青春真っ只中に第一種危険物取扱免許の取得に向けた勉強などしなければならぬのだろうか。いや、寂しいのは確かだが。

七組はありがたい事に、北校舎の一階に存在しており、全く階段を使わずに済んだ。中に入ると、もう殆どの生徒は着席しており、僕も、机に置かれた名札を見て、真ん中一番前の席に座った。

「よっしゃ、全員座ったかいな？」

担任の男性教師は、一瞬でそれと分かる関西人だった。生徒を見渡して人数を確認し、黒板に大きな文字で『倉口 友朋』と書く。

「これが僕の名前なんやけど、読めるか？ そやな……漢字が共通しとるさかい、津田朋絵さん、読んでみ」

「え？ えーと、くらこーともとも先生？」

僕のすぐ後ろの女の子の答えに、クラス中から笑い声上がる。

僕も振り返って、その子を見た。見覚えがある。猫の子だ。

「さすが、入学式から遅れて来るだけあるなあ。名字を読み間違えられたんは初めてかも知れん。あと、名前を最初に当てられたのも、初めてやわ」

今度は歓声が上がる。女の子は自分が何をしたのか自覚がないらしく、とりあえず称賛されていると受け取って、照れるように頭を掻いていた。

「僕の名前は、くらぐちともとも、や。変な名前やけど、まあ、仲良くしたってえな」

クラスの雰囲気は、倉口先生の気さくさのお陰か、かなり良さそうだった。自己紹介でも、面倒くさそうにしている生徒は一人として居なかったし、それを聞いていない者もやはり居なかった。

そんなちよつとした満足感に浸っている間に、順番は僕に回って来ていた。そつなくこなそう、と思うが、入学式遅刻の実績は意外と大きいようで、僕に向けられる視線は熱い。

「えーと……神月中学校から来た、武田昂です」

とりあえずテンプレート自己紹介を試みたが、まだこちらを見るその目に期待が残っている。きっと彼らの中では、僕はかなりのお調子者に見えているのだろう。ちよつと考えて、僕は言った。

「校長先生の物真似やります」

クラス中が湧き上がった。僕の拙い演技力で、その後すぐに場が冷め切ったのは言うまでもない。

僕の次は、さっき先生に褒められ、貶された津田朋絵だった。僕と同じく遅刻組だと言う事と、さっきの名ボケからも、期待と共にまた場の熱が上がっていく。

「ええっと……津田朋絵です、かあああー！」

……。

一瞬の沈黙の後、クラス中が爆笑の渦に飲み込まれていった。

自己紹介の後は、早くも学級委員長決めだった。

学級委員長の仕事は、中学校の頃に比べても格段に増えるようで、普段の授業での監視役からちよつとした手伝いをする雑務役まで、様々な役割があった。

これには積極性のありそうなこのクラスでも、話し合いは紛糾す

るかと思われたが、意外にも一人の立候補者があり、話はすんなりと決まった。

「……………」

無言でそつと手を上げたのは、本当なら入学式で僕の左側に座るはずだった……と言うか、僕が右側に座るはずだった、竹頭明菜だ。何と言うか、背が低く、胸部も小さく……好みである。犬耳が似合いそうだ。

（神様なんて居ないよ……）

どこか言葉がぶつきらばうで、無口な所がゲームに出て来そう感をかもし出している。容姿も、かなり可愛い。が、僕と出席番号は連番なのにも関わらず、席は列違いの一番後ろと一番前で、かなり離れていた。

（……そして、悪魔は実在する……）

副委員長も彼女の指名でとんとん、と決まり、予定よりも三十分ほど早く、クラスは解散となった。が、殆どの生徒は帰ろうとせず、友達作りに躍起になっていた。

僕も、ここは一人でも知り合いを増やそうと、これから人気になるであろう後ろの朋絵さんに声を掛けてみた。

「はい、何でしょう？」

「席、近いしさ。一応挨拶しておこうかなって」

「そうですか」

朋絵さんがありがたい事に人懐こい性格をしていたので、少しの

会話でかなり打ち解けることが出来た。話を聞いていると、さっきからのボケボケは、素だと言う事が良く分かる。

五分ほどで、話すのに遠慮しなくて良いほどになった。コミュニケーション力が上がっている自分に、ちよつとだけ感動する。

「でもさ、入学式での遅刻って、良い経験だね」

「ですね〜。この辺、迷いやすいですし……私、一時間ぐらいさ迷ってたかもです」

「……それはどうだろ」

「学校に着いてからも、体育館がどこにあるのか分からなくて……うう」

校門の位置から、体育館が見えないわけは無いのだが。ちよつと間が抜けている所があるようだ。いや、さっきの件からすると、かなりかも知れない。

しばらくそうやって話していると、早くも二人の女子を引き連れている重郎が近くを通ったので、背中を叩いて朋絵さんを紹介してみた。

「げえ……か、可愛い……」

聞いた重郎の第一声は、それだった。僕も、重郎の引き連れていた二人の女の子も呆れた表情になったが、当の朋絵さんだけはきょとんとして、ありがとうございます、とか言っている。

「何だ。私たちはお払い箱か」

二人の内、背の高い方の女子が、冗談っぽく言って笑った。重郎は、そんな事ねえよ、と言いながら、僕にその二人を紹介してくれた。

それによると、背の高い方の女の子が駒黒佐奈、そうじゃない方が子が須本多香子と言うらしい。佐奈さんは、言葉数が多くてどっしりと構えたタイプのように、多香子さんは物静か、と言う印象が強に残った。

「……では、昴さんは、神月小学校の出身なのですね」

ただ、不思議と、会話は多香子さんの方がよく弾んだ。彼女は本が好きなので、様々な点で僕と話が通じるはずはなかったのだが、人間関係とは分らないものである。向こうが昴さん、と呼ぶので、僕までつられて多香子さん、と呼ぶ始末だった。

重郎たちも朋絵さんの周りで落ち着いた頃、今度は学級委員長の明菜さんが話し掛けて来た。

「初めまして。全員の名前と顔を覚えるために、回ってる」

「くるくると？」

「くるくるー」

声は平坦そのものだが、明菜さんの表情は意外にも豊かだった。朋絵さんの言葉に反応して回り始めた時には、青春を謳歌しているぜ、的な表情までもしていた。

互いに自己紹介を終えると、明菜さんは全員に握手を求めた。強く僕の指を握る彼女の手は、とても温かく、そしてふにゃふにゃとして気持ち良かった。

「じゃあ、これで。くるくるー」

明菜さんは文字通り、回りながら去って行った。目が回って事故でも起こったら、朋絵さんには大きな責任があるだろう。

次に現れたのは、クラスが解散になって駆けつけたらしい、久美

だった。とりあえず、皆に紹介する。

「久美い、よりどりみどりで、俺ア困ったよ……」

「へんたーい。……あ、重郎はいつもこんななので、何かあったら容赦なくどうぞ」

「重郎さんは変態、と。メモメモ」

本当にメモする朋絵さんに、どこから出したのか佐奈さんが既に『重郎Ⅱ変態』と書かれているメモ用紙を渡した。それから、全員に同じ物を手渡ししていく。

「変態も勲章の内……だ」

「言い切りました。偉いです」

「おう……だよなあ！」

多香子さんに褒められて、重郎は何とか立ち直ったようだった。殆どクラスに人影がなくなって来て、明菜さんが戻って来た。が、久美を見るや否や、血相を変えて逃げ出そうとする。

「ふっふーん、逃がさん逃がさんー」

その服の背中を掴んで、久美が彼女を引き戻す。明菜さんはその間も、何とか逃れようとじたばた暴れていた。

「ん、明菜さんと知り合い？」

「うん。って言っても、今日の朝からの、だけどね」

「知り合ってない。私達は、知らない者同士だ」

「またまたあ。あれだけスキンシップ取ったのに、まだそんな事言うかなあ？」

「取ったからだ」

「だって、明菜ちゃん可愛いんだもん」

後ろから抱きしめると、久美は明菜さんをくすぐり始めた。何だか見てはいけない物を見ているような気がして、僕は目を逸らした。重郎は食い入るように見入っていたが。

朋絵さんが、そっと僕の背中を突いて、尋ねて来た。

「久美さんって、さっき言っていた幼馴染の方ですか？」

「そそ。久美と重郎と僕で、仲良し三人組的な感じかな」
「良いですね、そう言うのって」

確かに。と、僕は思った。

願わくば、そんな風に思える人達が、この高校生活で増えますように。僕はそっと、居ないかも知れない神様に、囁いた。

その日。家に帰ってからやっと、男子の友達が一人も出来ていないことに気が付いた。

これでは、いけない。何も、恋愛するだけが青春ではないのだ。喧嘩から芽生える友情とか、スポーツの試合から生まれる仲間意識とか、そう言うのも青春の大事な一要素のはずだ。

そんな事を夕食後も入浴後も考え続け、考えたままベッドに寝転んでいると、枕元に置いていた携帯電話が、懐かしの名曲を奏で始めた。ついついずっと聞いていたくなる衝動を抑えて、電話を取る。

『もしもし？ スバスバ？』

電話は、久美からの物だった。一週間に二度三度は電話があるから、そう珍しいことではない。

「うん。用件をどうぞ」

『んー。ちょっとね、一組で出来た友達の事でも話そうかなって』

これは好都合である。久美なら男友達を作るのにも抵抗がなさそうだし、学校内で友情線を作るチャンスだ。

『まずはー……春花ちゃんって子。もうね、凄いの。レモンに梅干を足して、塩酸で割ったような性格』

「全然分かんないんだけど」

『噛み砕いて言うと、突き抜けて明るい感じかな。凄く付き合い易そうな感じ？　しかもだいふごー』

「あー。こっちのクラスには、そんな子は居なかったかも」

そんな調子で、その後五人ほど紹介されたが、どれも女の子で男子は一人として居なかった。

会話の切れ間に、珍しく不安そうに久美が呟いた。

『私、人見知りするのかなあ』

「久美が？　まさか」

快活豪放、よく気が利く人懐こい久美に限って、そんな事は信じられなかった。

だが、久美は続けた。

『何かこう、お腹を割って話せてない感じがするんだよね。今日だって、最初に言った春花ちゃんとぐらいしか、ちゃんと話せなかったしさあ』

「時間が経てば、変わると思うけど」

『そうかなあ？　こう言うのって、最初が駄目だとずっと駄目なん

じゃない?』

そう言われてみるとそんな感じがして、僕は曖昧に答えた。久美がこんなにもブルーになるのは、これまでになかった事だ。

『んー……ん。そろそろ寝るかねえ。お休みー、また明日ー』

適当なタイミングでそう切り上げて、久美から電話を切った。

携帯電話を元の枕元に放り投げて、僕はベッドに横たわった。あまり上手に受け答え出来たとは言えない。これと言った励ましも道しるべも与えられなかったから、仕方なく適当に流したという感じがさえる。

もつと、真摯に向き合わないと駄目だったかな。背中を睡魔に突かれながら、僕はそう思った。

目が覚めたのは、六時二十五分だった。

昨日に比べて良すぎる目覚めに、嬉しくなって早朝から、ひゃっほーうと叫んでしまった。寝起きとは、本当に何をしでかすかわからない時だ。おはよう、の代わりに、なめろう、でも良いかと考えて、なめろうと送った男子生徒の話は有名である。

(なめろう男みたいに、超能力があったら良いんだけど)

ゲームの話である。大抵のゲームでは、そう言う男子生徒は超能力のせいで事件に巻き込まれるが、最終的にはハッピーエンドを迎える。そのゲームも例に漏れず大筋はそんな感じだったが、全体的

に話が大きすぎてよく覚えていない。

「♪」

久々にそのゲームの事を思い出してテンションが上がり、オープニングテーマを鼻歌で奏でながら歯を磨いた。それから部屋に戻ると、時計は三十二分を指していた。

「……鳴ってないじゃん！」

アラームは六時半に設定してある。洗面所と僕の部屋とはそう離れていないので、鳴れば気付く筈だ。つまり、鳴ってない。昨日起きれずに遅刻したのは、時計が壊れていたからなのか。

お陰で、昨日の暗澹たる校長シャウトまで思い出してしまった。僕にとって残酷だったのは、それ自体よりも物真似の失敗だったのだが。

（つて……アラームのスイッチ入れてなかった……）

昨夜は勢いで眠ってしまったから、目覚まし時計は今日に限ってただの時計だったらしい。鳴らない方が起き易いのだろうか。

ひとまず、鳴らなかった理由を突き止めたところで、今朝は早くに出掛けてしまっている両親の用意した朝ごはんへと向かった。今日の朝ごはんはカレーライスで、よくあるケースだが昨日の夕飯の残りである。昨日の夕飯は、一昨日の夕飯の残りのカレーライスだったから、今日の朝ごはんは一昨日の夕飯の残りのカレーライスの残り、と言う事になる。

とは言え、家庭の味とは恐ろしい。二日続いたぐらいでは、カレーライスが持つ独特の魅力は全く薄れていなかった。

「行つて来まーす」

食事の後、何十分かの一人の時間の満喫してから、僕は誰に告げるでもなく挨拶をして、家を出た。

空は清々しく、青く映えている。昨日は遅すぎて誰も居なかった道には、今日は早すぎて誰も居ないようだった。昨日の僕に、ちょっとした優越感を覚える。

そこへ、昨日見たばかりの顔が通り掛かった。

「おはよー」

とりあえず、声を掛けてみる。

「あ、昴さん。おはようございます」

まさか忘れられては居ないだろうか、と思ったが、さすがにそんな事はなかった。

「昴さんも迷ったんですか？」

「え？」

「道です。私、かれこれ三十分ほど迷っているんですが……」

行き道は忘れているらしい。方向音痴、と、僕の脳内の朋絵さんデータに書き足しておいた。全般的に、どこか抜けている所があるようだ。

「じゃあ、一緒に行く？」

折角の珍しい、女の子と一緒に登校するチャンスなので、少ない勇気を存分に振り絞って訊いてみた。

答えは存外早く返って来た。

「はいっ！」

ちょっと周りの視線が突き刺さるようで痛い、それを除けば今ほど幸せな時はないだろうと思う。

なんせ、女の子と二人での登校だ。そして、その相手の女の子は、中々可愛い上に既にクラスの人気者と来ている。えへへ。

「……………」

「……あ、あの〜？」

「うん？ 何？」

敬語キャラな分、ちょっと他人行儀なのが気になるものの、遠目には彼氏彼女に見えるだろう。昨日出会ったばかりだから、他人に近いことは間違いないのだが。えへへ。

「顔、にやけてますけど」

「えへへー……ってわ、わ！ わぁ！」

危ない危ない。つい弛緩してしまう表情筋には、後でみっちりお仕置きしておかねばなるまい。えへへ。えへへ。

そんな調子でそのまま教室に入った。

先生が来るまでの時間、一緒に登校してきた流れで後ろの席の朋絵さんと話していると、ちょっとして教室に入ってきた重郎がこちらを見るや否や、駆け寄って叫んで来た。

「おい！ お前！ 朋ちゃんと付き合ってるって本当か！？」

「朋ちゃんって、私の事ですか？ 付き合ってますんけど」

「で、でも、朋ちゃんと昴が、一緒に登校してたって言う噂があつてだな……うわぁー！ 昴の裏切り者ー！」

「誤解だよ！」

叫び散らす重郎に、時に理路整然と、時に感情的に、時に深層心理に働き掛けるようにして事情を説明してみたが、聞く耳を持たない彼には全く効果がない。その間にも、重郎の声を聞いた周りの生徒達が、わいわいと勝手に騒ぎ始める。

「大体お前、昨日だって朋ちゃんと一緒に遅れて来たじゃねえかよ！ 裏切り者お！ ブルータス！ お前もかぁ！」

「混乱しすぎだって、ちよつと落ち着いてよ！」

昨日に至っては、シャウト校長の前で初めて会ったというレベルなのだが、それを否定する暇もないほどに重郎が押してくる。騒ぎはどんどん加熱し、早く火の元を止めなければその内爆発に至るだろう。

「なるほど、昴さんと朋絵さんは、そうでしたか……」

「会った時から、そんな感じはしていたな」

「学級崩壊の危機だ、どうすれば良いのか……」

気が付くと、昨日の三人も、火を注いだり納得の境地に至ったり、はたまた火消しの方法について思案したりしている。

わいわい、がやがや。五分、十分と経つに連れ、飽き始めたギャラリーが他の事に気をやったお陰で、騒ぎは段々と温度を下げ始めた。

「おい、どうした皆！ もっと盛り上がろうぜえい！」
「……昴さん、昴さん。重郎さんって、いつもこんな感じなんです？」

ちよつと伏せ目がちに言う朋絵さんの目は、それでもどこか楽しそうだった。

「朋ちんちゅーたら、僕の学生時代のあだ名やね」

あろう事か、重郎は先生が来てからもずっと騒いでいた。お陰で先生にもその噂が聞こえ、そこから十分以上にも渡る先生の超青春記が始まってしまっていた。

やっとそれが終わり、先生は黒板に大きな文字で『グループ決め』と書いた。教室内でいくつかのグループを作り、それらで日直・掃除・課題・遠足などに当たるのだと言う。結構重要だ。

「三十二人やし、一グループ六、七人で五グループ作ろか。……はい、開始。ドーン」

掛け声が必要かは全くの不明だ。

とりあえず重郎の方を向くと、向こうは既にこちらへと移動し始めている所だった。こう言うグループ決めは、早い者勝ちである。誰も、他のグループに入ってしまった人を、自分のグループに強引に連れてくるわけには行かないからだ。

幸い、朋絵さんはまだ誰とも組んではいないようだった。

「一緒に組もつか」

「あ、はい。了解です」

あっさりしている。何かこう、二十年来の知り合いのような。違うけど。

重郎が合流すると、昨日も連れていた二人も合わさって、五人になった。あと一人か二人。昨日得た知り合いと言うと、あとは……。

「明菜さんは？」

「あちらの方で、グループ作りの斡旋をしているようですね」

多香子さんが指差した先で、明菜さんは小さな体をフル活用して、ときばきと指示を出していた。八人のグループと五人のグループを、上手くならして七人と六人に分ける所などは、一種のカリスマ性を感じさせる。

近寄って、後ろから竹頭さん、と呼んでみた。

「どうかしたのか？」

「えと、明菜さんは、グループ決まってるの？」

明菜さんはちょっと天井を見上げて、考えた。そして、そう言えば決まっていない、と答えた。

「良かったら、昨日の五人でグループ組んでるんだけど、入らない？」

「ありがとう。そうする」

「じゃあ、終わったら来てね」

「うん。くるくる」

昨日からのお気に入りなのか、明菜さんは愛らしくくるっと一回転して見せた。

皆の所に戻ってみると、何故か全員が僕を冷たい目で見ていた。

「……君はアレだな、軽い男だな」

「え？」

「下の名前で呼ぶのが早すぎる。私なら、ボッコボコにするレベルだ」

佐奈さんに言われて、我に返った。中学校の頃は、三年間下の名前で呼んだのは、重郎と久美だけだったのに。いつの間にこんなに積極的になったのだろう。

「多香子さんにつられたんだよ、きつと」

「責任転嫁……良くないです」

「また名前で呼んでるしな。ひでえ奴め、浮気性め。ブルータスめ！」

「ブルータスが浮気性なのかも気になりますけど、重郎さんも人の事言えませんよね」

わいわい、がやがや。三分ほどで来た明菜さんも巻き込んで、グループは早くも大議論を始める事となった。

大議論は五分で決着がついた。

「以上をもって、あだ名や名前で呼ぶ事をくるくる認める」

明菜さんがそうまとめる。最初は攻守分からずに言い合っていただけだったのだが、明菜さんが入って意見を一人ずつに聞くと、皆が名前で呼ばれる事に抵抗がないと言う意見だったので、その後はこれと言った反論もなく綺麗にまとまった。

「よっしゃー。いったん席ついてなー」

先生の言葉で、僕たちは席に戻った。

それから、グループについてさっき受けたものよりも詳しい説明を受けた。グループの仕事の一つである掃除は、教室と、すぐ近くのトイレと、少し遠くにある社会科教室が、週に各一回ずつ計三度回ってくる。先生の指示で各班の代表者が話し合い、その結果月曜日に社会科教室、木曜日に教室、金曜日にトイレの掃除を担当する事になった。掃除は来週からなので、月曜日早速掃除があると言う事になる。

次は、来週金曜日……今日が火曜日だから、ちょうど十日後に訪れる遠足についての説明だった。行き先は近くのレジャー施設で、飯ごうやら料理やらを行ってグループの団結を図るのが目的らしい。

「時間は、調理・食事・片付けを含めて二時間半や。間違っても、時間の掛かり過ぎる料理したらあかんで。去年は、ドーナツ作ろうとしたアホがおったからな。じゃ、もっかい班で集まってその辺決めてんか。あと、班長も決めといてな」

先生の指示に従って、また六人で集まる。集合場所は僕と朋絵さんの席の周りだという、暗黙の了解が出来たらしく、僕と朋絵さんは全く動く必要がなかった。

全員集合しての開口一番、重郎が言った。

「リーダーは、まあ俺で良いとして……。料理が悩み所だな」

「悪い冗談はよせ」

すぐに佐奈さんが突っ込みを入れる。そのタイミングの良さたるや、久美にも劣らないほどで、僕が突っ込む隙すらない。

「んあ？ 何だ、何か良い料理の案があるのか？」

「そっちじゃない。お前がリーダーと言う件だ」

「確かに、ちよつと不安ですねえ……」

「なんでだよ！」

朋絵さんが佐奈さんに同意した。僕としてはどうでも良い事だったが、リーダーに適任な人が一人居るので、一応提案してみた。

「明菜さんは、どう？」

「……良いですね。明菜さんなら、安心してお任せ出来ます」

多香子さんが同意してくれる。佐奈さんも朋絵さんも、不満はなさそうな目だ。

だが、明菜さんは首を横に振った。

「学級委員長の務めがある。残念ながら、時間が取れない」

「よっしゃあ！　ならもうこれは、俺しかないな！」

「うむ。では、委員長に指名して貰う事にしよう」

重郎は半分無視されかかっていた。

結局、佐奈さんの提案通り、明菜さんの指名でリーダーを決める事になった。明菜さんが一番に指名したのは、大方の予想を大きく裏切る重郎だったが、佐奈さんが提出した不信任案に賛成票が三票集まり、結果重郎は解任され、二度目の明菜さんによる指名で、何故か僕が選ばれた。

「名前で呼ぶ合うと言うフレンドリー感を生み出した功績を評価した」

「たったそれだけの理由？」

正直、リーダーと言う柄でもないので、腰が引ける。見た所、佐

奈さん辺りがリーダーに相応しそうなのだが。

「昨日と今日しか評価基準がないから、十分だった。くるくるを生み出した朋絵が三番手」

「昂さんなら……重郎さんよりは良さそうです」

「多香子嬢が言うなら、私もそう思うことにしよう」

「私も、それで良いと思いますよ」

色々まどろっこしい言い方をされたが、重郎以外の信任を得た僕は、めでたくリーダーに就任した。重郎だけはずっと俺だ俺だと言っていたが、逆にその事が、自分がリーダーになる決心を固くしたのだった。

続いて、恐らく本題である料理の選択を話し合い始めたのだが、その一番最初、あまり好き嫌いをしなさそうな明菜さんが、

「さんまだけは嫌だ」

と言った。

「元々、さんまは選ばれる余地がなさそうだが」

「苦手なの？」

「被るから嫌だ。フーキーンの人と被る」

うわぁ、その人凄く記憶にある。確かに、その『フーキーン』と明菜さんは、見た目は全然違うものの、話し方やその他の特徴はそっくりだった。

とりあえず、初めから考えになかったさんまを更に遠くに追いやってから、意見を一人ずつに訊いて行った。

「焼きそば……シーフード焼きそばが良いですねえ」

「カレーが妥当ではないかと」

「裏を搔いて、塩結びだ」

「コーンフ레이크はどうだろう。栄養満点」

「俺、サンドイッチが食いてえ！」

……バツラバラだった。一体感がないって言うレベルじゃない。
まずは、ふるいにかけてよう。

「塩結びは二時間半使えないし、サンドイッチはご飯が余っちゃうし、コーンフ레이크はそもそも料理してないから却下ね」

「となると、二択だな。重郎……以外で採決を取ろう」

「なんでやねんっ！」

重郎が先生に、良いツツコミだとか褒められている間に、五人で採決した。シーフード焼きそばが五人、カレーが無し……。

「あれ、多香子さん、カレーは良かったの？」

「何だか、シーフード焼きそばと言うフレーズに惹かれまして」

満場一致。僕たちは残りの時間を、談笑と重郎をなだめるのに費やした。

遠足の計画の後は、グループによる校内のオリエンテーションだった。

元々そんなに広い校舎ではないのだが、明菜さんのお陰で道に迷う事は一度もなく、十分ほどで全行程の三分の二を終えてしまった。

「昂っ！ 見たか、おい！ 食堂のメニューすっげえぞ！」

「何故さんまの塩焼きがあるのか……」

「……少し、割高な気もしました」

それでも、僕たちの会話が途切れる事はなかった。とても良い空気だ。

そんな中、化学実験室の前を通りかかると、実験室の電気がついている。妙なハイテンションだった僕たちは、誰か居るなら入っても良いか、という謎の論理に誘われ、実験室に入ってしまった。

中に入った途端、実験室の証明が落ちた。

『いえす！　ないすかむおんね！』

謎のマイク音が響き、小さい電球が光って部屋が一番奥に居る一人の女の子を照らした。その女の子の手には、マイク。

「……………」

「……あつれえー、ノリ悪いのねえ」

女の子……と言っても高校生には違いなだろうが、とにかくその女の子が何かを操作すると、一斉に実験室中の電気が点った。未だに呆気にとられている僕たちを他所に、彼女は話し始めた。

「科学部へようこそ！　カガクって言っても、バケガクじゃないわよ？　自然科学部と呼んでちょうだい」

「……あ、え、ええと……」

「質問は手を上げて！」

「は、はい！」

「はい、どうぞ」

何か言おうとしたらしい朋絵が、女の子の勢いに押されてつい手

を上げてしまい、質問を強要されてしまう。普段なら気の利いたフオローも出来るのだが、こんなカオス空間の中では上手く出来ない。

「こっ……ここは何ですか？」

「いい質問ね。ここは化学実験室兼、自然科学部の部室予定地よ！」

ちょっとした外れな質問ではあったが、向こうはそれなりに納得したらしく、誇らしげに答えてくれた。……ちよつと引っ掛かる。

「予定地……君は、上級生ではないのか」

「いえす！ 私は白水優、一年生よ。あなた達もそうでしょう？」

「一年生は今、校内オリエンテーションをしている」

「ふっふーん。そこは、昨日中に学校の部屋の位置関係を科学的に把握して、今日のオリエンテーションで回る順番を論理的に想像して最短距離を割り出し、後は物理的に走って回って教室に戻れば、後の自由時間にここに居る事が出来るってわけ」

どこが科学的でどこが論理的なのかは分からないが、とりあえずとてつもない努力の末にここに居る事は分かった。

「そこまでしてここに居る必要性って何だよ……」

「あら。こうして他の生徒に、自然科学部の存在を認知して貰えるじゃない？」

「……ちなみに、私達で何人目ですか？」

「六人目」

僕たちの班は六人班である。僕たちで六人目なら、僕たちが一組目だ。そもそも、よほどの事がなければ、化学実験室に入ろうとする新人生は居ないだろう。

「さあ、あなた達も早速自然科学部に入部希望を出して、科学的な学園ライフを送りましょう！」

「……嫌です」

多香子さんが、全員の総意を代表して言ってくれた。女の子……優さんの表情が強張る。

「あなた達、この期に及んで入部を拒否すると言うの？」

「まだそんなに及んでないと思いますけど……」

「そもそもまだ部がない」

「俺、野球部入りたいんだよなあ」

「僕は帰宅したいし」

「本が読みたいです」

「多香子嬢を観察したい」

優さんがたじろいだ。が、後一步で踏み止まって返してくる。

「じゃあ、野球が出来て帰宅もオーケー、読書もその観察も出来る自然科学部が出来たら、もちろん入るわよね？」

「……帰宅して良いなら迷うけど、優さんはそれで良いの？」

「もっちゃん！ 大事なのは予算、予算には人数！ ぶっちゃけ活動は私一人の方が嬉しいし！」

何か無茶苦茶な人だ。

「じゃ、そんな部が出来たら連絡してね」

そう言い残して、全員で逃げるように化学実験室を後にした。

僕たちが教室に戻ると、既に教室中の椅子は埋め尽くされていた。

「ビッケツやさかい、昴くんトコが五班や」

本来なら一斑になれたのに、と思うと、ちょっとだけ悔しい気がする。

明日はいよいよ新入生実力テストやし予習はしっかりな、という先生の悪魔の言葉と共に、その日のホームルームは終わりを告げた。

さすがに昨日のように教室に残る生徒は少なく、五班の皆も各々帰る用意を始めていたので、僕もカバンを持って早々に教室を飛び出した。

「……………」

声が出ないように気を引き締めてから、廊下で大きく伸びをした。体育会系という訳ではなかったが、体を動かさないでいると、全身が凝り固まるような気がしてしまう。

「……大丈夫ですか？」

そこに、後ろから声を掛けられた。体勢を戻して振り向くと、多香子さんがこちらを心配そうに見つめていた。

「ああ、うん。ちょっと、体を伸ばしてただけだから」

「そうでしたか。……腹痛でもお抱えなのかと思いました」

「大丈夫だよ」

とても恥ずかしい。何と言う事のないように思えるかもしれない

が、伸びの瞬間を誰かに見られるのは、少なくとも僕にとっては火が出るほどに恥ずかしいことなのだ。

相手が、せめて多香子さんで良かった。空氣的に、走り去りたくなるほど恥ずかしくはない。

「そうですね……ちょっと可愛かったですよ」

僕はその場を、風のように走り去った。

夕飯は、残り物のカレーとうどんの組み合わせ……と見せかけて、まさかのハヤシうどんだった。その名の通り、ハヤシライスからライスを取り除き、うどんを加えた料理である。

「……なんでやねーん」

「あら、どうしたの？ うどんより、ナンの方が良かった？」

母は、大真面目である。これだからタチが悪いのだ。

ただ、味自体はそう悪いものでもなかった。ブイヨンとうどんの絶妙な響き合いを、トマトの風味が綺麗にまとめている。うどんを食べ終わった後に残ったダシも、そのままビーフシチューっぽく食す事が出来る点で素晴らしい。

「ごちそう様でしたー」

僕はお皿を軽くお湯で洗った後、自分の部屋に戻った。

昨日ダウンロードしておいて聴き損ねたお気に入りのウェブラジオを、部屋中が満たされるぐらいの音量で掛けた。

『そーせききょーだいっ!』

タイトルコールが出落ちになるほどに変わったタイトル名だが、内容はラジオにして自由奔放、終始明るい番組なので、聴いていて疲れる事がなく、僕は人生中で聴いたラジオの中では、この番組が一番好きだった。まだ四半世紀も生きては居ないが。

四十分ほどで聴き終わり、僕は体を起こした。携帯電話を開こうとして、焦る。

(台所に置き忘れた……!)

携帯電話に一定時間触れないというだけで手が震える人も居るが、僕は母に携帯電話を触れられると全身が震える。あの人は、携帯電話を勝手に見るのだ。そして更には、その履歴についてからかってくる。

急いで、取りに階段を下りる。案の定、携帯電話は既に母の手に落ちていた。

「にやにや。あんたも隅に置けないわねえ♪」

「もう……勝手に見るの、止めてってば」

昨日メールを全件削除して、その後通話を一回しかしていないはずだから、母のこの満面の笑顔は、ご飯から今までの間にメールがあつた事を如実に物語っている。

隠そうとする母から電話を分捕って、階段を上りながらその内容を見た。

『FROM 久美" kumicum@zeweb.ne.jp』

件名…無題

本文…

『そうだ、部活をしよう!』

分からない。母がこのメールを見て、どこににやにやしていたのが全く分からない。

とりあえず、詳細を訊ねるメールをする。返信はすぐに来た。

『FROM 久美”kumicum@zeweb.ne.jp”
件名…Re…Re…Re…無題

本文…

重郎とか、スバーンと同じ部活に入ったら、退屈しないで済みそうだしさあ。

あとは、クラスの子に誘われたりもしたんだよねえ』

何部に誘われたの? ……送信。

『FROM 久美”kumicum@zeweb.ne.jp”
件名…Re…Re…Re…Re…無題

本文…

自然科学部。白水優ちゃんって子に誘われたから、ここはちゃっかりんとうっちゃおうかなあと。

青春を謳歌するためには、部活を大事にしないと!』

僕は頭を抱えた。そもそも、まだ出来ていない部活である。それに、自然科学になど、全く興味がない。

だが、久美は不思議なほどに乗り気だった。三度四度とやんわり諫め、五度六度と強く否定したが、久美の熱は全く冷めなかった。

『FROM 久美”kumicum@zeweb.ne.jp”
件名…Re…Re…Re…Re…Re…Re…
本文…

ありがとう！
おやすみっ！』

結局、押し切られてしまった。久美は満足そうな絵文字と共に、こちらの気が変わらないうちにと引き上げていった。

僕が入るとして、五班の皆は一人でも入ってくれるだろうか。重郎は？ 朋絵さんは？ 多香子さん、佐奈さん、明菜さんは？

暗雲が、立ち込めつつあるような気がした。

また、六時二十四分と言う、目覚まし時計泣かせの時間に起きてしまった。また鳴るのを止めるのがわずらわしく、僕は先にスイッチを切って置いてから、顔を洗いに行った。

（あゝ……テストだっけ）

手遅れになった重要情報を思い出しながら、昨日に続いて早くに出掛けてしまった両親の書置き通りに置いてある朝食を食べ始める。昨日の残りのハヤシライス……と見せ掛けて、昨日の残りの素うどんである。

ただのうどんだが、それなりに美味しい。誰にともなくごちそうさま、と言ってから、僕は部屋に戻って何週間か前に貰ったまま放置していたテキストを引き出しから出した。

『新入生歓迎実力判断テストの結果は、直接成績には関わりませんが、

著しく低得点だった場合、関心・意欲について考慮する可能性がある

ります』

うわぁ、不吉。長いテスト名は、その重要性に比例しているのか
反比例しているのか。

表紙をめくると、まずは大きく『国語科』の文字があり、すぐ下に小目次があった。文章読解、古文漢文、漢字の成り立ち、ことわざと慣用句……。

眠気を感じた僕は、それを静かに閉じて引き出しに嚴重にしまいきんだ。

「行って来ます」

半ば独り言のように言って、家を出る。

今日は、昨日とは違うルートを通るつもりだ。昨日のように朋絵さんと出会って、道に迷ったと泣きつかれると、二度目の二人で登校が実現してしまう。朋絵さんには悪いが、今日は避けて行こう。

「あうー……学校うー……」

と思っていたのだが、大きな交差点に差し掛かった時、左側の道からぐったりうなだれた朋絵の姿が目に入った。何故か学校側から歩いて来ている。僕はとっさに電柱に隠れ、朋絵さんの動向を見守った。

「あうー……あうー……」

幸運にも、彼女はこちらに気付かず、真っ直ぐ右へと歩いて行った。まるでゾンビのようだ。朋絵さんに、心から心だけで心持ち謝っておく。

その後も警戒して登校したお陰で、誰にも会う事なく学校に着く

事が出来た。

「あ、おはようございます」

「……うん、おはよう」

だと言うのに、教室に入ると、朋絵さんは真っ先に僕に挨拶してくれた。

あんなに冷たくしたのに……ではなく、さっき学校と反対方向に歩いていたのに、どうして僕より先に学校に着いているのだろう。

「んう？ 私の顔に、何かついてます？」

「あ、ううん。大丈夫」

とは言え、登校の様子を見ていたとも言えない。早くも、僕の学校の七不思議の、一つ目が埋まった。七不思議の一、朋絵さんのワープ。

「おはようございます、昂さん」

「あ、うん。おはよう」

そうこうしている内に空いていた席も埋まり、テスト直前にだけ訪れる、緊迫している様な、厳粛なような、そんな空気が流れ始めた。

前の扉が開いて、先生が入ってくる。定期テストほどの重要性も無いはずなのに、先生はスーツでビシッと決めていた。

「よし皆、自分の椅子に座ってや」

チャイムが鳴る。最初の五分間で、解答記入用紙と問題用紙が配られ、諸注意がされる。そしてそれが終わってからの一時間が、テ

スト時間だ。

「……諸注意は以上や。各自、解答を始めてええで」

かりかりかり。天国か地獄か、分かれ目の一時間が始まった。

「……よっしゃ、そこまでや。後ろから解答用紙だけ回収してな」

全く駄目だった。半分以上の問題は久しぶりすぎて答えに窮し、一部の問題に至っては、初めましてと言うレベルだった。

後ろの朋絵さんも似たようなものらしく、机に突っ伏してしくしくと泣いていた。五班のメンバーを見回してみると、多香子さんが平静、明菜さんが満足げ、佐奈さんが余裕、重郎がガッツポーズ……。重郎も中学校の頃から、アレでいて頭が良かった事を考えると、僕と朋絵さんが五班の低成績ツートップになりそうだ。

「はぁ……」

朋絵さんを真似して、僕も机に突っ伏した。

その日の学校での用事は、それで全部終了だった。何か分からないが、今回のテストに込められた学校側の強い意志を感じる。嫌な話だ。

帰ろうとする五班の皆を呼び止めて、僕は自然科学部への入部について話した。

「めんどい」

「何だか、帰りにくくなりそうですよねえ」

「パスだ」

「遠慮します」

「入らない」

一斉に嫌がられた。嫌われすぎている自然科学部の罪は大きい。

「どうして？」

一同に訊く。

「人が多いし。あと、自然科学部怖い」

「結構な人数ですし……」

「人ごみは嫌いだ」

「本を読むには、大所帯過ぎるか」

「クミミが怖い」

明菜さんを除いて全員が心配しているのは、五班まるごと入った時の部員数だった。全員が入ると、少なくとも八人になる。騒がしくなりそうなのは間違いないかった。

「そもそも、活動しないのに部員になるのは、ちょっとまずいんじゃないです？」

「うーん……。とりあえず、一組行こっか」

旗色が非常によろしくないなので、僕は話を切り上げて、半ば強引に皆を一組に誘った。

一組は四階にあり、辿り着くまでにそれなりに骨が折れた。口々に文句を言い出す皆を、リーダー権限を無理矢理に用いてなだめ、ようやく一組に辿り着くと、ちょうど扉から久美たちが出てくるどころだった。

「おおー。スバスバっ！」

久美と、優さん。そしてあと一人、見かけない女の子。前に久美が話していた春花と言う子だろうかと思って訊ねようとしたが、誰かに服の背中を掴まれて勢いをなくし、振り返った。

「……えーと、明菜さん？」

久美に怯えた明菜さんが、服をぎゅっと掴んで背中に隠れていた。凄く可愛い。これが萌えと言うものか、と僕は一つ悟った。が、和んでいる暇はない。

「ひゅーひゅー♪ スバスバったら、モッテモテえー♪」

「にゃーるほどにやるほど、モッテモテー！ あ、初めましてー、一年生の花こと高木野春花だよ、へいっ！ いえい！」

「あ、うん。……ええと、武田昴です。よろしく」

「いえい、よろよろー！」

凄い勢いだ。見えない力に押されて、何歩か後ずさってしまふ。僕の後ろに居た明菜さんは、僕の後退によって横に押し出され、しぶぶ前に出て、春花さんと握手を交わした。それから、久美の目を恐れるようにして、今度は佐奈さんの後ろについた。久美もそれに気付いて、いつ食い付いてやろうかと目を光らせる。

「……うむ。明菜嬢は私の物だ。譲らんよ」

佐奈さんが、振り返って明菜さんを捕まえ、くすぐるようにして抱きしめた。

「ええー、公共物公共物！」

「渡る世間は鬼ばかりとはこの事なのか……」

明菜さんは諦めたような表情で、この世の不条理と力による支配の恐ろしさについて考えているようだった。

「そしてー、ここにおわすのがあー……じゃんじゃんじゃーん、じゃじゃん！」

「……騒がしい子だわ。さて、七組五班の君たちは、入部の意思を伝えに来たのよね？」

ああ、そんな用事だった。気を取り直して、本題に入る。

「その事なんだけど……僕はともかく、こっちの五人にやる気がなくって」

「それは由々しき科学的な問題ね。……そうねえ。活動場所の化学実験室は、空調力学的に夏は涼しく冬は暖かいわよ？」

「空調力学って、エアコ……」

僕は途中で声を失った。

あれだけ、難攻不落そうだった五班の皆は、空調力学の効果によって、全員が入部の意思を表して手を上げていたのだった。併せて明菜さんがその間に、佐奈さんの魔の手から脱出した。

「以上。武田君だっけ。質問は？」

「……おみそれ致しました」

「素直でけっこう。これで九人ね……予算も、錬金術的に転がり込んでくる……いえす！」

優さんは笑顔で、手を振り上げて見せた。明菜さんがくるくる回

る。

「……あれ、九人？ 八人じゃない？」

「私とー、スバスバとー、明葉ちゃんどー、重郎とー、佐奈さんに多香子さんに朋絵さん、あと優ぴょんと、春花っちで……九人かなあ。スバスバ、大丈夫？ 疲れてる？」

「あ、春花さんも入るんだ……」

「じゃんじゃんー、ヘイツ！」

前途多難な未来が、垣間見えた。だけどそれはとても、楽しそうな未来だとも思えた。

始業式の日から創部申請を出していたらしく、明日には部活動として最初の活動を行える運びになっているらしい。明日は木曜日、まだ午前中に授業が終わってしまう日だ。

「明日は一応最初の日だから、全員出席してね。開始は、十一時から。場所は化学実験室、以上！」

終了時刻を告げなかった辺りがまた怪しいが、あえて突っ込まない事にした。そうして、自然科学部の創部前における話し合いは、解散となった。

今日の晩御飯はハヤシカレー……さすがに飽きて来た。とは言え舌はそうでもないらしく、おかわりまでしてしまった。

部屋に戻って携帯をいじっていると、昨日に続いて久美からのメールが届いた。

『FROM 久美” k u m i c u m i @ z e w e b . n e . j p ”』

件名…無題

本文…

ゆ〜ったりま〜ったり。お風呂って良いねえ』

今日は雑談スタイルのようだ。ちょっと迷ってから、『そうだね』
とだけ返信する。

『FROM 久美” k u m i c u m i @ z e w e b . n e . j p ”

件名…Re…Re…無題

本文…

今想像したでしょ。へんたーい』

久美は、幼馴染の僕から見ても、あまりスタイルの良い方ではなかった。すらっと細く、女の子らしいラインをなぞってはいるのだが、最も重要な部分が足りない。つまりは胸が貧相なのだ。よって、想像したらドキドキはするだろうが、特にえちい要素はない。

(シャワーなら……)

煩惱に呑み込まれそうになるのを頭を振って逃れ、『全然』と返信する。

『FROM 久美” k u m i c u m i @ z e w e b . n e . j p ”

添付ファイル” H 2 3 | 4 | 0 3 | 2 0 2 4 . j p g ”

件名…Re…Re…Re…Re…無題

本文…

えー？ ほら、画像送るしさ』

絶対に違うと分かっているのに、わずか千分の一の可能性すらないのに、万が一にもありえない事は明白なのに、男には添付ファイ

ルを開かねばならない時がある。今がそれだ。

ディスプレイに現れたのは、お決まりの赤目女。でも、これはこれで可愛く……ない。

『FROM 久美” k u m i c u m i @ z e w e b . n e . j p ”
件名… R e … R e … R e … R e … R e … R e … 無題
本文…

ほら、分かってても開いちやう私の魅力ってヤツ、えっへん』

ちよつとだけ悔しい。ただ、一昨日や昨日のアンニュイな感じから、久美が復活したような気がして、それを上回って嬉しかった。

目が覚めた時、時計は六時二十九分を指していた。

体を起こした後、頭がはつきりとするまでうとうとと揺れている間に、時計の表示する時間は三十一分に変わった。目覚ましのベルは鳴っていない。

(あれえ……)

目覚ましのスイッチはちゃんと入っている。つまり、時計の目覚まし機能は、月曜日以前から壊れていたのだ。火曜日の時点で早合点してしまったが、今週に入ってから目覚ましは一度も鳴っていないかった。

ちよつとした笑い話になるな、と思いながら、一昨日から三連続で家に居ない母親が作り置いてくれた、カレーパンを食べる。わざわざスーパーで買ってまでカレーにまとめる必要はないと思うのだ

が、味は中々だった。

「行って来まーす」

丹念に準備の再確認をして、家を出た。

家を出て一つ目の曲がり角で、早くも朋絵さんと出くわしてしまった。しかも、子供を連れている。逃げる暇もなく、朋絵さんは僕に気付いた。

「おはようございます」

「うん、おはよう。その子は？」

小学校六年生ぐらいの子。ニコニコと、無邪気そうな笑顔をこれ見よがしに振り撒いているその顔は、どこか朋絵さんに通じるものがある。

「私の妹の、誼絵です」

「すばるさん、初めまして、おはようございます！」

「おはよう。初めまして、誼絵ちゃん」

凄くはきはきと挨拶をする、活気に溢れた子だ。話を聞いて行くと、朋絵さんが道に迷わないように付き添いに来たらしい。彼女が通っている中学校とは開始時刻が違うだけで方向が一緒なのだそうだ。

中学生に付き添いされる高校生と言うのも妙な図だが、それ以上に二人の仲の良さがとても目立っている。この年頃の姉妹なら、もっとギスギスしていても良さそうなのだが。

「お姉ちゃんは、いつもこうなんですよー」

気さくに話しかけてくれる誼絵ちゃんの話聞きながら、登校した。

午前十一時。五班メンバーを連れて、僕は化学実験室へと向かった。

着くと既に、実験室の電気は点いている。中に入って見回すと、既に他の三人は椅子に座って待機していた。

「遅かったわね、サブキャプテン」

「うん。ちょっと長引いてさ。……って、誰がサブキャプテンって？」

「もちろん君」

七組五班六名のリーダーとして、副キャプテンにちょうど良いと思ったらしい。特に仕事も出席しないといけない会議もないらしいので、一応引き受けておいた。

「とりあえず予算は出たから、明日までに実験装置第一号を作っておくわ」

「わーい、アイス買お！　アイス！」

春花さんが、予算と言う言葉だけに反応して、どこから持ってきたのか分からないカスタネットを叩き始める。頭が痛そうに、優さんは言った。

「……久美。この子の保護者はあなたよ」

「ほーら、春ちゃん。アイスじゃ氷だよ？　ちゃんとアイスクリームーとか、ソフトクリームーとか言わないと」

「了解！ ソフトクリーム買お！ ソフトクリーム！」

久美に頼んでもこう言う結果になるのは目に見えていたのだが、優さんは驚きの表情を持ってそれを迎え、今度は僕に向いた。

「……サブキャプテン、久美の保護者に君を任命するわ」

「えー。ソフトクリーム、ダメなの？」

どうせなので、僕も乗っかって訊いてみた。優さんは、駄目に決まってるわ、とだけ言って、そっぽを向いてしまった。ちよつと機嫌を損ねてしまったらしい。

「ソフトクリームは和製英語だ。だから、優も怒ったに違いない」

隣で、明菜さんが冷静に分析を始める。

「英語じゃ、なんて言うんだ？」

「ソフトアイスクリームと言う。昨日の帰り、佐奈に教えて貰った」

「あのプラムソフトは、中々の味だったな」

既に二人で帰ったりしているのか、と思って、二人で登校した事を思い出した。男女である事を除けば、そんなに特殊な事でもないようだ。

多香子さんが、早くも読み始めていた本にしおりを挟みながら訊いた。

「では、アイスクリームはどのような意味になるのでしょうか？」

「……私には分かんない」

「軟らかい軟膏」

優さんが机に腰掛けて言った。さつき少し悪くした機嫌の事はどう忘れたらしく、微笑みをたたえながらこちらを見ている。

「なんこう……って何です？ 落語？」

「まあ、朋絵嬢は放っておくとして、なるほど。クリームで軟膏か」

佐奈さんが大きく頷く。軟らかい軟膏を食べる所を想像すると、かなり気持ち悪い。そもそも食用じゃない。

「オイントメントが正しい英訳だけど、そうよ」

「優たんが知識人……いえい？」

「失礼ね。それでも、そこそこの中学校で、そこそこの成績だったのよ？」

「それって全国的にもそこそこだよね」

僕の言葉にむっと顔を引きつらせ、優さんはすぐ横に置いてあった彼女のカバンから、青色の小さな手帳を出した。中学校の頃の生徒手帳よ、と言って手帳を投げ渡してきたので、僕は受け取って、表紙を開いた。

そこには、いつか雑誌で見た『全国の中学校で最もレベルの高いところ』ランキングで、二位を獲得していた学校の名前が、至ってスマートに小さく書かれていた。その雑誌によれば、その中学校の現役三年生の一割は、日本の最難関大学である東京大学の入試試験で、八割以上の得点を取れるほどののだ。そもそも、その中学校への入学試験が、既に私立大学の平均ぐらいの難易度があるらしい。

「……えー」

「あら、まだ不満なの？」

「いや、ちょっとおかしい人だなあ、と思ってたのになあ、って」

「同感ヤシマ！」

同じぐらいおかしな人である春花さんも同意してくれる。優さんは一度顔をしかめたが、すぐに緩めて溜め息を吐いた。

「……まあ、良いわ」

「それより誰か、なんこうって何なのか教えてくださいよ……」
「んー、よしよしー」

久美が、朋絵さんを撫でながら、軟膏についての詳しい説明を始める。その様子を見ている内に、また新たな疑問が湧いた。

「そんな超学生の優さんが、どうしてここに？」

「超学生って何よ。……この辺の高校じゃ、創部してすぐに予算が貰えるのはここだけなのよ」

誇らしげに優さんは言った。

「……え、それだけ？」

「十分すぎる理由じゃない」

「だってほら、もっと勉強出来る所に行った方が良いんじゃない……」

「高校の勉強なんて、もう要らないわよ」

それもそうだ。何せ、入学の頃から大学レベルの問題を解いている中学校なのである。高校の勉強はおろか、大学の勉強すら半分ぐらいは要らないのではないだろうか。

「糜爛剤は作っちゃ駄目ってのが、ちょっと誤算だったけどね」

「びらんざい？ 軟膏の進化系？」

「あら、知らないの？ 皮膚をただれさせる兵器。マスタードガスって、聞いた事ないかしら」

そう言うゲームが好きな僕には、親しみのある兵器だった。ゆっくりじつくりと効いてくる、残留性の高い化学兵器である。よくあるゴムの防弾着も通してしまうので、中々に凶悪なのだ。

「そんなの認められる学校に居たくないよ」

「そうかしら？ 自由って大事よ？」

天才の考える事は誰も理解出来ないそうだが、少なくとも天才と変な奴が紙一重なのは間違いないさそうだ。違うのは、それを実現出来るか出来ないかと言う点である。

「あら……そろそろ解散時ね。帰って良いわよ」

「……優さんは、どうされるのですか？」

「言ったでしょう？ 実験装置第一号を作るのよ」

部員九人の新部に下りる予算がどの程度が分からないが、そう多くはないと思う。何を作る気なのか気になったが、昼食時も近かったので、全員を引き連れて帰る事にした。

「……ずは解体ね……」

後ろでちよつと物騒な言葉が聞こえたが、これも気にしない事にした。

その晩のご飯は、グラタンだった。ついにカレー・ハヤシ路線を突破したらしく、久しぶりの新しい味に舌が感動を覚えていた。

お風呂から出てから少しして、久美から電話が来た。すぐに取り

のもどうかと思ったので、三コール目ぐらいで出る。

『やふー！　ぐーぐる！　ぐー！　えどはるみ！』

「……いつになく、テンション高いね」

『そう？　もう何か、楽しくって楽しくってさあー』

声は明るい。元々、集団でわいわいと騒ぐのが好きな久美の事だから、自然科学部をそれなりに気に入ったに違いない。

『いやあー。明菜ちゃんは可愛いし、朋絵っちは萌えドジおとぼけだし、さなさなは姉貴いーっ！　って感じだし、多香ちゃんは清楚美人だし、七組は粒揃いだねえー』

「一組だって、天才優さんとか、騒がし春花さんとか、中々珍しいクラスだと思うけど」

『んー、まあねえー』

話した三十分ほどの間、ずっと久美は上機嫌だった。やっぱり、久美はこうでなくてはいけない。

時間が遅くなって来たのでこちらから電話を切り、少しテレビを見た後、ベッドに入って眠りについた。

いつもと同じように、準備だけしてある朝ご飯を一人食べる。

(……………)

夕飯ならともかく、朝食を一人で食べる高校生は、そう少なくな

いと思う。それでも、一人で対面するご飯と言うのは、どこか味気ない。囲む、とまでは行かなくても、食卓を真ん中にして誰かと向かい合わせて食べるだけで、ひもじいご飯の何と美味しいことか。と、妙に暗くなってしまった心をどうにか盛り上げ、家を出た。

「行って来まーす」

鍵を、きちんと掛けておく。最近はこの辺りも治安が悪くなったと、父が嘆いていた。昔から住んでいる町だから、少しだけ悲しい感じもする。

慣れた道をゆっくり歩いていると、昨日と同じ交差点で、誼絵ちゃんに連れられている朋絵さんに出会った。

「おはようございます」

「うん、おはよう。誼絵ちゃんも、おはよう」

「おはようございますー」

連日の一緒に登校が、変な噂を呼ばなければ良いが。そんな事も考えたが、結局また二人と一緒に登校する事にした。

話題はもっぱら、誼絵ちゃんの事だった。朋絵さんによると、誼絵ちゃんはとても頭が冴えるらしい。

「道に迷いもしませんし……」

「それは、朋絵さんだけが特殊なんじゃない？」

「ですよー。お姉ちゃんが、ちょっと変なんです」

談笑しながら登校した。高校生にもなって、女の子達と一緒に登校出来るのは、やはり神様が居るからに他ならない。僕は、神様に感謝の意を捧げた。

「月曜日から午前午後の平常授業が始まるさかい、ちゃんと準備しときゃ」

五日間とは思えないほど長かった新入生の時期も今日で終わると思うと、これからの忙しい学校生活を思い浮かべて憂鬱になる。

中学校の頃には理科で統一されていた科目も、一年次では化学と物理に分かれている。これが、月曜日の一時間目と二時間目だ。頭の切り替え云々もそうだが、朝からするにはあまり良い授業ではない気がする。

(……でもまあ、どの授業もそうかも知れないけど)

何でも前向きに考えないといけない。二時間続く体育が、朝に回らなかっただけでも幸運だと考える事にしよう。

先生の終了の挨拶を聞いて、僕は化学実験室へと向かった。五班の皆も、昨日を踏まえて今日は誘わなくても来てくれるに違いない。

「……………」

「……………」

「……三人くらい足りないわね」

その期待は、あっさりと裏切られた。

多香子さんと、朋絵さん、それから久美が居なかった。一応教室にも探しに戻ったが、当然カバンもなく、既に帰宅の途にあるよう

だ。

「七五班が四人と、私と……五人も居れば十分ね」

「私だけあからさまにスルーするなんて、泣いちゃう！」

「優。春花は泣くと長い。優しくしないと駄目だ」

「うー、明菜ちゃん優しいっ！ 私感動した！ 泣いちゃう！」

春花さんと明菜さんは、昨日一緒に帰ったらしく、既にかなり打ち解けていた。昨日も佐奈さんと帰宅していたのだから、明菜さんのコミュニケーション能力には恐れ入る。

「ほれほれ、重郎ちゃん。飴舐めましゅかー？」

「……何だ、それ。漫才師春花の新手のギャグか？」

「え？ だって、七五三だし。五歳の重郎ちゃんは、千歳飴舐めるかなあーってさー」

春花さんが、やたらに重郎の頭を撫で回していた。力が入りすぎていて、重郎は痛そうに顔をしかめている。

「七五班だよ。優さんも、変な略し方しないだよ」

「七組五班じゃちょっと長いもの。何なら、そっちで考えてくれないけど」

「なら、宿題だ。土日で考えよう。月曜日の活動は大喜利で決定だ。良かったな、優嬢」

「良かないわよ……」

他のメンバーの間にも、壁はないようだ。そうになると、今日居ない多香子さんと朋絵さん、久美の事が気に掛かる。人懐こい朋絵さんや久美はともかく、物静かな多香子さんは馴染めるだろうか。

僕がそんな事を考えていると、また少し放置され気味だった優さ

んが、手を叩いて注目するように号令をかけた。

「……さて、じゃあ、昨日言っておいた実験を始めるわ。佐奈、この台車に装置が載ってるから、台車ごと持って来てちょうだい」
「うむ。と言う事だ、春花嬢」

「はい……ってなんでじゃボケー！ 昂っちにやらせろおー！」
「えー、人にやらせてばっかじゃ駄目なんだよ？」

「それ佐奈さんに言えー！」

結局重郎が押し付けられて、しぶしぶ運んで来た。

その、中々に大きい装置の外装を見て、僕たちは言葉を失った。
普通の紙よりも頑丈な作りになった、茶色の安価な箱……ダンボールが、装置のおよそ九割を囲っていたのである。

「見た目はちょっと悪いけどね。中身は、近代科学を大きく上回る代物よ。……多分」

「多分？」

「去年の今頃、実験用に山で穴を掘っていたら、謎の設計図が出て来たのよ。それがこれ」

「これは、どんな装置なんだ」

「分かんないわ。だから、実験するんじゃない」

優さんがにっと誇らしげに笑う。反対に、僕たちの顔は引きつった。一体何が起こるかすら分からない、設計主不明の、怪しい人が製作した装置で実験をして、よからぬ事が起きないとは言い切れない。

「それは安全なのか」

「簡単な構造だったから、そんなに危険ではないと思うわよ」

「確信は？」

「もちろん無いわよ。さ、そこに飛び出てるコードを、掴んでちょうだい」

かなり不安にさせる言い草だったが、まあ確かにこの見た目で、何か危ない事が起こると思えない。僕たちは頷き合って、そのコードを持った。

優さんが、スイッチらしき物を小気味良い音で叩いて、自分もそのコードを持った。

「……………」

五秒経過。

「……………」

十五秒経過。

「……………」

一分経過。

「……まだ？」

「どうやらガ設計図だったみたいね。離して良いわよ」

それぞれ慎重にコードを離す。優さんが、大きく溜め息を吐いた。ガ設計図はきっと、ガセの設計図と言う意味だろう。よくよく考えてみると、設計図は山に埋まっていたのではなく、山に捨てられていたと考える方が自然だ。そんな物が、動く筈もない。

優さん以外はその辺の結論に至ったようだったが、優さん一人が納得出来ずにいがいと怒っていた。

「今年分の予算使い切ったのに……腹立たしいわ」

「……え？」

「残りは十円玉が何枚かだけよ」

「ソフトアイスクリーム、食べられないのか……」

明菜さんが、悲しげに目を伏せた。元々ソフトクリームを食べられはしなかったのだが。

ひもじい。創部から数日を経ずして、自然科学部は無予算での活動を強いられる事となった。

昼食時が近付いて来て、一人まだぶつぶつと文句を垂れている優さんを残し、僕たちは帰る事にした。

成り行きで、久しぶりに重郎と二人で帰宅する事になった。高校生になって初めて二人きりで歩いた僕たちは、クラスの事から知り合った友達の事、自然科学部の事など、様々な事を語り合い、感想を述べ合った。

「んじゃさ、んじゃさ。明日辺り、カラオケでも行こうぜ！」

「あー、良いかもね。重郎のジャイアンリサイタル」

「うっせえ！ ちょっとは成長してるっつの」

中学校では、マイクブレイカーの重郎は異常なほど有名だった。文化祭での歌唱力コンテストでスピーカーを壊してからは、単にブレイカーと呼ばれるほどの声量と音痴だ。

結局、明日に行く事に決まった。久美と三人で行こうか、と言う話でまとまりかけていたのだが、重郎が自然科学部の皆も誘ったらどうだろう、と提案したので、親睦会も兼ねてそうする事にした。

「じゃあ、家に帰ってから皆に訊いて、後で連絡するね」
「おう。了解」

カラオケなんて、何ヶ月ぶりだろう。

家と学校とのちょうど真ん中ぐらいの交差点で、僕が真っ直ぐ、重郎が左にそれぞれ進んで別れた。

家に着いて、早速メンバーにメールしようとして、重大な事実に気付いた。

（誰ともメアド交換してない……）

元々あまり携帯電話を使わない方だから、すっかり忘れていた。情けなかったが、仕方なく先に久美へと、カラオケへのお誘いとアドレスを訊くメールを送る事にした。その結果、土日は共に忙しく行けないとの事だったが、追記として優さんを除く全員のメールアドレスが書かれていた。さすがは、手が早い。全てのメールアドレスを、登録する。

お礼のメールを久美に送ってから、それぞれに明日のカラオケについてメールした。最初に返信して来たのは、佐奈さんだった。

『FROM 佐奈さん” plan15@zeweb.ne.jp”
件名…Re…昂です

本文…

奢れ』

なんと理不尽な。フリータイムでも千円ぐらいの出費になる。

三分の一ぐらいなら持ってもいいけど、と返した。

『FROM 佐奈さん” plan15@zeweb.ne.jp”
件名…Re…Re…Re…昂です
本文…
なら行く』

現金な人だ。場所と時間は後で連絡する、と佐奈さんへ返信したのと同時に、今度は二件のメールを受信した。

『FROM 朋絵さん” dstp@zeweb.ne.jp”
件名…Re…昂です
本文…
信也じゃなければ、行きますよ』

『FROM 朋絵さん” dstp@zeweb.ne.jp”
件名…無題
本文…
深・夜！』

酷い変換ミスだ。深夜に及ぶ事はまずないので、お昼頃になると思うけど、と返信する。

『FROM 朋絵さん” dstp@zeweb.ne.jp”
件名…Re…Re…Re…昂です
本文…
なら、参加してみます』

時間と場所は後で連絡する、と同じように返信して待ち受け画面に戻ると、すぐに今度は電話の着信があった。知らない番号である。

恐る恐る出してみる。

『いえすもしもし！ ……あ、こちら優よ』

「……え？ えっと？」

『科学的に、あなた達がカラオケに行くという情報を手に入れたのよ。ごく合法的にね。私も誘いなさい』

盗聴なんてものは都市伝説だと思っていたが、実在するのだろうか。現代社会の闇におののきながらも、特に断る理由も無いので、後で時間と場所を連絡すると言って、メールアドレスを聞いて電話を切った。

三連続のお誘い成功に心躍る僕だったが、その後、多香子さん、明菜さん、春花さんと三連敗し、ちょっと気を落としながら都合の良さそうな時間と場所を決め、全員に連絡しておいた。

明日が楽しみだ。四人ほど不在だが、それでも自然科学部員同士の親交を深めるには、十分すぎる舞台である。

(……よし)

ガッツポーズをしたこの時の僕はまだ、すっかり自分の音痴を忘れ切ったままだった。

絶好のカラオケ日和なのかは分からないが、目が覚めて部屋の窓のカーテンを開けると、雲一つない青空が広がっていた。今日は土曜日だが、あえて言うなら日曜日っぽい。

約束の時間は十一時、場所はこの辺のカラオケ店舗では格段の安

価を誇る、駅前のジャイカラで現地集合だ。じつくりと歯磨きをして、テレビを見ながらご飯を食べても、十分に余裕がある。

（そうだ、今の内にウォーミングアップしとこう）

部屋の中で、着信音にもしている名曲を歌ってみる。そうして、僕は自分の音痴を思い出すのだった。

十一時少し前にジャイカラに着くと、メンバーは既に全員揃っていた。

「遅いですよ〜！」

朋絵さんは僕の姿を認めると、すぐに口を尖らせた。私服……ではなく、何故か制服を着ている。

「ごめんごめん。でもほら、時間前だし」

「十分前行動は原則です！」

わざとらしく、腰に手を当てて怒る。その隣で、派手と言うほどでもない白い服を着た優さんが、溜め息を吐いた。

「あなた、ついさっき来たじゃない？」

「そ、それは、道に迷っただけで……」

「朋絵嬢なら、三十分前行動が丁度良いな」

そう言って笑う佐奈さんを、朋絵さんが抗議の意を持って小突いていた。

重郎は、僕の姿を見てすぐに受付に行ってくれていたらしく、それから少しして部屋番号が記されたバインダーを持って帰ってきた。

「二〇五号室だ。二階だな」

何度も来た事がある重郎に案内されて、僕たちは用意された部屋に入った。

二〇五号室は、数字が若いだけあって中はかなり広かった。十人ぐらい入っても、苦にならない気がする。逆に、一人や二人で利用するには、広すぎて不便と言う程だ。

先に注文しておいた飲み物が届くまで待つて、とりあえず各々選曲する事になった。

「優さんは、歌上手そうですね」

手馴れた手付きで電子歌本をいじる優さんを眺めて、朋絵さんが言った。

「カラオケなんて、前世ぶりよ？」

「そうなんです？ でも、真っ先に取りましたよね、それ」

「電子機器を見るとつい、ね。……はあはあ」

優さんは、思っているよりもずっと危ない人ようだ。そうこうしている内に、一番最初に曲を入れた重郎のジャイアンリサイタルが始まる。

「おー！ 冬休みー！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

重郎の歌は、中学校の頃から更に悪化していた。

「……うっし。まあまあだったな！」

「そう……かしら……」

重郎が歌いきった頃には、僕たちは佐奈さんを除いて全員虫の息となっていた。さっきまでの地獄絵図的な歌とは正反対の、朗らかな効果音と共に、得点が表示される。

『音程…49% テクニク…71／100 得点…61点』

「うおおお！ 自己最高だぜ！」

「うむ、おめでとう」

「……半分も音が違ったら、もう別の曲みたいじゃないです？」

続いて表示された、採点機能からのアドバイスのコメントには、『落ち着いて歌いましょう』とだけ記されていた。とても、正しい。次に演奏されたのは、朋絵さんの入れた『TAIFU』だった。

「~~~~~♪」

どちらかと言うとアルト声の朋絵さんの音域には、『TAIFU』は丁度歌いやすいようだった。のびのびと歌っているような感じがする。

「さっきの後で、天使の歌声に聞こえるわね」

「うん。かなり」

聞いていて心地良い。隣で重郎は、自分の方が上手いじゃないか、と言うような顔をしていたが。

曲が終わり、評価が表示された。

『音程…83% テクニク…83/100 得点…81点』

「……まあまあです？」

「朋絵嬢は、歌が上手いのだな。そのとは違って」

「そのって何だよ！」

最近の、利用者に媚を売る事を知らない採点機能が、八割オーバーの得点を出す事はけっこう稀である。大体、七十台後半を上下する事が多い。八十一点は、中々の高得点だ。

ちなみに、コメントは何故か『落ち着いて歌いましょう』だった。

「ほら、朋っちも俺と一緒にじゃねえか！」

重郎の言葉に、朋絵さんがかなりショックそうにへたり込んだ。

次に、優さんが選曲した『世代』が始まった。優さんはいつもの声と全く違う、明瞭で真っ直ぐな声で歌い出した。

「~~~~~♪」

「……やべえ、うめえ」

頑固な重郎が認めるほどの安定感だった。絶対音感でもあるのかと言うほどに、正確に、ごく正確に音を繋いでいく。

すっかり聞くのに夢中になったまま、曲は終了した。部屋は、満場の拍手に包まれた。

「褒められるのも、悪い気はしないわね」

優さんも、心地良さそうにその拍手を受け止めていた。

その後表示された評価は『音程…89% テクニク…75/100 得点…84点』、コメントは『ビブラートを意識してみましよう。こぶしを利かせるのも更なる高得点への道です』だった。

「優嬢は万能だな。ネギのようだ」

「それは嫌な喩えね……」

次はいよいよ……僕の番だ。曲は、『世界に溢れている花』。好きな曲よりも、まずは自分が何とか歌える曲を選んだ。好きな曲は、どう頑張っても上手く歌えそうにない

歌い出しでちよっともたついたが、ノリ始めるとそれなりに歌う事が出来た。

「〜〜♪」

「……あれ、佐奈さん、入れないんです？」

「ん？ うむ。今日は三分の一ほど昂に払って貰うのでな。大人しくしている」

佐奈さんらしくもない、謎のおしとやかさだ。何度も朋絵さんが入れるように迫ったが、佐奈さんは固く拒否したようだった。

そんな事に気を取られている内に、曲が終わってしまう。得点が表示される段になって、僕はぐっと不安になった。少なくとも、重郎よりは点を取らねばならない。

『音程…72% テクニック…80／100 得点…77点』

「よし、重郎に勝ったっ」

「俺に勝つとは……！ だが俺は、四天王の中で最弱、自然科学部の面汚しよ……って何言わせんだよ！」

「えー、僕のせい？」

低層での争いだったが、何とか制する事が出来た。朋絵さんからは中々上手でした、優さんからは精進しなさい、佐奈さんからはラッキーセブンおめでとう、とのコメントを頂いたが、画面に表示さ

れたコメントは『落ち着いて歌いましょう』だった。

「……それで、佐奈さんは歌ってくれないの？」

「ああ。歌ってあげない」

「気にしないし、歌ってよ」

何度か誘ったが、佐奈さんが電子歌本を手取る事はなかった。
無理強いも出来ない。

「じゃ、二周目だな。つまりは俺だ、俺だ、俺だぁー！」

地獄のジャイアンリサイタル・リターンが始まり、僕たちはまた
阿鼻叫喚の中に突き落とされていくのだった。

「……あー……喉痛え……」

うなだれる重郎を先頭に、五時間ほど歌い尽くした僕たちは店の
扉をくぐって外に出た。

最初に歌った時の雰囲気通り、優さんの歌は華やかではないもの
の正確で、一番上手だった。音程だけを見ると、正確さが九割を超
えている時すらあったほどだ。ただ、結構な数を歌ったと言うのに、
ずっとノンビブラートで通していた当たり、カラオケが初めてだと
言うのも本当らしい。

「私は耳が痛いかな」

結局、五時間の間一曲も歌わなかった佐奈さんが、耳を押さえる

振りをして言う。何度も歌うよう勧めたのだが、三分の一も持って貰うのだから、と言って譲らなかった。終始楽しそうだったから、本人が良いなら構わないのだが。

「あの電子本……何とかして持って帰れないかしら……はあはあ」

「そんなに気に入ったんです？」

「当然よ！……あのサイズであの動作速度……通信速度も申し分なかったし……はあはあ」

「変態だな。優嬢は」

全くの同意見だ。あと、そんなに先端技術でもない気がする。

駅前から少し歩いた所まで、今日のカラオケの出来について皆でわいわいと喋り合い、そこで別れて解散となった。

家に帰る途中、久美にメールをしてみた。が、返信は夜になって来ないまま、少しだけ寂しくなった。

日曜日。特に予定もなく、誰かからメールが来るという事もなかった。そこでそこふんだんにあるお金を持って、町を出歩いてみることにした。

スーパーの登場で段々と廃れつつある商店街に入る。シャッター商店街と言う程ではないが、昔からある駄菓子屋さんや八百屋さんが数を減らし、薬局や理髪店が多く入って来た分、昔ながらの商店街とは言えなくなっていた。

いくらか考えて、アニマートに入る。アニマートは、主にアニメや漫画・ライトノベルのグッズを取り扱うお店で、業界ではそれな

りのシェアを持つ大手だ。

『~~~~~♪』

マイナーな電波ソングが店内BGMで流れ続けるのも、このお店の特徴と言って良い。今流れている『one's teacher』は、入門編程度の電波ソングながら、僕を含めて一般人には、歌詞の意味すら分からない。とは言え、その道を極めた人に言わせれば、歌詞が聞き取れる間はまだ電波ではない、のだそうだ。

今放送しているアニメで詳しい物は一つしかなかったが、そのグッズはどこを探しても見つからなかった。唯一、雑誌の付録にそれらしい物がある程度である。

（仏様の日記帳、不人気なのかなあ）

僕自身、ここ二回ほど見逃しているのだが。他にも言って目を引く商品もなかったので、アニマートを後にした。

そのまま少し歩いていくと、見覚えのある小さな服が、商店街の路地裏に入るのが見えた。どうせなので、追い掛けてみる。

路地裏で立ち止まる後姿を見て誼絵ちゃんだと確信し、後ろから驚かそうと思って手を伸ばすと、誼絵ちゃんは思わぬスピードで僕の腕を掴み、強く捻った。

「い、痛い痛い。ごめんごめん、僕だよ」

「ああ、ごめんなさい。……ちよっと、匿って貰えますか？」

「え？」

「鬼ごっこ、してるんです」

僕が答える前に、誼絵ちゃんは僕の背中に隠れてしまった。路地裏だからかなり狭く、誼絵ちゃんが完全に隠れる為には、かなり密

着する必要がある。まだ小さいとは言え、女性に耐性の無い僕にとってには心房細動にまで繋がりがねない危険な状態だ。

その上、あまり人気のない路地裏なのに、こんな時に限って多く人が通りかかって来るので、誼絵ちゃんは長い間僕の背中にしがみ付いていた。

「……ありがとうございます」

ようやく、誼絵ちゃんは僕の背中から一歩離れた。

「ん……。子供は通りかからなかったけど、誰と鬼ごっこしてたの？」

「秘密ですー」

誼絵ちゃんはそう言って、一度お辞儀するとどこかへ走り去って行ってしまった。

子供は元気だなあ、と思う。日曜日でも走ろうと言う気になれるのは、多分中学生の最初の頃までだ。僕のようなインドアっ子ともなれば、小学校高学年の時点で既に、日曜日は半引きこもり状態だった。

（……ノートでも買って帰ろ）

ちよつとだけ意気消沈した僕は、近くの百円ショップで何冊かノートを買って、真っ直ぐ家へと帰った。

月曜日の朝。携帯電話を開いて真っ先に、久美にメールを送った。思えば、金曜日の夜から今日に至るまで、こちらが何度メールを送っても、一向に連絡がなかった。自惚れているのかも知れないが、三日連続で音沙汰がないと言うのは、結構珍しい事に思える。ちょっとだけ心配だった。

家を出る。どこか急いている自分を感じつつ、学校への最短距離を進んでいく。今日は、朋絵さんにも出会わなかった。いつもより三分ほど早く教室に着いて、携帯電話を開く。返信はない。

(珍しいなあ……)

何曜日のどんな時間でも、すぐにメールを返して来るのが久美なのに。そう思っている内に人が揃い始め、一学期最初の授業が始まった。

「えー。化学とは、えー、物質を扱う授業です。えー。これに対し、えー、物体を扱うのが、物理の、えー、授業です」

化学の先生の授業は、一言で言って眠たかった。声質もさる事ながら、毎度区切りごとに入る『えー』が、子守唄のような効果をもたらしていた。

大半の生徒があくびをし、一割ほどの生徒は一時間目から机に突っ伏して寝に入っている。その点佐奈さんは普通とは違い、真っ直ぐ黒板に向き合ったまま不動の体勢で目を閉じ静かに眠っていた。

「……と、言う事で、えー、次の時間から、えー……。原子量について、学びます。以上」

やっと一時間目が終わる。重郎などは、腕に自分でシャーペンを突き刺す事で、何とか一時間目からの快眠を避けたようだった。

二時間目、三時間目、四時間目と順調に終わり、お昼休みになる。僕は、朝の不安を先に消そうと、一組へ行ってみた。久美の姿はなかったが、幸い春花さんが居たので、声を掛ける。

「春花さん」

「わおう！ビックリしたー。何々？」

「久美、どこに居るか分かる？」

「んー……家かなあ？ 今日休みだよ、久美ちゃん」

ああ、なるほど。悪い風邪にでも当たって、寝込んでいるのか。返信がなかった理由まで、全ての辻褄が合った気がした。

「そっか。ありがとう」

「看病にでも行ってあげたら喜ぶと思うよ、幼馴染さん」

これまでの明るすぎる口調とは違い、落ち着いた雰囲気で春花さんが言う。僕は大いに頷いた。

六時間目後のホームルームを終え、焦る心を抑えながら初めての掃除を言葉少なにちゃちゃと済ませ、僕は小走りで化学実験室に向かった。先に待機していた優さんに事情を伝え、今日は先に帰ると言った。

「分かったわ。明日は顔、出さないね」

「うん。じゃ」

挨拶も最低限に止めて、さっさと化学実験室を出た。学校から久美の住むマンションまでは、川を挟んでいるもののそ

う遠くはない。自然が多く、目に入る光景の二割は緑と言うような道だ。美味しい空気をいくらか吸い込みつつ、ゆっくりとマンションまで歩いた。

久美のマンションのセキュリティ・システムは、オートロックのような素晴らしいシステムを採用してないらしく、フリーパスでエレベータまで辿り着く事が出来た。無用心だ。六階で止まっているエレベータを呼び出し、五階まで上がる。

やがてエレベータのドアが開き、五階のフロアが視界に入った。僕は、目を疑った。

「……く、久美？」

久美が一人、四階にある突き出した休憩所の、屋根に立って向こうの空を見ていた。屋根には、仕切りもなければ手すりもない。足を滑らせれば、五階から転落する事になる。落ちる先は、一階エンランスの屋根の上だ。

僕の言葉に反応して、久美はこちらを振り向いた。その久美の頬には、既に何滴もの涙が伝い、その涙は服の首元を冷たく濡らしていた。

「昂……すばるうう……」

鼻声で、久美は僕の名を呼んだ。どうして、そんな所で泣いているんだ。それじゃあ、まるで……。僕は、屋根の上とこちらとを分ける高い金網の前に走って、金網の間から手を伸ばした。

その時。久美は何を思ったのか、一瞬、涙の中に笑みを浮かべて見せた。

「久美！」

叫んで、金網をよじ登ろうと手をかけた。嫌な予感がする。大きな音が立つのも気に留めず、懸命に登った。

その僕の目の前で、久美の体が大きくひずんだ。僕が、声を上げる暇もなく、次の瞬間久美の体は高く宙に舞い、やがて僕の視界から消えていった。

……。

……………。

緊急治療室の前で、久美の両親は共に青ざめた顔をしていた。部屋のランプが消え、中から出て来た医師が、静かに首を振る。僕も、重郎も、そして久美の両親も、全員が声を上げて泣いた。

色々な事を聞かれた。久美が飛び降りる前の動作について。学校生活について。久美が抱えていた悩みについて。全て、記憶が朦朧としてはっきりしない。僕は、曖昧に答える事しか出来なかった。

呆然とした心のまま家に着く。事情を聞いたらしい両親は、無言で僕を抱きしめてくれた。また泣いた。

夜の十一時頃になって、ようやく冷静さが戻って来た。無力感と罪悪感、そして猛烈な虚脱感に襲われた。気だるかった。ベッドに入る気力もなく、僕はリビングのソファで一人座っていた。

十一時半頃、日が替わる前になって、誰かが家を訪ねて来た。両親は僕を氣遣って先に布団に入っていたので、仕方なく僕が出た。誼絵ちゃんだった。誼絵ちゃんは事情を知らないらしく、それなのによく分からない事を僕に話し続けた。冷静さが失われ、苛立って、怒鳴った。誼絵さんの表情が変わった。

「……目が覚めて、不思議な事があったら私の所に来なさい」

それも、意味が分からない。誼絵ちゃんは、そのまま帰って行った。

今更、目が覚めなくても、不思議な事は嫌と言うほどあった。何故、久美が身を投げたのか。投げなければならなかったのか。いや、そうではない。今の僕にとって、一番不思議なのは、もっと単純な部分。

久美が、何故居ないのか。

玄関に座り込んで、僕は泣きながら目を閉じた。

野木久美？・後

はあっ、と溜め息が聞こえた。

「見た目中々丁寧な設計図だったから、何かあるかと思ったんだけど……無かったわね。とんだが設計図よ。この装置、後で同じ山に埋めておく事にするわ」

閉じていた目を開く。眩しい光が、脳に刺激を与えた。

僕は、化学実験室に居る。皆も居る。見覚えのあるダンボールの装置が、目の前にある。

「今年分の予算使い切ったのに……腹立たしいわ」

優さんが、怒りをあらわにしながら苦々しく言い捨てる。見た事がある光景だ。

「ねえ、今日って何曜日だっけ？」

「あ？ ……おい部長さんよお、この装置なんかヤバかったんじゃないか？」

「……こんな事もあるわよ、ええ。今日は金曜日よ」

「……金曜日かあ」

明らかに何かが、間違っている。間違っているが、何が間違っているのか分からない。

記憶はかなりまだらで怪しかったが、徐々に明らかになるに連れ、久美が死んでしまった事だけは思い出した。涙が、また何粒も溢れ出てきた。

「……優嬢。こう言う場合の損害賠償がいくらになるか、知っているか」

「ど、同意の上だもの、私に責任はないわ、ええ」

久美が、死んだ。それは確か、月曜日の事だ。それなのに、今は金曜日だと言う。そもそも、僕は家で寝たのではなかったか？

そうして、朦朧とした記憶の中で、一番最後に聞いた言葉を思い出した。

「……誰か、朋絵さんの家、知らない？」

まずはその言葉通りにしよう。少なくともその言葉は、今の状況を的確に表しているのだから。僕は涙を拭った。

朋絵さんの家の場所は、明菜さんが知っていた。学校から十分ほど歩き、中々に大きな一軒家に辿り着いた。表札には、津田、と書かれている。

ためらわずに、呼び鈴を鳴らす。しばらくして扉が開き、朋絵さんが出て来た。

「どうしたんです？ 何か、連絡事項ですか？」

「誼絵ちゃんに会いたいんだ」

「はい？ ……よく分からないですけど、ちょっと待ってて下さい」

朋絵さんは不思議そうな顔をして中に戻って行く。

しばらくして、誼絵ちゃんが一人で出て来た。

「はい、私に何かご用ですか？」

「え……と」

言葉に詰まってしまう。どう言えば良いんだろうか。

「不思議な事があったら、会いに来てって誼絵ちゃんに言われたんだ」

結局、微妙な言葉選びになってしまった。

誼絵ちゃんは最初きょとんとしていたが、段々と表情が硬くなり、やがて僕に、中に入るように言った。言われるがまま、僕は家の中に入り、誼絵ちゃんの先導に従って奥の誼絵ちゃんの部屋へと入った。

「ありのままに、話して下さい。何があったのか。今どんな状況なのか」

どこから話すべきか迷ったが、僕は入学の時から今に至るまでの記憶を、覚えているだけ全部、つぶさに語った。久美のこと。重郎のこと。シャウト校長のこと。自然科学部のこと。変な装置のこと。カラオケのこと。久美の自殺のこと。誼絵ちゃんが深夜に僕の家に来たこと。そして今、不思議な事に曜日が戻ってしまっていること。全て話した。三十分ほどの間、誼絵ちゃんは顔色一つ変えずにそれを聞いていた。

「……そう。友人を亡くしたのね」

誼絵ちゃんの口調と雰囲気は、記憶の最後にある誼絵ちゃんのそれと、全く同じだった。明らかに、子供のそれではない。

全て聞き終わった後、誼絵ちゃんは大きく溜め息を吐いた。

「状況は分かったわ。原因も明らか。聞く？」

「え……うん」

「その装置、いわゆる禁忌の技術によるもの。具体的な説明はややこしいから省くけれど、とりあえずループしている」

「ループ？」

「そう。よく漫画とかアニメであるじゃない。ある時間からある時間までを、永遠に繰り返す」

一笑に付す事は出来なかった。今経験しているのは、確かにそういう現象だ。

「その装置、まだ学校にあるなら、ループは改善出来るかも知れない」

「……ゴメン、全然分かんないや」

「縦線を一本想像してみて。それが時間軸。人や生物、物質はそこにあって、時間軸が手前に引かれ続ける限り未来方向へと進んでいく。ここまでは良い？」

「……まあ」

分かったような分からなかったような……誼絵ちゃんの年齢も相まって、質の悪いアニメの設定にしか聞こえない。

「今私達は、その装置によって生み出された、別の縦軸、二つ目の縦軸に居るのよ。この二つ目の縦軸が不完全だから、ループする」

「うん……うん」

言っている事は分かるが、それが実際に起こっていると言われると途端に分からなくなる。起こる筈がない、と思ってしまう。だが確かに、この金曜日を経験するのは二度目なのだ。

「……やっぱり納得は行かないけど、一応分かった事にする」
「仕方ないわ。実際、絵空事のようなだから」

誼絵ちゃんは、上品に笑った。決して、子供らしくはない。

「とにかく、その装置を何とかするのが最優先」

「何とかなるの？ そんな、無茶苦茶な装置……」

「私ならね。……私は、特別な人だから」

「え？」

少し言いよんだのが気になって、僕はその意味を訊ねた。

「……一分が七分に感ぜられる。一日が、一週間に感ぜられる。この十三年間で、私は九十一年分の知識を得た」

「ええと。え？」

「パソコンで言えば、七倍の速度を持つCPUが搭載されているのよ」

頭の回転が良いとは聞いていたが、七倍ともなると相当である。今あるパソコンのCPUが七倍働くようになれば、素晴らしいソフトウェアが増えてくるに違いない。

「証拠は？」

「私は世界のあり方を知っている。それは、ループする前にあなたに忠告した、という所で証明されている。私にはその記憶、ないのだけれど」

「……確かに」

普通の中学生在が……いや、普通の人であっても、世界がどのような存在しているかなど、知る由もない筈だ。それが正しいかどうか

は分からないが、少なくともループしている事に気付いていたらしいのは、誼絵ちゃんしか居ない。何らか、特殊なのだ。

「でもどうして、そんな事が？」

「それは分からない。私も、知りたくて仕方がないのだけれど」

理由は無く、ただ誼絵ちゃんが人よりも数倍頭が回るという事実だけが存在している。それは実際の所、かなり不可解な事だった。だがどちらにせよ、彼女を信じない事には話が始まらない。

「じゃあ、誼絵さんで」

「受容力があるわね。……ループは取り消す事が出来るけど、それでも二つ目の縦軸と言う事に変わりはないわ。とても不安定。壊れたら、どうなるかは分からない」

「んー……難しい話は良いや」

複雑に過ぎる。と言うか、聞けば聞くほどに、漫画の話としか思えなくなってくる。

「そう？……ああ、その久美って子、まだ救えるわね。折角ループしたのだし」

「……おお！」

突然見えた光明に、思わず声が上がった。

久美を、救う事が出来る。他ならぬ、僕の手で。手から零れ落ちていってしまった大切な物を、もう一度掴むチャンスがあるのだ。

「優さんに感謝しないと」

「禁忌、だけどね。マッドなサイエンティストには違いないわ」

「そうかなあ……」

混乱したので、御歳九十一歳の誼絵さんに簡単にまとめて貰った。曰く、優さんの作った装置によってループするパラレルワールドに入っちゃった。誼絵さんが良い感じに修復してループしなくするけど、それでも不安定で壊れたらどうなるか分かんないや。でもまあ気にしても仕方ないので、この際ループをありがたがって久美を助けちゃえば良いんじゃないか。だそうだ。

「凄くよく分かりました」

「……なら、お行き」

追い立てられるようにして、僕は朋絵さんの家を後にした。

久美のマンションへ、途中まで走って、ある時気付いて久美の携帯に掛けながら向かう。電話は繋がらない。電源は切られていないようだが、何度掛けても留守番電話センターに繋がるばかりだ。

マンションに着いて、エレベータで五階まで上がる。月曜日……明々後日の月曜日の事が、フラッシュバックされて僕の不安を煽った。見えたその景色に、久美が居たらどうしようか。

当然の事ながら、エレベータが開いても久美の姿は見えなかった。ほっ、と胸を撫で下ろしてから、五〇三号室の前に立ち、呼び鈴を鳴らした。中でドタバタと足音がして、すぐにチェーン越しに扉が開いた。

「……どちら様かしら」

出たのは、中学校の頃の授業参観で一度だけ見かけた事のある、久美の母親だった。出来るだけ声を落ち着かせて、言う。

「えと、久美さんの友人の、武田と言います。久美さん、居ます？」
「武田さんね。ゴメンなさいねえ、久美、まだ帰ってないのよ」

申し訳なさそうに、久美の母親は肩を竦めて見せた。僕はお礼を言って、帰って来たら連絡するように伝えて貰う事にした。

「あの子、深夜までどこかに出掛けてる時もあるから、深夜になるかも知れないけど……」

「それでも構いせんので、是非」

「ええ、分かったわ」

快諾してくれた。恐らく、携帯電話を家に忘れていたとか、着信音が聞こえないほどのカバンの奥にしまい込んでいたとかだろう。だがあるいは、電話に出たくない理由があると言う事かも知れない。もしそうなら、久美は家に帰っても、僕に電話をしてくることはないだろう。

となれば張り込みである。コンビニで安いお弁当を買い、五階と六階を繋ぐ階段に腰掛けて食べた。お腹を満たしたら、今度は家に電話を掛け、今日は友人の家に泊まる、と伝えておく。

そして、階段に座り込んで、久美の帰りをじっと待つ。最悪の場合でも、久美は月曜日のあの時間に、ここに現れるのである。それまでは、待っていようと思った。それでとりあえず、僕の手の届かないところで久美が居なくなってしまう事は防げる。

(……………)

あの時の久美の様子を思い出す。

泣いて、休憩所の屋根に一人立っていた。僕に気付いて、振り向いて二度僕の名を呼び、そして笑った。それから、また向こうを向

いて、飛び降りた。

残念ながら、自殺以外の目的が見つからない。やはり、止めなければならぬのだ。

(……………)

昨日の夜……月曜日の夜に流し切ったと思っていた涙が、また溢れ出てきた。今日二度目だ。豪放な久美がそれだけ思い詰めていたのに、気付く事も出来ていなかった。それどころか、最近は何しろ元気になったと、喜んでいた。そして、飛び降りるのを止める事すら、出来なかった。

手で押さえて指でほぐしても熱い涙は中々止まらなかったが、ひとしきり泣いた所で泣き疲れてそのまま眠ってしまった。

「……………るさん、昴さん？」

声を掛けられて、飛び起きる。いつの間に来たのか、朋絵さんと誼絵さんが僕を覗き込むようにしてみていた。その後ろからは、オレンジ色の陽が差し込んで来ている。

「はぁ、探しました」

「ん。どうして？」

「久美さんが自殺するかも知れないんですね？」

ハッとして、誼絵さんを見た。誼絵さんは、最初に会った時のような年相応な表情をしている。僕の視線に気付いてか、口を開いた。

「もう一つの件は、上手く行きました」

「……………ああ。良かった」

ループが云々と言う件だ。こう言うのもアレだが、今の所どうでも良い事だ。むしろ、このまま久美がここに帰って来ず、別の所で死んでしまったら……と考えると、まだループしていた方がありがたい。

誼絵さんは続いて、朋絵さんの死角で、その事については伝えていない、とジェスチャーで伝えて来た。

「もう一つの件？」

「別件だよ。……それより、ありがとう。久美の事」

「友達ですもん」

久美が隠しておきたい事実が出てくるだろうから、皆には秘密にしておきたかった。だが、朋絵さん一人ぐらいなら、この際良いだろう。もう一度、深く感謝した。

「それから、天才誼絵も連れて来ましたよ」

「今の状況を、省かず余さず全て話して下さい」

どうやら誼絵さんは、朋絵さんに対してあの達観した口調と言うか、第二の性格は見せていないようだった。わざわざその事を追求しても何の意味もないので、気にしない事にする。

誼絵さんと朋絵さんに、ここへ来てから今に至るまでの一部始終……といってもこれと言った進展はなかったのだが、全てをつぶさに語った。二人とも相槌だけ打って反応を示さずに居たが、全部聞き終わって誼絵さんが口を開いた。

「……お姉ちゃん。何だか喉が渴いちゃいました」

「あ、はい。何か買ってきます」

誼絵さんの意図を察して、朋絵さんが階段を駆け下りていく。ち

よつと申し訳ない気持ちになったが、新しい縦軸だのループだのと言う話を聞かせる訳にもいかないから、仕方ないと割り切るほか無い。

「そうね。まずは携帯電話の所在から考える」

誼絵さんの雰囲気が変わった。二重人格と言うよりは、こちらが本性と言う感じである。あっちは、さしずめ仮面と言う所だろうか。

「一回目の金曜日、あなたはその子とメールをした。なら、今日のその時間には、その子は携帯電話を持っていたと言う事になる」

「うん」

「母親の話を信じるとすれば、その子は今日家に帰っていない。つまり、一回目の金曜日にも、家には帰っていないかったはず」

「……うん」

「なら今、その子は携帯電話を持っていなければならないの。なのに、電話に出ない。電源が切れている訳でもない。これは、明らかにおかしい」

言われて見れば、不可解だった。冷静になって考えれば、すぐに導き出せたであろう不可解さを、今の今まで全く気付けなかった。

誼絵さんは、更に続ける。

「と、すれば、電話に出られなくなるトラブルに巻き込まれたと言う事になる。それも、自殺してしまうほどのトラブル、そして周囲に知れ渡らないほどのトラブルに」

「……強姦とか？」

「あり得るわ。だけど現実的に言って、電話が繋がらなくなった頃……昼時ね。昼時に、そんな場所を通りかかる事はまずない。そんな行為に及ぼうという者もそうは居ない」

それもそうだ。しかし、そうなる……。

「……トラブルに巻き込まれようがない？」

「ええ。そして、大きなトラブルには巻き込まれず、ちょっとした事で連絡が出来なかったなら、土曜日や日曜日に連絡があるべきだった。つまりは、少なくとも金曜日から日曜日まで、携帯電話が使えなくなる理由は続いていたと言う事ね」

携帯電話を持ったまま外に居るのに、僕と連絡がつかない。電源は入っている。大きなトラブルに巻き込まれたとは思えにくい。なのに、携帯電話は日曜日の終わりまで使えなかった。

……全く分からない。そんな僕を見て、誼絵さんは訊いた。

「あなたの中のその子は、どんな子なの？」

「え……っと。活発で、明るくて、外向的で……って言う感じかな」

「そんな子が、深夜徘徊なんてすると思う？」

……。深夜徘徊をする理由も、徘徊する悪仲間も、久美にはない。深夜まで帰って来ない事が度々あるとすれば……いや、そうじゃない。そっちじゃない。

久美は深夜徘徊なんてした事がない……？ 久美の母親は、嘘を吐いている？ 久美は今でも、家に居る？ それを隠して、連絡さえさせない理由は……？

「久美は、虐待を受けている……の？」

「その可能性が一番高いと思う」

学校では、そんな様子はなかった。だが、幼稚園の頃から今に至るまで、久美が両親の話をした所を見た事はない。ずっと同じクラ

スだったのに、両親が授業参観に来たのは、中学校の頃のあの時だけだったのではなかったか。

間違いない。全ての状況証拠が、久美の被虐を認めている。

「けれど、絶対とも言い切れないわ。あとは、あなた次第」

誼絵さんはそう言うと、後ろを向いてこちらに背中を見せた。

「私はそろそろ帰る。他にも、色々と用事があるから」

「うん。……ありがとう。結局、全部任せちゃったけど」

「そうでもないわ」

小さい背中をこちらに向け、誼絵さんはエレベータの方へと歩き去って行った。

誼絵さんを入れ替わりで、朋絵さんが階段を上って来た。腕には、三本の缶ジュースが抱えられている。

「あれ、帰っちゃったんですか？ 一本、余っちゃいますね」

余らせるものか。僕はそう、強く思った。

久美が虐待を受けていると言う事を、一連の事と関連付けて朋絵さんに話した。一回目の金曜日についてだけは、話す訳にいかないので話さなかったが、朋絵さんは大体を理解してくれたようだった。虐待防止センター、と言うような所に連絡はしたが、本人からの連絡ではない事もあり、訪問調査は明日の午後以降になるようだった。勿論、それまで待っている気は無い。明日にはもう、久美が帰って来れなくなるかも知れないのだ。

(……?)

一瞬、何か違和感を感じる。だがそれも、それと同時に鳴り響いた携帯電話の着信音に掻き消された。

慌てて開いて、ディスプレイに表示された名前を見る。送り主は……滋野重郎。

「もしもし。何？」

『話は聞いてんぜ。突入すんなら、俺も混ぜろよ』

誼絵さんが上手く手を回してくれたようだった。何から何まで、本当に頼りになる。

『今一階に居るからよ。いつでも呼んでくれ』

「じゃあ、今すぐお願い」

『了解!』

二、三分で、重郎はエレベータから降りて来た。簡易に事情を説明し、突入して久美を連れ出す計画を練った。計画と言っても、みすばらしい物だ。強引に入って、強引に連れ出す。強行作戦である。行動は、早ければ早いほど良い。久美の苦しみは、早く取り除かなければならない。僕たちは扉の前に立って、呼び鈴を鳴らした。さっきと同じようなバタバタ、という足音と共に、扉が開く。

「……あら、さっきの方。久美はまだ帰ってないけれど……」

「いえ、今回はそうじゃないんです」

僕の言葉が終わるや否や、扉の陰に隠れていた重郎と朋絵さんが、扉を強く引っ張った。僕は急いで、チェーンに手を掛け、外そうと

力を込める。。久美の母親も、すぐに僕たちの意図を悟って、ドアノブを持って後ろに体重を掛けたが、重郎と朋絵さんの力に届かず、扉は動かない。次に僕の指を狙おうとしてか、ドアノブから手を離れたのと同時に、チェーンが外れた。

朋絵さんが扉を全開にして、重郎が母親を突き飛ばして中へと走っていく。僕もそれに続いて、廊下を進んだ。ダイニングらしき所へ入ると、久美の父親らしき男が呆然と立っていた。

「おい！ 久美はどこだ！」

「……………」

男は黙って、奥のふすまを指差した。重郎と僕が、横一線になってふすまへ向かい、勢いよく開ける。中には、久美の姿があった。だがもう一人、男が居る。

「うっせーな……あ？ ガキ。なんとかで何しとんじゃ」

「久美を連れ出しに来た！」

「そーか、んじゃ無理だからよ。早く帰れや」

どうやら、この男が主犯のようだった。久美は口をガムテープか何かで塞がれ、それでも僕たちを見て、目と唸り声で逃げるように伝えて来ている。

この男が久美の父親なのか。しかし、だとすると、さっきの男は一体誰だ。

「あん？ さっさと帰れっつーのが、分かんねーのか？」

男の声に耳を貸さず、僕は冷静になるよう努めた。まずは先入観を取っ去る。そして状況を並べ直す。客観的に見て、今の状況は…………。

「重郎」

「……ああ。さっきのが父親さんだな」

理由にまでは行き着けないが、恐らく今日の前に居る男は、久美を人質に取ってここに居るのだ。

全く話を聞かない僕たちに激昂して、男はナイフを出した。こちらに向けるのかと思ったが、男はそれを久美の目の前へと持って行った。

「帰れつつってんだろが、ガキ！ 舐めてっと女が痛い目遭うぞ？

あ？」

「……どうする、昂」

「……大丈夫」

僕がそう、小声で重郎に言ったのとはほぼ同時に、僕たちと男が対峙している脇にあるふすまが勢い良く開き、そこから飛び出て来た朋絵さんが、男に突進した。男は突然の事に驚き、ナイフを朋絵さんに向ける。僕たちも、今だとばかりに男に飛び掛った。

「久美さん！ 早く！」

最初に飛び込んだ朋絵さんが、揉み合いの中しつかりと久美の腕を掴んで男から離れる。そのまま、僕たちのせいで軽く腰を打ったらしい久美の母親の下へ走った。

「チッ！ 鬱陶しいガキ草どもが」

だが、僕たちは、男を押さえ付け切れなかった。僕と重郎二人がかりでも、男の力は数段強く、気が付けば僕たちは二人とも、男に

うつ伏せで寝かされていた。

「大層な事やりよったのお、あ？ 楽には殺さんぞコラ！」

逃れようと、暴れる。だが、男の力には抗し切れない。段々と、ナイフが首元へと近付いてくる。僕は、目を閉じた。

ダァン！

その瞬間、聞いた事もないような轟音が、部屋中に広がった。

「し、素人がチャラチャランなモン出すんじゃねえ！ 殺すぞ！」

僕の上で、男がかなり戸惑いながら、誰かを罵っていた。前を見る。そこには、アニメで見えるような拳銃を構えた、さっきの男……久美の父親が立っていた。

「怪我はない？ 君たちが時間を稼いであ陰だよ」

「早う下ろせや！ 早うせんと、こいつらの命はないぞ！」

再び、首元にナイフが突きつけられる。だが、久美の父親は柔らかに笑っていた。笑いながら、男に言った。

「チャカ野木って言ったら、有名なつもりだけどね」

「んあ？ …… マジっすか」

乱暴な口調だった男が、突然シュンとなった。ナイフが勢い良く外され、体が自由になる。僕は重郎と、顔を見合わせた。

「出てって貰えるかな、とりあえず。話は今度、ゆっくりと聞くらさ」

「へ、へへ……冗談はよしてくだせえよ……」

男はナイフを鞘に戻して、ゆるゆると力なくふすまを通り、少しして玄関で音を立てながら出て行った。

残った久美の父親は、拳銃を右手に持ったまま久美に駆け寄り、その頭を優しく撫でて、僕たちに言った。

「今日はとりあえず、帰って下さい。久美は大丈夫ですから。……これは水鉄砲ですし。音は、あのスピーカーです」

引き金を引かれた拳銃から、勢いよく水が飛び出した。その背景には、学校にあるような大きなスピーカー。大それた装置だ。僕たちは、大人しく帰る事にした。

「……あ、久美。ジュース、置いとくね」

帰り際、思い出して僕は、350mlのジュース缶を一つ床に置いた。

「……ヤクザ者が家に乱入、娘を人質に取ってにおいて何の要求もせず。しかも、その娘の父親は地域の組の幹部で、ヤクザ者はそれを知らなかった。……奇怪な話ね。辻褄が合わないすぎる」

僕の部屋のベッドに座り心地悪そうに腰掛けて、誼絵さんは言った。本当なら前に訪ねた誼絵さんの部屋で話するのが一番だったのだが、今日は何かと都合が悪いらしく、仕方なく少しだけ掃除をした

僕の部屋に招待したのだった。

「まず、この辺を仕切っている組の幹部の家だと言う事ぐらい、調べずとも分かるはず。それから、家に立てこもった目的も不明。謎だらけ」

「八方上手く収まったんだし、良いんじゃない？」

「……とてつもない能天気ね」

幼い少女を、ただ一人だけ部屋に上げるに当たって、まず両親からかなり白い目で見られた。自分でも、客観的に見てかなりよろしくない事をしているのは、よく分かる。だが、目の前に居る少女の声は、幼いそれとは全く似通ってはいないのだ。

全ての決着がついてホッとする僕を見て、誼絵さんは溜め息を吐いて言った。

「あえて言わなくても良いのだけど……。本当に、何の疑問も感じないの？」

「えー。うん」

「……人質に取られたその子が、何故自殺したのか。あなたには、見当がつく？」

「……ああ、そう言えば、それは今もって謎だ。人質になった状態から、何をどうすれば自殺と言う事態に陥るのだろう。」

「色々あったんじゃない？」

「……短慮ね。私も、簡単に虐待だと決め付けたのだから、言えなけれど」

予想が外れたのは久しぶりだと、誼絵さんは笑って見せた。実は、今日の今日……日曜日に至るまで、誼絵さんの話は六割ぐらいしか

信じていなかったのだが、今日様々な事を試してみて、信じざるを得なくなった。

まず、高校数学は理解しているだけでなく、解くのも非常に早かった。英語も上手い。そして、カードゲームも恐ろしく強かった。今日初めて知ったはずのルールを、巧みに利用して来たのだ。

「はあ……凄く疲れたのに、明日から授業と思うと心が萎むなあ……」

「一時間目は眠れるんでしょう？」

「あー……まあね」

あの授業をまた受けるのか。ちょっとだけ憂鬱になった。

「あ、そう言えば。飲む？」

手提げのかばんから、赤いプリントが特徴的なルーラ・コーラ・ジュースを取り出して、誼絵さんに手渡した。少しぬるくなってしまったが、まあ飲めなくはないだろう。

だが、誼絵さんはコーラに手をつけることなく、床においた。

「ごめんなさい、コーラは苦手」

「そっか。美味しいんだけどなあ」

僕は缶を捕まえてプルタブを引き、口を一杯にコーラで満たした。

月曜日、最初の昼食は、学食で思ったほどの苦難もなく手に入れ

たカツサンドを持って、一組へと走った。金曜日に会った以来、電話やメールで連絡し合ったりはしたものの、直接会っては居なかった。今日は、久しぶりに久美に会える日なのだった。

同時に、誼絵さんが感じた違和感、そして僕があの際に感じた、今では何なのかよく分からない違和感が、心にずっと引っ掛かってもいた。つまり、他に何か自殺する理由があったとしたなら……。今日は朝から、そんな悪夢を見た。

とは言え、そんな事は万に一つもありえないと分かってもいた。今日の朝も、電話まで掛けて来たのだ。

「久美ー？」

名前を呼びながら、一組の部屋中を見回す。かなり恥ずかしい行為だとは分かっていたが、早く久美の顔が見たい僕にとっては、些細な事だった。

「ありゃ。スバちゃんじゃん。何々、どうしたの？」

前と同じように、先に春花さんに話し掛けられた。嫌なデジャヴを頭から振り払って、久美の居場所を尋ねる。

「さっき、スバスバと重郎に会いに行くんだーと言って、七組に行ったよ？」

「すれ違っちゃったのかぁ……。ありがと、七組戻るね」

「きひひ、恋患いですなあ。うっし、面白そうだし、あたしも行く行くう♪」

うるさいお供が出来てしまった。でもとりあえず、今日は学校に来てくれるらしい。まずはとりあえず、安心した。

階段でも廊下でも所構わず、恋患いですなあ、青春ですなあ、と

繰り返す春花さんを何とか落ち着かせながら、一組へと向かった。
今日見た悪夢のせいでいくら寝不足だったが、進む足は勢いがある。

あと少して一組の教室、という最後の曲がり角で、今度は優さんに出会った。

「……科学的に、何か一人だけハブられそうな流れを感じたわ。私も誘いなさい」

「超能力者？ テレパシー持ち？ 優ちゃん凄いなあー」

「科学の力よ、いえす！」

久美救出の、陰の立役者である。心の中で、深くお辞儀をしていた。

（……でも、優さんも、やっぱり変人だよね）

冷静なのか、一匹狼なのか、お茶目なのか、さっぱり分からない。色々混在しているという感じがする。ただ、総合して、余裕があって有事には頼りにはなりそうだ。平時に頼りにするには頼りないが、教室の扉を開ける。中に人は少ない。だがしかし、僕の求める姿は、その中にあった。

「……ほほふ、ふははん。ほほひひふほほほほは」

「おお、スバちゃん。どこに居るのかと思った。と言っている」

口いっぱいにご飯を詰め込んだ久美が、生き生きと笑いながら、七組五班の皆に囲まれていた。通訳には、明菜さんが起用されている。

「ひんはいひはんはよ？」

「心配したんだよ?　と言っている」

「ひひふひひははっ……げふ、がふ。……ひははっはは」

「一組に居なかつ……げふがふ。居なかつたから。と言っている」

そう言うムードなら抱きしめるまではしようと思っていたが、全くそう言う感じではなかった。と言うか、明菜さんの翻訳能力が素直に凄い。

これで良い。こうして、日常に溶け込めるのなら、これが一番良いのだ。

「……早く食べないと、お昼休憩が終わってしまいますよ?」

多香子さんに急かされて、僕はカツサンドの封を勢い良く開けた。

六時間目、終わりのホームルームまで終え、僕たち七組五班は初めての掃除をする為に、社会科教室へと向かった。僕は二度目だが、一度目は心ここにあらず、という状態だったので、新鮮には違いなかった。

社会科教室は、七組の教室から見えるような距離にあり、行くのも容易い。僕たちは社会科教室に入ると、思い思いに箒を取ったりちりとりを持ったりした。

「つていやいや、ちりとりはまだ早いからさ」

「そうです?　……確かにそうかもですねえ……」

朋絵さんはちりとりを近くの机に置き、掃除ロッカーからちゃんとした箒を出して掃除を始めた。僕もそれを見てから、近くのごみを一箇所に集めていく。

「……面倒ですね」

「多香子嬢は掃除が嫌いか。これは意外だな」

「社会科教室は、授業で使わないですから。掃いていて虚しくなります」

大人しい性格から、掃除が好きそうな印象しかなかったが、多香子さんが一番に文句を垂れた。こう言う時に一番文句を言いそうな重郎は、中学校の頃から掃除好きで知られており、今日も無言で隅々まで掃きまくっている。

「多香子も、重郎のように掃けば良い」

「……明菜さんは何をしてるの？」

「総指揮だ」

リーダー命令で、雑巾係に左遷した。

机を動かして、掃く。戻して、集める。また別の机を動かして掃く。そんな作業を繰り返している内に、皆の士気が思わず上がり、十五分ほど掛けて部屋中をぴっぴかにしてしまった。

「これでぴっぴか？ 全然だろ。黒板舐めても大丈夫ってぐらいがぴっぴかぴかってもんよ」

重郎の意見はもったもっただったが、達成感が損なわれるので聞かなかった事にした。

掃除が終われば、次は自然科学部の活動である。今日は誰も帰る気はないらしく、全員で化学実験室へと入った。

「……………」

「うわ。……どうしたの、優さん」

入室早々、目どころか顔まで死人のようになっている優さんに睨まれ、少したじろいでしまう。僕に続いて中に入った七組五班の皆も、同様に硬直する。

「……盗まれたのよ……」

「何が？」

「あの実験装置……高かったのに……！」

うわあ。誰が盗んだのか、心当たりがありまくる。朋絵さんはその事を知らないようで、優さんの睨みにも気付かず、悠々と中に入って久美と談笑を始めた。

「でも、動かなかったんでしょ？」

「分解して再利用……リサイクル！ 私の、超科学的リサイクルの法が、何者かによって破られたのよ！」

超科学的って、科学を超えて科学ではないような気がする。

見えない仇に、一人で罵詈雑言を浴びせ続けている優さんを置いて、僕たちは化学実験室の奥へと集まった。

「……大喜利、だな」

誰もが忘れていた今日の議題を、佐奈さんが再び掲げた。金曜日の活動に参加していなかった多香子さんや朋絵さん、それから久美は、何の事か分からずに各々首を傾げたりしている。

「七組の五班……俺たちの呼び名、が今週のお題だったよな？」

「だっただった、優秀作品には……豪・華・商・品！」

「おお。何を貰えるんです？」

「……何かを？」

春花さんが無責任に僕を見て来たので、僕はその視線を受け流すようにして佐奈さんと目を合わせた。

「……一番面白くなかった者が、一番面白かった者の欲しい物を買う」

「ほほ、欲しい物の条件は？」

「千円以内、だな」

「よよ、よし来たあー、私参加するー！」

物に釣られて、久美が早々に参加表明する。だが、その久美を制止するように両手を大の字に開いて、明菜さんが言った。

「賭博行為は日本の法律で禁止されている」

「うむ。過去の判例から言って、この程度の金銭のやり取りなら、遊戯の内として認められるだろう」

「そうなのか……。しかし、生徒手帳にも、お金のやり取りはしてはいけない、と書いてある」

「私生活ではそうだろうが、部活動の一環だからな」

「むう……」

学級委員として、納得の行かない所が多々あるらしい。と言うか、一方的に明菜さんの方が正しい。だが、屁理屈を堂々と言う佐奈さんに、明菜さんも徐々に丸め込まれて行く。

「私は九九九スナックで参加する」

その内に、止める立場から進んで参加する立場に変わっていた。九九九スナックとは、小さい袋に包まれた煎餅の詰め合わせセット

の事で、その小袋には一つ一つに、一桁×一桁×一桁の数式と答えが書かれている。いわゆる、勉強菓子ジャンルの商品だ。価格は千円弱。千円まであと一円。

「げ。……千円ギリギリじゃねえか、それ」

「ロスは少なくする」

「さっすが明菜ちゃん、合理的いゝ！」

「……ならば、伊藤博文の描かれた日本紙幣、で参加するわね」

手と手を合わせてハイタッチする明菜さんと春花さんを他所に、優さんが参加表明をした。伊藤博文の描かれた日本紙幣とは、日本銀行が発行している千円札の事である。その価値はちょうど千円。

「あれ、参加するの？」

「当然。キャプテンが参加しないでどうするの。あなたも強制参加よ」

副キャプテンとして当然の役目らしい。元々そのつもりではあったので、新しい目覚まし時計を狙って参加する事にした。大体七百五十円ぐらいだろう。

その後、多香子さんが文庫本、朋絵さんが豚の貯金箱、重郎が明日の昼食、春花さんがカットキット……お菓子の袋を上手に切断する為の道具、久美がノート五冊、佐奈さんがお徳用十リットルのルーラ・コーラ・ジュースで、それぞれ参加を表明した。

「……皆さん、参加するんですね」

「これが、自然科学の求心力なのよ。いえす！」

「自然科学関係なさそうですけど……」

いつの間にか佐奈さんが持ってきていたくじを引いて、発表する

順番を決定した。

そこから、要暖房な大喜利大会が始まったのだが、あまりにレベルが低かったので割愛する事にする。とりあえず、中でも格段にレベルの低かった春花さんが、まだマシというレベルだった朋絵さんに豚の貯金箱を買うという事となった。

「その貯金箱で、失われた自然科学部の資産を集め直すのね。良い心得だわ」

「え、違いますよ」

「……………」

優さんの冷たい視線も、朋絵さんには効果がないらしい。そんな感じで、今日の活動は終わった。

校門を出た辺りで、後ろから追いかけて来た久美と合流し、僕たちは久しぶりに二人きりで下校した。夕焼けに少し足りないほどの、薄い橙色のかかった青空に太陽が燦々と輝き、夏が近付きつつある事を示している。

「ほんと、金曜日はありがとね」

久美が、珍しく改まって言う。

「金曜日……あの後さ、何か悪い夢見ちゃって」
「悪い夢？」

問題事は解決したはずなのに、いつになくトーンの低い久美の声に、つい僕は訊き返した。久美の視線は、まっすぐすぐ下の影に向

けられている。

「そ。昴が来なくて、私がずっと人質になって。その内、お父さんが拳銃を持って、向けて、引き金を引いて……。……。んで、私が死ぬの」

「撃ち外してってこと？」

久美は、首を小さく横に振った。

「色々あってさ。お父さん、上の人に拳銃使わないって約束してるんだよね。だから、もし撃って迷惑掛けちゃったら、制裁として私が殺されるって感じ」

「……何それ」

まるで、意味が分からない。何故そこで、久美が出てくるのか。だが、久美は昔から変わらない笑顔を見せながら、言った。

「ま、とにかく、借り一って事さねー」

「うん。……貸し一で」

「借りは仇で返すから、そこよろしくー」

「重郎に返しておいてね」

「いえす、さーっ」

すっかり誤魔化されてしまった。もう一度訊き直そうと思ってる内に、僕たちが左右に別れる交差点に差し掛かり、短く言葉を交わして一人の帰路に就いた。

「……何で居るの」

家の扉をくぐって、台所で洗い物をしていた母に声を掛けると、母は怪訝そうな、勘繰るような表情で、お客様が来てるわよ、と言った。誰だろうか、と思いながら部屋に入ると、日曜日と同じような位置と体勢で、誼絵さんが座っていた。

「情報の共有のため。知っておいて貰わないと困る事もあるから」

母があんな顔をしていたのは、二日連続で小さい女の子が家に来たからだろう。迷惑ではないが、変な評判が立つのだけは避けたい。

「朋絵さんに言っておいてくれたら、明日僕から行くのに」

「早いに越した事はない。……まず、普通なら抱くべき疑問に答えるわ。何故、あなたにだけ記憶があるのか。気にならない？」

「んー……ならないかな」

「……そう？」

誼絵さんは、少しだけ驚いた様子で僕を見上げた。

「受容力があるより先に、反懐疑的なね」

「まあ、うん」

「……答えは、たまたまよ。記憶が残るか残らないかは、運次第」

結論から言って、どちらでも良い事としか思えない。そんな僕の表情を見て、誼絵さんは小さく溜め息を吐き、母が出したらしいお茶を口に運んだ。

「今は、この世界を脱す方法を考えているわ」

「……パラレルがどうかって話？」

「そう。壊れやすいここから、安定した元へと戻らないと」

金曜日に聞いた話だ。その件についても落着いたのかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「今の所は、そんなもの。特に何かしろと言う事もないわ」

「そっか。……あ、そうだ。久美が自殺した理由、分かったかもしれないよ」

むしろ、今、頭を満たしているのはその事だ。僕が久美の父親の話をする、誼絵さんは静かに頷き、納得した、と呟いた。

「一度目の経緯は恐らく、父親が覚悟して発砲、その後その子を庇おうとしたけれど力足りず、思いつめたその子が身を投げた、ね」

「……何だかさ、おかしいと思ったんだ」

「今の所、矛盾らしい所はないと思うわよ」

「そうじゃなくて……」

久美の事情を公言出来ない以上、他に心を打ち明けるべき相手はいないのだ。僕は誼絵さんに、自分の考えを話した。両親の事情とは言え、何故久美が死なねばならないのか。何故そんな事が、久美の知らない所で決められているのか。それで、良いのか。

「……………」

僕が話している間、誼絵さんは無表情に、視線だけ僕に向けて静かに聞いていた。止めようとしなかったので、僕もつい感情的になって熱弁してしまい、五分ほど話してやっと冷静に戻った。

「……それで、あなたはどうすると?」

「どうすべきなのかな、って」

「改善したければ、その”上の人”に談判するしかない。あなたにそれが出来るの？ どうやってもどうしようもない事に不満を持つのは、あまり賢明ではないわ」

これまでになく厳しい言い方だったが、理に適っている。何より、何をすれば良いのか、明確に理解する事が出来た。

「……”上の人”に会う方法って、あるかな」

「人に頼っていてばかりでは駄目。自分の力で何とかすべきよ」

「誼絵さんの力を借りるのも、僕の力の内だし」

「……詭弁。分かったわ」

久美は、すぐに死ぬという事はないだろう。だが、今の状態が、久美にとって望ましい物であるという訳でもない。大事、特に命に係わるような事は、当人の意思によって定められるべきなのだ。そして今、そこに久美の意思が入っていないというのだ。やる事は、決まっている。

誼絵さんが、口を開いた。

「あなたの周りで、”上の人”に一番近い人は誰か考える。誰？」

「……久美のお父さん？」

「そうね。彼の力を借りるのが、最善策」

自分でもいつかは考え付きそうな発想だが、やはり誼絵さんは早い。

「会えるかな、”上の人”に」

「目的、見失ってるわ。あなたが会う必要は全くない」

ああ、そうだった。僕が久美の父親を説得し、久美の父親が”上の人”を説得すれば良いのだ。

「時間は掛かるわね。それに、急いでも仕方ない事よ」

「うん。分かってるよ」

「そう？」

誼絵さんは、珍しく可愛げに首を傾げて見せた。

それから少しして、誼絵さんは荷物をまとめて立ち上がった。

「帰るの？」

「……あまり遅くなると、都合が悪いだろうから」

どうやら、悪い評判が立つのを気にしてくれているらしい。それならあえて押しかけなくても良いのに、とも思ったが、素直に頷いておいた。

「これは別の話だけど」

部屋を去り際、誼絵さんは振り返って言った。

「一度目の日曜日、私は鬼ごっこをしていたそうね」

「うん」

「それはありえない。……つまり、私は何から逃げていたのか、という疑問が残るわ。それだけよ」

扉が開いて、また閉じる。部屋に一人残された僕は、何とも言えない不気味さを感じた。

翌日、六時間目を終えてのホームルームで、先週のテストが返却された。

(国語科49点……うわぁ……)

他も、見るに堪えない得点ばかりだった。唯一、英語だけが平均を軽く上回っていて、人に見せても恥ずかしくないというレベルである。

(誰にも見せないでおこう……)

かばんの奥深くにしまって、絶対出せないようにしておいた。テストの点数を訊かれないように、そそくさと一人で化学実験室へと行き、扉を開く。一体どんなトリックなのか分からないが、それでも優さんは息も切らさずに奥に座っていた。

「テスト、各教科ごとに分けて、机の上に置いて行きなさい」

「……嫌と言ったら？」

「モルモット化ね。……いえす、その方が良いわね、出さないでおいで」

自分の命と天秤では仕方がない。僕は、プライドの為に命を捨てられないタイプだ。ホラー映画では、大抵三番目に死ぬ。一番目が勇敢な男、二番目が不信症の男、そして三番目が僕。

そんな暗い思索でごまかしながら、紙ながらにして重々しいテスト用紙を机の上に並べた。優さんは、最初は目を見開いていたが、途中からジトーツとした目付きになり、全部並べ終わった時に僕に

言った。

「……頭が良いものだと思い込んでいたけれど？ 体育会系なの？」

「運動は苦手かな」

「……良い所なしじゃない。君には、モルモットがナイスな職業よ。何なら私が幹旋してあげても良いわ」

分かっている事だけに、改めて言われると腹が立つ。でも、じゃあどこが長所なのかと言われると、答えに詰まってしまうのも確かだ。コミュニケーション能力は中の下、誠実と言う訳でもなく、行動力もなく、当たり障りのない顔で……。

「泣きそう……」

「今泣かれたら私の所為みたいになるじゃない、駄目よ、駄目」

「まんま優さんの所為だよ！」

「本当？ ……きっと、君より点の悪いのも居るわよ。春花とか」

さすがの春花さんでも、平均点が73点の国語のテストで、49点を下回る事は出来ないと思う。

その内、皆が集まり始めて、僕が出したテスト用紙の上に、ほとんど重ねられていった。国語のテストで見えた点数は……64、41、43、91、62、77、96。

結構微妙だ。いくらか絶句した後、久美さんが静かに言った。

「……国語科の最高点は99の私。最低点は41の久美」

「てへへ」

「褒めてないわよ。……あら春花、どうやってカンニングしたの？」

「プロの技ってヤツ？ いえい！」

優さんの手で公表された春花さんの答案には、大きく『77点』

と書かれていた。更に意外な事に、明菜さんが43点という低得点に収まっている。かなりの謎だ。

「滋野君が62、須本さんが96、駒黒さんが91、津田さんが64」

「あ、俺達も名前で良いからよ、部長さん」

「そう？ ……あとは、昴くんが49」

おお。突然名前を呼ばれると、ちょっとドキッとしてしまう。どうも心の中にやけと顔のにやけは連動しているようなので、心を引き締めねば。

「……酷い結果ね……」

「そうです？ 結構、良い線行っただと思うんですけど」

「平均点を取ってから言わないと、説得力に欠けますよ？」

ごもつともである。だが、得点的に朋絵さん側の奥の方に居る僕は、突っ込むに突っ込めない。

「国語は苦手だ……」

「そのようですね。数学は、とても良い得点をお取りですし」

明菜さんの数学の答案には、『96点』の文字。国語は得手不得手の出にくい教科だと思っていたが、実はそうでもないのかも知れない。

全教科を見た結果、佐奈さんは余裕な感じのまま余裕な得点、明菜さんは国語以外はほぼ完璧、多香子さんはどっしり優秀、朋絵さんはぐらぐら平均点以下、春花さんは意外な平均越え、久美はどん底、重郎はそこそこ、優さんは満点多数、僕はボロボロ、という結論が出た。

「……自然科学部として、科学分野は平均点のダブルスコアぐらいは取って貰わないと困るわ。つまりは100点。一学期の定期テストでは、必ず取るように。オーケー？」

「うむ。そんな完璧主義の優嬢も、国語科と社会科が満点でないようだが」

「……文字数指定のある短作文は苦手なのよ」

そう言えば、それぞれ一問ずつ作文の問題があった。どちらも五点問題で、僕の自信満々で出した文章は二点と評価されていた。

「今日の活動は、珍解答で盛り上がりましょう会です？」

「おー。くるくるー」

そんな感じで、今日の自然科学部も、全員出席で活動が始まった。

「ベスト珍解答は、重郎さんの社会科から、問題が『円高になると輸出産業はどのような影響を受けるか、簡潔に記しなさい』、解答が『輸入産業に路線変更する』でした」

朋絵さんの発表により、何故か誇らしげに重郎が、優勝カップに見立てたビーカーを明菜さんから受け取った。そのまま頭上高くに持ち上げて、まるで金メダルを貰ったかのような笑みを浮かべる。

「……人選ミスね。サブキャプテン、解任。新サブキャプテンは明菜さん」

「どうして私なのか……」

「一番まともだからよ。科学的な消去法の結果」

在任一週間もなく、副キャプテンを解任された。元々ただの名誉職なので特に何か変わった事はないのだが、明菜さんはがっくりと肩を落としていた。

その帰り、僕は久美を誘って二人で下校する事にした。
理由は一つである。久美の父親に、会いに行くためだ。

「いやあー。部活って楽しいねえー」

「自然科学とは全然関係ない事してるけどね」

だけでも、中々その事を切り出すタイミングが掴めない。元来から、会話が得意な人間ではなく、しかも今回は格別言い出しにくい話題である。苦戦は元より予想されていたが、こうも術がない物とは思わなかった。

校門を出て、いくら歩いた後、久美がはつらつとした語気そのままに、

「今日、ウチ寄って行かない？」

と問い掛けてきた。まさに渡りに船で、僕が慌てながらうん、うんと二度頷くと、久美は訝しげに首を傾げて、

「もしかして、もうバレちゃってるのかなあ？
実は、新発売のジュースがあるんだけどさー」

と言った。

「へえー。なんて名前のジュース？」

「『ウィッチ・アップル・ジュース』。美味しそうっしょ？」

「どっちかって言う中毒々しそう」

どうやら、前のジュースのお返しとして、同じくジュースを飲ませてくれようとしているらしい。方法云々はさて措くとして、こういう律儀さはいつもの久美そのものだ。

「一リットルしかないから、コップ一杯で我慢してね」

「うん、十分だよ」

何やら毒見役をさせられているような気もするが、そういう気にさせて恩を売らないのも久美の良い所なので、好意的に受け取っておく。

あとは、久美の父親が在宅なら完璧なのだが。僕はそう、淡い期待を膨らませた。

side…久美

……。明らかに、昴はおかしかった。

幼稚園の頃から一緒の仲だからではない。高校生になってから、ずっと昴を見続けてきたから分かる事だ。

明らかに、最近の昴はおかしい。一般的に見て異常という訳ではない。ただ、私の中の『昴』と今の昴が一致しないという一点にお

いて、最近の昴はおかしいのだ。

例えばそう、つい四日前の立てこもりの時もおかしかった。これまで、私が病欠した時以外に、昴が私の家を訪ねて来た事は一度もなかった。それだけでも十分おかしいと言うのに、あの鈍い昴が家の中の異常に気がついて、あの非行動的な昴が強引に中へと入って侵入者と戦いを繰り広げるなど、おかしい点はいくら挙げても足りないくらいだ。最近の昴は、妙に、重郎に似ている。

何が、昴を変えたのだろうか。部活だろうか。だけれど、それだけでは昴が鋭くなった理由を説明出来ない。昴が勇敢になった理由を物語るにも、あまりに薄弱としている。

ただ、少なくとも確かなこと。それは、昴は変わったという事だ。重郎にしか打ち明けていなかった事を、打ち明けるに足るようになったという事だ。

そして、私を感じた昴への違和感が真か偽か、今日分かる。こうやって小芝居を打つのは、私の好む所だ。嫌悪する人も居るが、全てが嘘だと告げる時の快感は極上で、他にはない。昴が、私の思うとおりに、お父さんに話がしたいと言ってくれば良い。

「一リットルしかないから、コップ一杯で我慢してね」

「うん、十分だよ」

関係のないジュースの話をしながら、私の家への道を歩く。幼馴染だけあって、私と昴との間に、会話が途切れる事はない。他愛もない話。部活の話。テストの話。話題は余るほどある。

その内に、マンションへと着いた。エレベータで五階まで上がって、二つも取り付けられた鍵穴を両方とも捻って開け、扉を引く。

「ささ、どぞどぞー」

「あ、うん」

相槌だけ打って、昴は扉をくぐった。私もそれに続いて、扉を閉めながら中へと入る。今度は私が前に立って、客室までを先導していく。

「……………」

昴は廊下の壁を見ながら、何も言わないでいた。見なくても、昴の緊張が分かる。

客室の扉を開くと、中からお父さんがいらっしゃい、と昴を出迎えた。私がまた扉を押さえて昴を中へと入らせて、今度は私が入らずに扉を閉める。

「あ………」

昴の声が聞こえた。多分昴は今、お父さんと昴を会わせる為に、私が仕組んだのだと思っているのだろう。その答えは、ずいぶんと惜しいが、残念ながら外れである。私が仕組んだのは、もっと大掛かりな事なのだ。

扉に耳をくっ付けて、中の声を聞く。

『……昴くん、だったね。重ねてになるけど、先日は本当にありがとう』

『いえ……。その、それよりも、僕はもう一つ話があるんです』

来た、来た。昴はどうやら、私が想像したとおりに、変わってくれているらしい。これで、やっと、言えなかった事を言える。

『ほう。それは、何だい？』

『久美の……。あなたが銃を使ったら、久美の命が取られる、という話です』

『……どこで、そんな話を？』

お父さんは、即座に否定はしなかった。それで良い。事前にお父さんにこの事を話していないから、もしかするとすぐに終わってしまいかもしれないと思っていたが、こうして少しでも湾曲して進んだ方が面白い。

『久美本人から聞きました』

『……あの子も、困った子だな。まさか友人に、言ってしまうなんて』

ちよつとだけ驚いた。真面目なお父さんが、私の小さな企みに氣付いてか、昴に話を合わせている。珍しい。とても珍しい。

『……単刀直入に言います。久美を解放するように、談判して貰えないでしょうか』

『………。君の言いたい事はよく分かるよ。だが、私にはそれを覆すほどの力はない。そもそも、私から始まった話なのだからね』

……妙だ。お父さんが、まるで私の作り話を知っているかのような口ぶりをしている。昴に話を合わせるだけなら、「私から始まった話」なんて言葉は、出ない筈だ。

おかしい。何か悪い兆しを感じる。

『だけど、このままじゃ久美が、あまりにも可哀想です……！』

『……残念だけど、私には何も出来ないよ。君が想像しているよりずっと、こういう組織の縛りは厳しいんだ。たとえ私が上と直談判出来たとしても、久美を死の呪縛から解放する事は無理なんだ』

「ま、待って、お父さん！」

私は思わず、扉を開けて中へ飛び入った。お父さんの話が、あまりにも具体性を帯びすぎている。昴とお父さんが二人で私を騙していて、二人に笑われるのも覚悟の上で……いや。二人に笑われるのは、まだマシな結果だ。

「……久美。どうしたんだい？」

「冗談がキツ過ぎだよ！ スバが……本当に信じちゃう！」

「何を言っているんだ、久美。久美が、自分で話したんだろう？」

「だ、だから、それは……」

二人とも、笑うような、そんな空気ではなかった。むしろお父さんは、その厳正な空気を壊した私を、責めるような目で私を見ている。

「……え、ええと……。嘘、なんででしょうか？」

昴は困惑して、お父さんにその真偽を訊ねた。こんな展開は、想像だにしていなかった。これは、何だ？

そして、お父さんは、静かに首を振った。もう、明かしても良いのに。その首は、横に振れていた。

「久美は、死の縛りに遭っている。これは、本当の事だよ」

「や、やだ何!？」

自分でも、混乱しているのがよく分かった。私がそういう境遇にあるというのは、全て昴への嘘なのだ。冗談なのだ。それがどうして、お父さんに知られ、まるで当然の事のように話が進んでいるのか。

おかしい。異変は、確実に起こっている。

「……すまないけれど、久美には辛い話なんだ。これ以上は、話させないでくれ」

「違う、違う、そうじゃない……そうじゃないよ、お父さん！」

止めるなら、嘘だと告げれば良いじゃないか。どうして、そうしないのか。これではまるで……

……それが事実のようではないか。

「わ、分かりました……。ええと、久美と少しだけ、外に出ても良いですか？」

「ああ、構わないよ。慰めてやってくれ」

「あ、あああ……ああ……」

頭が真っ白になった私が次に感じたのは、私の腕を掴む昴の細い指の暖かさだった。

side..昴

本当ならもっと話したかったが、あまりにも様子が変だったので、仕方なく久美を連れて家の外に出、近くの公園にまで連れ出した。

「……………」

久美は、帰り道のような饒舌さを全く失くして、黙り込んでいる。理由は……今の所分からない。だが、それぐらいは、僕が察してや

るべきだろうと思う。

久美が突然にこうしてうつむいた原因は、まず間違いなくあの父親の話による物のはずだ。あの久美の反応は、尋常ではなかった。

(……でも、言っている事は、久美のそれと一緒にだった……ような)

久美が部屋に飛び込んで来た時に話していたのは、久美を解放するのは難しい、という事だ。となると、久美は、自分は解放される物だと思い込んでいたのか？

……。いや、そうではない。久美はあの時、確かに、冗談が過ぎると言った。更には、僕が本当に信じてしまう、とも言った。それはつまり、久美にとってそれまでの会話は冗談だったという事だ。

(でも久美は、僕にその事を打ち明けたんだから、当然知らなかったという事はないだろうし……)

……謎が、深い。まこと男らしくない話だが、こんな時に誼絵さんが居たら、と思ってしまう。

誼絵さんのような情報を整理する能力は、多分僕にはないのだろう。なら、たとえばバラバラに散らばっていても、繋がるだけの情報を得なければならぬ。

「……久美は、知ってたんだよね？」

「……………」

驚く事に、久美は首を大きく、何度も横に振った。つまり、この事を知らなかった。では、何故、僕に事実を打ち明ける事が出来たのか。

……記憶が、不明瞭になっている？ 暴漢に襲われたショックが、僕に打ち明けた後の記憶に穴を空けた……？

(……いや、そうじゃない)

誼絵さんは、ずっと言っていた。この世界は、不安定なのだ。その不安定さが、久美の記憶にまで影響を与えたのではないか。

「……久美、行こう」

そうだとしたら、もう僕の何とか出来る範疇ではない。僕は、未だに言葉のない久美の手を引いて、朋絵さんの家……誼絵さんの下を目指して、走った。

「……その可能性はとても低い。世界が不安定でも、世界に居る知能の記憶にまで影響は及ばない筈よ」

呼び鈴に応答した誼絵さんは、すぐに僕と僕の隣の久美を二階の窓から認めて、中へと入れてくれた。朋絵さんは不在らしく、僕は右手の先を気にしながら、誼絵さんの部屋へ入室し、誼絵さんに事情を話した。

「その子、大丈夫？」

誼絵さんは僕の説を聞くと、すぐにそれを否定した。そして少し考えた後、久美を指してそう言った。

「大丈夫に見える？」

「そうじゃないわ。こういう事を、聞かれて大丈夫かという意味。」

……多分、ショックで一時的に自失しているだけよ」

「……うん、大丈夫だと思う」

一時的な、自失。それは、相当のショックによるものでなければ、ありえない。聞いてどうなるのかは分からなかったが、久美に何が起こったのか、知りたかった。

「私の予想は、こうよ」

と、誼絵さんは話し始めた。

……久美は、僕を驚かせるつもりで、僕に嘘を吐いた。それが、父親が銃を撃ったら久美が殺されるという話である。それは、嘘であり、虚実だった。だが、不安定な世界がその嘘を呑み込み、現実として吐き出してしまった。だから、久美は突然自分の冗談が事実が変わって驚き、父親に詰め寄った。そして父親が本気だと知ると、ショックのあまり自失状態に陥ってしまった。

……誼絵さんの話は、おおよそんな感じであった。

とりあえず、つじつまは合っている。だが、それならこの世界では、どんな事でも起こり得る事にならないだろうか。

「……不安定な世界って、そんなに不安定なの？」

「その子は、例の装置の被験者。それが影響しているのよ。……そんな事は、どうでも良いのでしょうか？」

それも、そうだ。今大事なのは、久美である。そうして意識してみると、僕の右手が、微かに握り返されているのに気付く事が出来た。

「……半分くらい分かんないけどさ。私の事に関しては、その子の言う通りだよ」

久美の目に、光が戻っていた。

「世界って、何？ 不安定って、何？ ねえ。誰か知らないけどさ、私が納得出来るように、教えてよ」

真っ直ぐ、誼絵さんに向き合って言う。目線は、いつになく鋭い。だが、誼絵さんは一向にたじろぐ様子なく、僕に、本当に教えて良いのか、と訊ねてきた。僕は殆ど時間を掛けずに、うん、と答えた。誼絵さんはゆっくりと、これまで知り得た事を、久美に話した。久美は感情をあらわにして、おおう、とか、うわあ、というような反応を示していたが、久美の自殺、という話になると、声を静めて聞き入っていた。

「……むむ。スバも、ややこしい話に巻き込まれてたんだねえー」

誼絵さんが、十分以上掛けて全て話し終えた後の、久美の第一声はそれだった。緊迫した場面としては気の抜けた言葉だが、いつもの久美らしくて妙にホツとした。

「誼絵ちゃん……ヨシちゃんて良いよね、ヨシちゃんなら、何とか出来る？」

「世界の事なら、さっき言ったように今の所は無理。あなたの事なら、あなたの父親を通じて談判出来ない以上、やはり不可能ね」

「そっかー……。ま、銃なんて普通使わないしね。別に良っかー」

うわ、軽い。久美を解放してやろうと悩んでいた僕をあざ笑っているかのように、軽い。腹立たしい程に軽い。いや、良い事なのだが、軽い。

誼絵さんが、そんな久美をじっと見つめて、言った。

「……用が済んだなら、早く帰って」

「ありゃ。私、ヨシちゃんに嫌われてる？」

「違うわ。何も人の家で、仲睦まじいのを見せ付けなくても良いという事よ」

……僕は、誼絵さんの言葉で気付いた。久美はまだ気付いていないようだったが、僕の右手は、まだ久美の手と繋がったままになっていた。つまりは、誼絵さんの話中……十分以上手を繋いでいたという事だ。その瞬間、暗い部屋の中で僕は真っ赤になった。

「あてつけ？」

ただ一人、未だに気付かない久美だけが、見当違いの失礼な質問を誼絵さんにぶつけていた。

side…久美

何もかも、無茶苦茶だ。

最初は私がおかしくなったのかと思ったが、どうやら違うらしい。昂は、怪しい子供の戯言に騙され、おかしくなってしまっただけのようにだ。決して好転ではなかった。

多分、お父さんも。何か悪い病気にかかっているだけなのだ。昂とお父さん。二人は、私が直す。直してやらないといけない。必ず。

目覚まし時計に、新しい電池を入れてみた。目覚ましのベルが鳴らないのは、電池の残量が少ないからではないかと考えたからだ。だが、鳴らなかった。

次に、いつその事と、埃を被ったドライバーを持ち出して、分解してみた。なるほど、この部分が正常そうだ、と思える部分があって直したが、組み直してみるとネジが一本余る。目覚ましも結局鳴らないままだったが、時計が壊れるという事もなかった。

もはや、と思い、時計を買い直した。目新しい青いフォルムに最初は目を奪われていたのだが、いくらかして僕の心は、他の事に埋め尽くされていた。

新品であるはずのその時計すらも、目覚ましのベルが鳴らなかったのである。

不良品に当たっただけに違いないのだろうが、不吉な事この上ない出来事にすっかり意気を落しながら、水曜日二時間目の芸術科目の教室へと向かう。

「……鳴子。しゃんしゃん」

隣で、自分で持ってきたらしい赤と黄色の鳴子を、とても楽しげに明菜さんが振っている。芸術科目は選択制で、音楽と美術、それに書道から選ぶ事が出来た。僕は色々考えた結果、服が汚れたりしないように音楽を選ぶ事にした。

「鳴子、好きなの？」

「音がうるさいから、鳴子は嫌いだ」

七組五班の中で、音楽を選んだのは僕と明菜さんだけだった。他の四人は、全員美術を選んだようで、重郎が僕たちを冷やかしつつ、ハーレムわっしょいと叫んでいた。

「じゃあ、どうして鳴子？」

「好き嫌いはいけない」

こうして二人で音楽の授業へ向かうのは、昨日に続いて二度目である。そして昨日で分かったのは、明菜さんと二人きりになると、会話が難しくなるという事だ。何だか、会話を楽しんでくれているのか、そうでもないのかが掴みにくい。

「好き嫌いをする、健康に悪いそうだ」

「んー。鳴子とかの好き嫌いは、別に関係なさそうだけど」

「そうなのか……」

そんな会話をしながら、音楽室に入った。

帰る前の短いホームルームで、担任の倉口先生から明後日に控えた遠足についての詳細説明があった。バスに乗って行くという事と、時間がないので席順は名簿順になるという事、雨天は延期になるという事などいくつかの注意点、それから明日の六時間目にあるロング・ホームルームで買出しに行く、という事がものの五分で伝えられた。

「……………」

「わぁ、お隣ですねえ」

僕が窓側、朋絵さんが通路側で、僕たちの席は隣同士だった。とてもラッキーな事なのだが、一緒に登校しているとか実は付き合っているとか、あることないこと噂になっている事を考えると、複雑な心境ではあった。

「重郎さんは、バスが苦手なのですね」

「に、苦手じゃねえやい、ちよっと吐き気を催して頭がぐわんぐわんするだけだっ」

「……典型的なバス酔いです」

七組五班の中では他に、重郎と多香子さんが隣同士だったようだ。何やら二人で、わいわいと盛り上がっていた。

ホームルーム終了のチャイムが鳴り、クラス中に机を後ろへとずらす音が響き終わると、早くも久美が教室の中に入って来ていた。

「スバー。今日は用事があるから、部活行けないって部長さんに伝えといてー」

「ん、分かった」

「携帯も忘れちゃったし……今日は厄日だぁーね」

どうやら急いでいたようで、久美はたったそれだけの会話を交わして、教室を走り去っていった。

自然科学部の今日の活動は、珍しく空気力学に関係した、紙飛行

機大会だった。さすがと言うべきか、優さんの折った飛行機は、室内でも屋外でもかなりの飛距離と飛行時間を保ちダントツのトップで、続いて室内での滞空時間がぶっちぎりだった多香子さんが二位、屋外でもぐるぐると旋回し続けた佐奈さんが三位、後はどれも同じぐらいのスコアだった。

「やっと科学部らしい事が出来たわね」

「……紙飛行機大会が科学部らしいとお思いなら、かなり毒されているかと」

「……………。それもそうね」

ここ何日と、大喜利やら珍解答やらが続いていたので、優さんの出る幕はなかった。だが、今日のように科学分野になると優さんの独壇場になるのだ。やはり、有名中学校の実力は恐ろしい。戦々恐々としながら、部活を終えた。

今日は久美が居ないので、一人で帰路につく事になった。ちよつとだけ寂しく思いながら、妙に広く感じる道を歩く。

（……夕方だなあー）

家に着いて、自分の部屋の扉を開けた頃になって、携帯電話がかばんの奥の方で鳴った。慌ててかばんを置いて、チャックを引き、手を突っ込んで携帯電話を掴み、取り出す前に応答ボタンを押す。

『……昂だな？』

スピーカーから、重郎の声が漏れる。

「僕じゃなかったら怖いと思うよ」

と呼びかけつつ、僕は携帯電話を耳に当てた。

「それで、なに？」

『今からそっち行くからよ、準備しといてくれ！』

プチ、ツーツー。昔からだ、重郎の電話は淡白だ。多分、面と向かって会話する事に、コミュニケーション能力の殆どが使われているに違いない。

（準備って何だろ……）

心構えという事だろうか。何の用かは分からないが、何か重要な事なのかも知れない。全く、想像はつかないが。

五分ほどして、宣言どおり重郎がやって来た。だが、軽く息が切れ、表情もどこか焦っている。何か緊急の用なのだと理解し、玄関口で話を聞く事にした。

「久美が、久美が黒いヤツに追っ掛けられてんだ！」

だが、重郎はただ、その言葉を繰り返すばかりだった。かなり、切羽詰っているらしい。何だかんだで冷静な重郎が、ここまで憔悴するのも珍しい。

（黒いヤツ、久美……）

久美を追いかけるような黒い物。ゴキブリ……なら、重郎がわざわざ報告する理由が分からない。パトカーは白黒だし、ブラックスメンは日本には居ない。

そこまで考えて、僕はハッとした。久美の今の環境を考えれば、久美を追う黒いそれは……。

「まさか……暴力団系の人？」

「そ、そうだ！ 何か知らねえが、早くしねえと久美が捕まっちゃう！」

「電話は！？」

「分かん！ けど、メールはさっき届いた！」

僕は急いで、靴を履きながら久美に送るメールを打った。どこから匿えるだろう。大きい建物、広い建物……。

「……春花さん。春花さんって確かお金持ちだったよね」

高校に入って、最初に久美とした電話で、聞いたような気がする。まるで遠い昔のようだが、確かに記憶が残っていた。

春花さんの家へ逃げ込むようにメールした後、今度は春花さんに電話を掛けた。三度目の呼び出し音が鳴るか鳴らないかというタイミングで、春花さんのやほーいという声が聞こえた。

「春花さん、そっちに久美が行くから！」

『あーうん。何か分かんないけど、久美っちピンチって聞いたから、こっちから迎えを出してるよー。なにかあったの？』

「あとでっ」

電話を切る。既に僕たちは、家を出ていくらか走っていた。電話の内容を気にして振り向く重郎に、僕は春花さんの家へ行くように叫んだ。重郎は、理由を訊く事もなく、そのまままた前を向き直した。どうやら、どこにあるかを知っているらしい。

電話が鳴る。今度は、朋絵さんからだ。

『私も、誼絵と一緒に春花さんの家に向かいますので〜』

緊急事態でも、朋絵さんの声はどこか和む。とりあえず警察に電話して貰うよう言って、電話を切った。

橋を渡っていくらか走ると、お寺のような外見をした屋敷が見えてきた。重郎があれだ、と言ってスピードを上げる。僕も、少ない走力をフル使用して屋敷を目指す。

「……おく、来た来た。中に居るから、入っちゃってよ」

門付近で待っていてくれたらしい春花さんが、心持いつもよりも穏やかな抑えた声で、僕たちを出迎えた。そして僕たちに開いている大きな門を通らせた後、自分も中へ入って、嚴重に門を閉じ門を刺し入れた。

春花さんに案内されるままに中庭を抜け、屋敷へと入る。外観とは打って変わって内装は洋風で、広い玄関の靴入れの上には、輝くように赤い花が、二輪だけ花瓶に飾られていた。他の所も、広さの割にどこか質素で、がらんどろとしてるように感じられる。

そうして案内された部屋には、見慣れたメンバーが大体揃っていた。居ないのは、多香子さんに優さん、そして佐奈さんだ。明菜さんは、朋絵さんから急報を受けて、一番最初に来てくれたらしい。

「……久美」

勿論、そこには久美の姿もあった。既に息が整っている所を見ると、ここに着いていくらか経っている様だったが、まだその目からは、いつものある意味での余裕を持った輝きは失われているようだった。僕の呼びかけにも、小さな反応しか示さない。

久美が、黒い人たちに襲われた。考えられる理由は二つしかない。金曜日、久美を襲った男が、また何かの企てをしたか、あるいは久美の父親の拳銃の引き金が、何らかの理由で引かれたかである。

「あーっ！」

突然、春花さんが叫んだ。驚いて僕たちが振り向くと、春花さんはテレビを指差して硬直していた。

「漸進コイガースが、また負けてるー！ あぎゃー！」

じたばた。春花さんは、そうとしか形容の仕様がなない動きで、地団太を踏んだ。部屋の空気は一瞬、大きく淀んだ後、和やかなムードを取り戻す。

「立山ホームーズが勝つのは良い事だ」

「むむ、明ちゃんは敵い？ 今日負けたら、乙子園三連敗になっちゃうじゃーん！」

なるほど、と、久美の言っていた事を思い出した。底抜けに明るい、という評価は、的を射ていると思う。強張っていた久美の表情にも、一転して笑顔が戻った。

しかし、そうしていたずらに時間を潰している訳にもいかない。何故か居る女中さんによれば、久美を追って来ていた車は、遠巻きにこちらを囲んでいるようだった。

「……何があったのか、話してみろよ」

「……………」

皆の期待に応えて、重郎がそう切り出すが、久美に反応はない。聞こえてはいるが、返事をする気はない、といった風である。

どうした物かと考えている僕の手を、隣に居た春花さんの手が引いた。少し戸惑いながら顔を見ると、どうやら話があるらしくいつ

になく無表情で、更に僕の手を引っ張ってくる。僕はそれに従って、集まっている大部屋から廊下へと出た。

「何の話？」

春花さんは僕の言葉に返事をせず、代わりに僕の肩を強く押して壁に押し付けてきた。思わず身を振じらせて逃れようとするが、その力は強く、ついに春花さんの手を脱することは出来なかった。

「な、何？」

手を軽く上げて、抵抗する気のない事を示す。そうやってやっと、春花さんは僕を押す力を弱めて、こちらを見上げた。

「重郎ちゃんにはメールで伝えたんだけどね。……これ、久美の狂言だと思うの」

「……どうして？」

「片や二、三台の車、片や徒歩。どう考えたって、捕まるよね」

……確かに、そうだ。しかも重郎の言い方では、既に走って逃げなければならないような状態に追い込まれていたようだった。これでは、捕まらない方がおかしい。

「で。……スバちゃん、何か知ってるんじゃないかなーって。どうして、狂言なんてしないといけなかったのか」

春花さんは狂言と決め付けているようだった。そのまま、また僕の肩を強く押してくる。

「……本当に、狂言なのかな？」

「狂言じゃないと思える理由、ある？」

「……………。……実はさ」

僕はやむを得ず、これまでの事について洗いざらい春花さんに話した。本当は『久美の父親が銃を撃つと、久美が殺される』という点だけで良いのだが、そこだけ話しても春花さんは納得してくれないだろう。何より、肩を押す手と、僕を見つめるその目から早く逃れたいという気持ちが、僕の心を押しした。

春花さんは世界が云々という所で一瞬ハッとした表情をした以外は、終始真顔で僕の話聞いていた。全部聞き終えた時、春花さんは心底感心したような顔で、

「嘘っぽーい」

と言った。

「……ま。スバちゃんの成績からして、急ごしらえじゃこんな話出て来ないもんねー。一応信じてこっかな」

「何か、馬鹿にされてるような気がする」

「気のせいっ、せーいー♪」

急激に肩への力を緩めると、春花さんは軽くステップしながら大部屋へと戻って行った。

残された僕は、いったん落ち着いて、狂言という可能性を考える事にした。

（……もし、狂言だったとすれば）

狂言だったとすれば、久美の目的は何だろうか。すぐに思い付くのは、今話したばかりの事である。つまり、『久美の父親が銃を撃

つと、久美が殺される』事への反抗。……だが、それとこの狂言とは、どうやっても繋がらない。

(となると、狂言じゃない?)

狂言でないとすれば、何らかの理由で久美の父親が発砲したからと安易に説明が付く。無闇やたらに発砲するとは思わないが、前の世界において久美が自殺した時には恐らく引き金を引いたはずだ。ひた、と僕の脳裏に、濡れた足音が走った。何か、どこかが引っ掛かる。そもそも、そもそも、発砲すれば殺されるというのは、昨日始まったばかりの話ではなかったか……?

(……………)

つまり。久美が自殺してしまった理由は、未だ解き明かされていない。全くの謎である。……それも、狂言だとしたら?

(…………やめとこう)

それ以上続けても、人間不信になるばかりで、成果はないように思えた。思考は、僕の仕事ではない。

だが……。僕は、真実の琴線に触れつつある事に気付いていた。

「とりあえず、車はどこか行っちゃったってさ」

僕が部屋に戻って十五分、女中さんから二度目の連絡を受けた春花さんが、皆にそう言った。

「向こうが本気だったなら、今出ても危ないかも知れないし、泊まってくる？」

本気だったなら、という所が強調されたように感じたのは、恐らく気のせいではない。春花さんは本気で、狂言であると確信しているのだ。

「……私達は、とりあえず帰ろうかと思えますー」

「私もそうする」

誼絵さんと、明菜さんが立ち上がった。

「じゃあ、昴さん。久美さんの事、よろしく願いします」

その口調から察するに、明菜さんも朋絵さんも、狂言説に考えが行っている様だ。女中さんに案内されて三人が出て行くのを見届けてから、僕は重郎に、メールを打った。

『何か、隠してる事、ない？』

重郎からの返信は来なかった。ふと、彼の方に目をやる。重郎は、手で、廊下に出ると合図していた。

「……俺が、隠し事をしてると思うのか？」

二人きりの廊下で、重郎はそう言って真剣な顔で僕と向き合った。

「隠してるかも知れない、って思う」

「……そうか。んじゃあ、隠してても、仕方ねえかもな」

殺伐とした雰囲気。しかし、重郎に敵意はないようだった。むしろ、哀れむような、後ろめたそうな、そんな表情をしている。

一度深呼吸して、重郎は言った。

「俺と、久美は、付き合ってる。二年前からだ」

……。思わぬ情報だった。耳を塞ぎたくなるとか、そういう物ではない。だが、それにしても、余りにも、驚かされた。

「隠してたのは、俺も久美も、決して悪意からじゃない。けど、中学ん時のお前は、不安定すぎた。だからどうしても、言えなかった」

僕は、中学校の頃の自分を想起して、頷いた。目立った友達は、二人を除いて他におらず、成績の伸びの悪さにナーバスを抱えた事もあった。

「……で、もう一つ、言っていなかった事がある」

……。心の準備を整える。あの頃から、まだ一ヶ月と経っていない。二人が、僕を慮ってあえて言わなかった事を、今から聞くのだ。二人が付き合っていたという事。それすらも、今の所消化出来るか分からないのだから。

「……………うん」

決心して、相槌を打つ。

「久美は、引っ越す予定だったんだ。家族の都合で、どうしてもって話だった。久美は、鼻が泣いて引き留めるのを見るのは、耐えら

れないって言った」

つまり。そこで、僕の頭の中で、全てが繋がった。実際には一部分、符合しない要素を孕んでいたのだが、少なくともその時の僕は、全てを理解したような感覚を覚えた。

自殺は、狂言だったのである。僕は、久美の死体を見ていない。狂言の目的は、“死んだ事にして、引越す時に誰とも会わないように”。引越しを憂いでいたのだから、入学式以後数日続いた久美の無精力にも、説明が付く。

……だが。その事実は、矛盾がないと同時に、久美が僕に仕向けた残酷な仕打ちを物語ってもいた。取り残された僕は、久美が自殺したという事実を、一生背負うところだったのだ。

「俺は、久美が苦しむのを見るか、昴が壊れるのを見るかの二択で、久美を救う事にした。……裏切ってゴメンな」

重郎の苦しい、無力感に覆われた心情も、容易に想像出来た。だから僕は、良いよ、と言って、重郎の肩を叩いた。

「……多分、今日のは狂言じゃないと思うんだ」
「え……？」

「俺が久美から聞いた全ての事情を合わせても、今日、こんな狂言をする理由が見つからないからな」

狂言じゃない、とはそれはつまり……。

「み、皆が、危ない？」

「……俺は、そう思う」

重郎がそう言ってうつむくのと、春花さんが全速力で駆けながら

僕たちの下に来るのは、ほぼ同時だった。

「津田姉妹は、上手く逃げたみたいだけど……」

春花さんの報告を、青ざめた久美、まだうつむいている重郎と共に聞いた。

車は、大通りを一周すると、家のすぐ近くに帰って来たらしい。僕たちの警戒を解くための罠に、まんまと引っ掛かったという事だ。とっさに逃げた朋絵さんと誼絵さんは捕まらなかったようだが、明菜さんが車に強引に乘せられて、連れ去られた。

「……………」

久美は青ざめているだけでなく、小刻みに震えてもいた。見開いた目は、恐怖と、そして謝罪の意に染まっている。どこかで、見た事があるような気がした。

着信音を切っておいた携帯が、バイブレーションで電話の受信を伝えた。慌てて開く。電話は、優さんからの物だった。

「もしもし」

『大丈夫？　トラブってるんじゃない？』

「…………え、分かる？」

『分かるわよ、そのくらい。怪しい車が走り回ってるし、春花の家は取り囲まれてるし』

やっぱり、取り囲まれているのか。久美の様子と言い、車の挙動と言い、どうやら狂言ではなかったようだ。

『で、何事なのかしら？』

「それが……」

僕はとりあえず、分かる範囲の事を簡潔に話した。世界云々の話は、長くなるので除いて話したのだが、優さんは大体の事情を飲み込んでくれたようだった。

『大窮地ね、それって。警察は何と？』

「警察？」

『……誘拐事件なのよ？』

ああ……。どうやら、僕たち四人は、かなり冷静さを失っているようだ。僕は重郎に、警察に通報するように言った。賢明にも、重郎はすぐに頷いて、携帯電話を開いてくれた。

「今電話したよ」

『……はあ』

溜め息と共に、電話は唐突に切れた。優さんはやはりどこか、せっかちな所があるなあ、と小さく笑って、僕は同じく通話を終えたばかりの重郎にその首尾を尋ねた。

「何台か車、回してくれるってよ」

不当に少女を拘束している可能性がある車が、まだ現場近くに停留している事から、急いでその確認に来てくれるのだという。心強い。だが、明菜さんの無事有事を考えると、まだ不安は取り切れなかった。

知らない間に部屋を出ていたらしい春花さんが部屋に帰ってきて

座ると、部屋は重々しい沈黙に包まれた。二分ほどその空気が流れ、遠くにサイレンの音が聞こえた頃になって、部屋に走りこんで来た女中さんが、急報を告げた。

明菜さんが、解放された。添えられるべき理由も経過もなく、女中さんはそう僕たちに伝えた。重郎が、ポカンとした顔をする。

「……何が、起こったの？」

久美が、九十分ぶりに口を開いた。僕が、他に言いたい事があるのを押し止めて事情を説明すると、久美はいくらか明るい顔になって、

「そっか」

と言った。思わず僕は、表情を和らげたが、その言葉は決して事態を好転させるものではなかった。

久美が、続ける。

「なら、行かないと、ね。お父さんだけじゃなくて、皆にも迷惑掛かっちゃうしさ」

「い、行くなって……どこにだよ？」

久美の父親の拳銃の話知らない重郎は、哀れにもうろたえ、久美に訊いたが、久美は答えなかった。

「どうせ、ずっと逃げてらんないもんね。最初から、そうしないとダメだったのかも」

「……久美」

僕はその意味を悟って、行かせまいと久美の腕に手を伸ばした。

あと一息で、掴める。そう思った途端に、僕の手から、白い円筒は離れていった。

「ごめんね！」

叫びながら、僕たちの制止を振り切って、部屋を駆け出て行く。その後姿に、僕はいつか感じた、遠く届かない守るべき存在の影を見た。

フラッシュバックする、その映像に気を取られている暇はなかった。今ならまだ、間に合うのだ。僕は、真っ直ぐ窓を眺めているだけの春花さんと、まだ茫然自失としている重郎を置いて、その後ろを追い掛けた。

二人の距離は、縮まっているような、広がっているような感じがしつつも、その実あまり変わってはいなかった。明菜さん達が出てから開け放されていたらしい大門をくぐり、道に出る。どうやらちようどパトカーが到着したところだったようで、すれ違って呼び止められる。無視する。ありがたい事に、道には、それらしい、怪しい車は一台も見当たらなかった。

後ろから、声を掛けなくなる。大声で呼び止めなくなる。だが、そんな事をして、久美が止まる筈はないのだ。今はただ、追いかけて、腕を掴む。赤信号に遭遇するまでに、それを達成しなければならぬのだ。

なのに、距離は縮まらなかった。運良く、二つ、三つと青信号で道路を渡ったが、幸運がいつまで続くとも分からない。久美の家までは、まだ二つの信号があるから……。

(あ……っ！)

目の前に、大通りが見えてきた。赤い光が僕の絶望を誘う。

「久美！」

決心は揺らぎ、僕は久美の名を叫んだ。

久美は……立ち止まった。立ち止まって、振り返り、僕に駆け寄ってきた。僕は、それを、両腕で受け止める。

「……。実はね。引き金を引いたの、私なんだ」

僕の腕の中で、息も切らさずに久美は言った。

「ど、どういう、こと？」

「私……昂の事、信じてなかったんだ。昂が、おかしくなったんだと思ってた。お父さんも同じ。目を覚まさせてあげないと、いけない。そう思って、私は引き金を引いてみた」

久美は、震えていたが、泣いてはいないようだった。その代わりに、僕の頬に涙が伝っていく。

「……結果は、こうだった。昂の言う通りだったのに、私……」

……。要は、僕が悪かったのだ。世界がルールだの、二つ目の世界だのという話を、久美は簡単に信じない普通の人だった。信じる為には、信じられている人が、それを語らなければならなかったのだ。そして僕は、幼馴染というだけで、久美の信を得てはいなかった。僕は、小学校の頃から、二人に頼ってばかりだったのだから。

「大丈夫」

だからこそ、今が。心から信じて貰える、最後のチャンスなのだ。久美を救う。必ず。

「行こう」

僕はそう言うと、青に変わった横断歩道を、初めて僕から久美の手を引いて渡った。

久美が発砲したのなら、社会的に問題はあっても、久美の父親が交わしたという事になっているその契約には、一切触れないはずだ。それだけで大人しく引き下がってくれるとは思えなかったが、道理はこちらにある。恐らく、粘り強く交渉すれば、向こうも納得せざるを得ないだろう。

僕が、そんな甘い考えを持って久美の家のチャイムを鳴らしたからか、ドアが開いてすぐに、僕の頭に銃口が向けられた。

「……おう。兄さん、連れてきてくれたんかのお」

……。何か言わなければいけない。だが、思考が、口が、一斉にストライキを起こして、何も言葉にならない。

決意とは、裏腹に奮い立たない自分にむしゃくしゃしながら、僕は右手で、僕を指す拳銃を、押して避けさせた。

「ま、入れや。野木嬢。あと、兄さんものお」

無口のまま、頷いて、中へと入る。久美は、何も言わない僕を、逆に頼りに思っているのか、抵抗せずに付いて来てくれた。一時の信頼にすら、応えられない自分に、無力感を覚える。

扉の中では、数人のサングラスをした男達が座り込んでたむろしていた。案内役らしい男に誘導されて、金曜日に謎の男が立てこもった小さい部屋へと歩いた。そういえば、あの謎の男は何だったのだろう。自殺の狂言に必要だったはずはないし、今あちこちに居るサングラスとは、雰囲気も服装も、全く違う。

……。そんな、どうでも良い事には頭を働かせてしまう自分に、辟易した。今は、目の前の久美を、目の前のサングラス達から解放する事だけに、集中すれば良い。僕は、入れてもすぐに抜けてしまう炭酸のような気合を、もう一度入れ直した。

「……野木ん旦那、連れて来ましたん」

「ああ。うん。ありがとう」

そこには、ただ一人、暗がりには佇む久美の父親の姿があった。おかしい。久美がこうして追われている状況で、ある意味当人である久美の父親が、悠々とこんな所に一人居る。その光景は、異様と言って間違いなかった。

「……お父、さん？」

久美もそう思ったらしく、ぎゅっと僕の裾を掴んだままに、呼び掛けた。久美の父親は、一步こちらへと歩み寄って、

「少なくとも、久美が思っているような事にはなっていないよ」

と言った。更に、言葉を継ぐ。

「撃ったのが久美だって事が、明白だったからね。少し叱られちゃったけど、制裁なんて事にはなってないよ。……ただ、怪しい車が、街中を走り回ってるとかでね。ウチの人たちが追っかけて止めさせようとしたんだけど、誰が呼んだんだか警察が来ちゃってさ。今、対策協議中なんだよ」

……。どうやら、とりあえず、最も危惧していた事は、元々発生していなかったようだ。しかし、そうになると、久美を追いかけていた怪しい車とは、一体何なのか。

思い出して、振り返って見てみると、久美は心底、ホッとした表情をしていた。最後には、諦めて自分から身を差し出そうとしていたのだから、当然と言えば当然だ。だが、僕の裾には、まだしわが寄ったままだった。

「……お疲れ様、久美」

僕はそう言って、軽く久美の頭を撫でてやった。

一時間ほど久美の家に留まった後、怪しい車が姿を消したという事で帰宅した頃には、既に夜の八時ぐらいになっていた。解放されたという明菜さんは、怪我一つしていなかったらしく、本人も何故解放されたのか分からない、と言っているらしい。不思議な話である。久美はその後、落ち着きを完全に取り戻し、強面の男による叱責にも、にこにこに対応していたとの事だった。何がともあれ、無事に済んで良かったと思った。

翌日木曜日。朝に、朋絵さんから、無事だったかというメールが

届いた。僕は、経過を丁寧に書き記して、返信した。

多香子さんと佐奈さんは、一連の事件について全く知らないようだった。わざわざ知らせる必要はないだろう、と思ったので、秘しておく事にした。

六時間目のロング・ホームルームでは、お向かいという超最寄りのスーパーへ、明日の遠足料理の材料を買いに行った。予算五千円の半分以上を、明菜さんが強く希望したロールイカに費やし、肝心のそばはかなり少なめになったが、とりあえず問題なく購入する事が出来た。

「小型通信機をそういう車にくっ付けて回ったのだけど、通信可能範囲が狭すぎて検知出来ないわ……不覚っ」

部活では、優さんが小さな液晶画面を覗きながら、そう溜め息を吐いていたのが印象的だった。

あの時初めて見せた、息の詰まるような春花さんの態度は、まるでそんな事などなかったかのように扱われ、春花さんはいつも通り笑い、叫んで、騒がしいまま帰っていった。

帰宅して、思う。結局、僕は何も出来なかったのだと。ただ、決意し、決心し、覚悟を決めたばかりで、事態の解決に何の協力も出来はしなかった。

久美との事も、心に引っ掛かっていた。久美が、狂言自殺で何の挨拶もなしに引っ越そうとしていた事。少なくとも、僕が涙を流して、前後不覚となるまでに至ったあの時を作り出したのは、他でもない久美なのだ。そして重郎も、同じだった。

僕は、僕のふがいなかった事を、よく知っている。だから、そうされても、仕方ないと思わないではない。でも、だからといって、

久美が、重郎が僕にした、あるいはしようとしていた残酷な行為が、僕にとって心の痛む事でないという訳には、残念ながら行かなかった。

まだ、足りない。久美との中に残るわだかまりは、まだ僕と久美を、決定的に隔てている。そう何度も反芻しながら、僕は、未だに鳴らない時計二つを眺めた。

野木久美?・後(後書き)

……と。また何度も修正する事でしょうが、以上で野木久美?は完了です。

拙文、ここまで読んで下さって、ありがとうございました。

次からは、いわゆる便利な日常パートがいくらか続くかと思えます、ます。

間奏・1（前書き）

小話です。

間奏・1

誰かが、弱い事こそが俺の強い理由なのだ、と言った。

そんなバカな。それなら僕は、スポーツ万能、多々才能、容姿端麗で勇猛果敢と言う事になるではないか。

……。自分で言っていて悲しくなった。

六時三十分ちょうど。不快な夢を見たせいか、昨日の夜をひどく遠く感じつつ、僕は洗面台に立って、歯を磨き出した。

高校生活が始まったのは、まだ先週の月曜日の事だ。それから今日までの間に、入学式があり、班分けがあり、新たな友人との出会いがあり、自然科学部の活動があった。加えて、久美の自殺があり、世界の入替わりがあり、僕の決心がある。

多分。今日の遠足が、そんな事からの区切りになってくれる。僕はそう、強く思い願って、いつもよりも少し早めに家を出た。

「……津田朋絵さんが、道に迷うて隣町に着いたっちゅう連絡が来たさかい、彼女を拾ってから遠足先に向かうで」

今日も、朋絵さんの方向音痴は冴え渡っていた。隣町に着くまでに、普通は気付きそうなものなのだが。ついでに、重郎のバス酔いも絶好調で、バスが動き出す前から頭痛信号を受信しているようだった。

「ぶえ……。朝のコーラが出てきそうだ……」

「……あの、出す時は、通路の方に出してくださいね。くれぐれも、私の方を向かないようお願いします」

多香子さんは、いつ爆発するとも知れない重郎爆弾を抱えて、いくらか迷惑そうだ。通路を挟んで左側にいる明菜さんと、少し前の方にいる佐奈さんは、早くも目を閉じて眠る態勢に入っている。景色を楽しみたい派の僕からすると、何度見ても不思議な光景だ。

先生の合図で……正確には、先生の合図のコンマ五秒前ぐらいになって、バスはゆるやかに動き出した。

「……………」

こうなると、暇だった。多分、ずっとこんな時間が続くのだろうと思って買い込んで、結局今まで読まなかった小説が家に何冊もある。一冊ぐらい持ってきたら良かったなあ、と思いながら、通路席から何とも不便な体勢で外を眺めていると、右の空席と僕の座っている席の隙間から、手が伸びてきて僕の右腕をとんとん、と叩いた。

「武田くん？　ちょっと良い？」

「……ん、何？」

振り返ると、座席の背もたれの上から、これまで話した事のない女子生徒二人が、こちらに顔を覗かせていた。

「武田くんって、部活動何してるのかな？　……あ、私は、演劇部の近田ね。こっちが戸倉楓」

「べっ、別に、入って欲しいわけじゃないんだけどね！」

「……楓は今、ツンデレキャラの猛特訓中なの。本当は痛い子じゃ

ないんだよ」

「う、うん。……ええと、自然科学部に入ってるよ」

妙な空気で話す二人に気圧されつつ、出来るだけ平静らしく答えた。二人は、その答えが不満だったのか、顔を見合わせて、

「自然科学部って、何するの？」

と声を揃えて僕に尋ねた。

「……えーと。テスト見せ合ったり、紙飛行機飛ばし合ったり、変な装置いじったり、あとはカラオケとかかな」

「へえー。実は、演劇部が人数不足でさ。少数精鋭でも良いんだけど、四人じゃ選べる演劇の幅が狭すぎるから、今募集中だったりするんだよー」

「あれこれ言わずに、早く入っちゃいないYO！ 馬鹿犬YO！」

「……楓は今、ツンデレDJキャラを模索中なの。本当は荒々しい子じゃないんだよ」

とりあえず、二人の目的は演劇部への勧誘のようだ。更に話を聞いていくと、来月の中頃に、演劇の大会があるらしく、それに向けて人数を増やそうと探し回っているらしい。

「……悪いけど、自然科学部は、一応毎日活動だし、無理かな」

「さ、寂しいよ……どうして？」

「楓はツンデレDJ、デレは冷たくされると出る、キャラを確定しようとしているの。本当は、淡泊な子なんだよ。……じゃあ、気が変わったら、教えてね」

「うん。ゴメンね」

二人は、僕から目を離して二人の後ろの席にアプローチを始めた。
……。近田さんと、戸田さん。知り合いが二人増えたようで、二人には悪い事をしたと分かりつつも、とても嬉しく覚えた。

(……………?)

だが、何故か同時にどこか、違和感を感じるのだった。

隣町の交番で、無事朋絵さんを拾い、僕たちのバスは、他のクラスのバスに十分ほど遅れて駐車場へ停止した。

「時間がないさかいに、はよ割り当てのトコ行って、昼ご飯の準備してき」

倉口先生にそう急かされ、僕たち五班は一番駐車場から遠い炊爨場所へと歩き始めた。七組は割り当ての場所が二つに分かれていて、五班だけ一番遠い場所に当たっていたのだった。

「五班。しゅーごー」

到着すると、班長の僕をさし措いて、明菜さんが号令をかけた。それに素直に従ってしまう僕も僕だと思いながら、どうしてか一列に並べようとする明菜さんの近くに歩み寄る。

「今から料理を開始する。分担は……」

「あっ、私ご飯炊きたいです」

「……………」

「あ、あの？ ご飯、私が……」
「ダメだ」

明菜さんが、冷静に朋絵さんの希望を却下した。

「米担当は、佐奈に頼む」

「うむ、了解した」

「わわ、私は？」

「待機」

米担当佐奈さん、待機担当朋絵さんに続いて、調理担当重郎、盛り付け担当多香子さんが任命された。いつもの事ながら、重郎に押し付けられている任務が一番重い。ただ、一昨日の一件から微妙に気まずさを感じている僕は、それについて触れないようにした。

「僕と明菜さんは？」

「昂は監視と指揮担当。私は味見担当」
「……あー。なるほど」

平たく言えば、休憩とつまみ食いである。

「明菜さんが手伝いたいってさ」

「ん。それでは、代わって貰う事にしよう」

「……班長に裏切られた……」

独裁極まりなかったので、班長権限で明菜さんを米担当にして、佐奈さんを調理手伝い担当にした。僕は、他に仕事もなく手持ち無沙汰だったが、じっと、明菜さんが水量を慎重に量るのを見ているだけで、癒されるというか、時間の経過が気にならなくなった。

明菜さんの作業が終わり、僕が待機担当の朋絵さんに目を移すと、

「そうね。コンピュータ技術も、自然科学の一つと言えるわ」

そこには何故か優さんが居た。

「……どうして居るの？」

「あら、良い質問ね。食事を終えて、暇になったからよ」

「早すぎ……じゃない？」

「いえすっ！ 家から炊き上がったご飯を持ってきて、メニューを握り飯にする事で、化学的に時間を節約することができるのよ。いっつみらこおー！」

化学的では恐らくないが、付き合わされる他の班員が可哀想でない。

「久美と、春花さんは？」

スルーに怒ったのか、無言で優さんが指した先では、久美と春花さんが重郎の手伝いをしていた。

「……嫉妬してます？」

「まさか」

朋絵さんの問い掛けに、僕はそう即答した。久美と重郎の仲に関しては、一昨日から考えて、祝すべきだと結論付けていた。元々僕にそういう気はないし、二人はお似合いだと思う。とは言え、完全に割り切れているという訳でもないのだが。

「春花さん可愛いですしね」

「……え？」

「ね。朋絵と話していると、知的さの欠片もないでしょう？ この雰囲気心地良いのよ」

「む、むむ……何だか馬鹿にされてます？」

朋絵さんと優さんは、かなり相性が良いようだった。どっちも天然ボケキャラと言えばそうだから、多分そう言う所で通じる物があるのだろう。

「焼きそば、かーん！　せーいっ！」

春花さんが叫んだ。

「まだ炊けていない……」

「先に、焼きそばだけで食べま……しょう」

お皿に盛り付けようとして、イカだらけの惨状に一度言葉を詰まらせながら、多香子さんがそう言って、皆を呼んだ。

「でもそれだと、ライスが余るんじゃないか？」

「あら。それなら、塩結び用の塩と旨味調味料があるわよ。それで食べましょう」

「それはありがたいけど、イカ焼きそばはあげないからね」

「……呪われると良いわ」

優さんは、非科学的な捨て台詞と調味料を置いて、珍しく走り去っていった。

久美と対角線上に立ちながら、明菜さんが恍惚とした表情を浮かべて、

「……イカイカしている。とても素晴らしい」

と呟いた。

「これってただイカ焼きですよ？ そばはどこにあるんですか？」
「イカの下にありますよ」

見た目がボロボロで、食べる前の下馬評はかなり低い評価だったが、食べてみると中々の味だった。胡椒と塩に、イカの旨味が絡み、そこに少しだけ入ったソースが香りを付けるという構成で、焼きそばでは全くなかったが、全員ご飯が炊けるまでに平らげてしまった。久美と春花さんの分は当然なかったのだが、多香子さんや明菜さんにちよつとずつ分けて貰って、二人は美味しい美味しいと騒ぎ回っていた。

ご飯が炊けておにぎりを作る段になって、優さんが帰って来た。

「いえす！ 昆布を提供するから、焼きそばを食べさせなさい！」

「昆布は貰うけど、焼きそばもうないよ」

「なっ……。……。穴二つ……」

さすがにおにぎりだけでは、無味乾燥として口が寂しかったのだと思う。でも残念ながら、人を呪った優さんに与えられたのは、まともおにぎりだった。

「ごちそうさまでしたー」

余りあるご飯を全部握って、全員で食べ切った。他の班がご飯を残したりしているのに比べると、かなり上品に出来たと思う。その実態は、かなりアレだが。

少し時間が残ったが、僕たちはそれぞれで談笑し合って時間を過

ごした。

食後の腹ごなし用なのか、班の団結を高める為なのか、食事の後にはクラス・レクリエーションだった。班別に配られた三つの紙に書いてある指令を、全部クリアするまでの時間を競うという簡単なものだ。

「よっし、やんぞー！」

確実に一班になれる筈だったのに、好奇心から五班に落ちてしまったという過去を持つ僕たちの士気は、かなり高かった。第一の指令『倉口先生を見つけよ』では、明菜さんが電話で呼び出すという強行策、第二の指令『虫を三種類捕獲せよ』では、蜘蛛の巣で三種類を一瞬で捕まえるという奇策をそれぞれ用い、他の班とは比べ物にならないような早さで第三の紙を開いた。

第三の指令は、レモンティーを買ってこいというおつかいモノだったが、これも奇跡と言うべきか、朋絵さんが未開封のレモンティーを持っていて、即座にクリアだった。

「……なんか詰まんねえな」

始まる前あれだけ興奮していた重郎も、どの班よりも先に集合場所へ向かう頃になると、さすがに冷め切っていた。優勝の証として小さなスナック菓子を貰っても、僕たちの心は晴れなかった。

(……………)

優勝すれば良いという訳ではないのだと、僕は改めて思い知らさ

れた。

「……………」

「……………」

「……………どうして居るの」

家に帰り着いた僕を出迎えたのは、僕の部屋のベッドに不機嫌に腰掛ける、誼絵さんの姿だった。

間奏・1（後書き）

小話でした。次回から、『駒黒佐奈？』に入ります。

駒黒佐奈？・1

誼絵さんの話をまとめると、つまりはこうだ。

昨日の謎の車については、謎しかない。目的も分からないし、どこから現れたのかも不明のままである。ただ、少なくとも、春花さんの家を取り囲んでいたのは間違いなく、一度捕まって解放された明菜さんを除く僕たちの中の、誰かが狙われているのには違いない。そして今の所、それを回避する術はない。捕まえる機会は、いつにでもあるのだから。

「登下校は、二人以上でした方が良いわ。登校は、朋絵と一緒にしなさい」

こうなると、かなりの大事だ。どこからこんな非日常に迷い込んでしまったのだろう。鈍い僕にとって、あまり環境がおかしすぎるのは、良くないと思うのだが。

誼絵さんは、どうしてか不機嫌のまま、家を出て行った。

土曜日。僕は、買った筈なのに買っていない事になっているノートを求め、商店街の百円ショップ『Syoso』を訪れた。何でも店名の由来は『勝訴』であり、昔、実際の販売価格が百五円であるのに、百円ショップを名乗るのは誇張表現である、という理由で起こされた裁判に、数ヶ月の闘争の結果勝利した事だそう。客を小馬鹿にしたような店名だが、それでも年々大きくなっていくのは、その商品の質が高いからに他ならない。

僕が三冊セットのノートを胸に抱えながら、五百ページもあつて税抜き百円の英和辞典を眺め、二つぐらい購入しておくと思ひ出があるかも知れない、などと考えていると、隣から見覚えのある顔が、その辞書を手に取った。

「……うん？ ああ、君か」

佐奈さんだ。佐奈さんは、僕よりも先に僕に話しかけると、手に持つ辞書をぺらぺらとめくりながら、

「枕にちょうど良いのだよ」

と言った。

「枕……。確かに、そうかもね。使った事ないけど」

「無論、猫のだ。私は使わない」

「……また騙された」

時々、佐奈さんのこういう手にやられる。多分、僕の方がちよつとずれていて、そこを上手くからかわれているのだと思うのだが、逆にそのせいでどうしても引っ掛かってしまう。

「騙すとは心外だな。君が勝手に勘違いしているだけだろう」

「……。猫の枕を買いに来たの？」

僕がちよつと意地悪げにそう訊くと、佐奈さんは少し目を細めた。

「猫は飼っていないんだ」

「え？ ……嘔吐きだなあ」

「私の妹は猫っぽいからな。猫と呼んでいる」

そう言えば、自然科学部員の家族構成はよく知らない。佐奈さんには、妹が居たのか。

「へえ……。妹さんは、幾つなの？」

「君にはやらんぞ。……。私の一つ下だ」

という事は、中学三年生か。無邪気な佐奈さん……。は、想像になり難い。どんな子なんだろうか。可愛いのかな。

……。危ない。またおかしな方向に走りかけた心を修正した。

「そっか。……。猫、ちょっと撫でてみたかったんだけどなあ」

「ふむ。私は猫は嫌いなのだよ」

佐奈さんは、もっと目を細める。でも今度は、すぐに表情を崩して、

「さて、そろそろ会計せねばな」

と言った。僕もそれに従ってポケットに手を入れる。……。あれ、ない。ポケットの中には財布はなく、そういえば入れた記憶もない。

「……。あー、佐奈さん？」

「うん？」

「財布忘れちゃって……。良かったら、お金貸してくれない？」

佐奈さんは、少しの間硬直した。

「……。なんだ、私に金をせびろうと言うのか」

「そうじゃな……。くもないけど、同じクラスの誼でさ」

「それは、貸す方のセリフだぞ。……ノートだけか？」
「うん。ありがとう」

多少の皮肉を言いながらも、思っていたよりもすんなりと貸してくれた。

僕は何度もお礼をしてから、佐奈さんに押されてレジへと並び、会計を済ました。その時後ろを見返しても、もう佐奈さんは居なかった。つくづく、不思議な格好良い人である。

その後、家に財布を取りに返ってまた商店街へと戻ったが、佐奈さんの姿を見かける事はなかった。

日曜日。昼ご飯を終えた一時ぐらいから、すっかり忘れ掛けている化学の宿題に取り掛かった。原子番号と元素名を覚える……。単純作業とは言え、暗記力に乏しい僕には中々に難関で、課題だった二十番まで覚えるのに一時間を要した。

次に、英語の宿題を始める。先生に言わせれば、「I love you.」を日本語訳する時のような感覚で他の英文とも当たれるようにすべきであり、その為には大量の読解をこなす必要があるのだそうだ。お陰で、宿題を終える頃には四時過ぎになっていた。

(微妙だなあ……)

四時過ぎだと、遠出は出来ない。かといって近場に用事はないし、何もせずに居るには暇が多すぎる。予習するようなタチでもないし、ゲームするような気分でもない。分かりやすく言うと、向こう二時間ほど手持ち無沙汰だ。

メールでもしようかな。そう思った所へ、電話の着信音が鳴り響いた。発信者は……。

「もしもし？」

『……おはようございます』

発信源は多香子さんだった。珍しい。というより、初めてである。

「もう夕方だよ？」

『おはようございました』

「……うん。ええと、用件は？」

『用件……はい、そうですね。用件は、明日の時間割なのですが……』

どうも渾身のギャグだったらしく、少し釈然としない口調で、多香子さんは明日の時間割の詳細について尋ねた。どうやら時間割表を失くしてしまったらしい。

『英語が二時間もあるのですか？』

「英語と、リーディングかな」

『なるほど……。分かりました、ありがとうございます』

「どう致しまして」

電話を切る。

と、すぐにまた着信があった。

『お弁当、作っていきます』

「え……？」

『皆さんの分持っていこうと思います。では』

ブチ。今度は向こうから電話が切れた。

ええと。お弁当。持ってくる。明日から？

(……わぁ)

マイペースというのは、多分こういう人の事を言うんだろうなあ、
と思った。既に家に居ない母親へ、明日のお弁当は要らないという
メモを書いておく。それから、一応連絡しておこうと思って五班の
メンバーにメールを送ったのだが、全員から知っているとの返信が
来た。中々、多香子さんもアクティブである。

色々な事が終わってしまったが、変わらず明日も楽しみだ。朋絵
さんとの登校も、もちろん含めて。

(今日は早く寝よう……)

そう決め込んで、僕はかなり早い夕餉の支度を始めた。

駒黒佐奈?・2

翌日の朝、僕が朝ごはんの片付けを終えた頃に、朋絵さんは訪ねてきた。

「ちょっと、早くない?」

「そうなんです。どうせ道に迷うからって早めに出たんですけど、今日は迷わずに来れました」

にこにことしながら、朋絵さんは誇らしげに自分の胸を叩いてみせる。確かに、朋絵さんが道に迷わないなんて、結構な奇跡だ。

「こう、地図を頭に思い浮かべてですね……目を閉じて、その地図通りに歩いたんです。春花さんに教えて貰ったんですけど、本当でした」

「……明日からは、普通に来た方がいいよ」

「へ、どうしてですか?」

「いつか病院に着きそうだし」

春花さんも、冗談なら冗談で、もっと分かりやすく言って欲しい。朋絵さんは確かに死ななさそうだが、それは殺しても死ななさそうなのではなく、殺されそうにない事に起因しているのだから。

とりあえず、行く準備は整っていたので、少しの間玄関で立ち話をした後、学校へと出立した。防犯の事を措いても、朋絵さんとの会話は楽しく、多少人の目を気にしなければならぬ点を除けば、素晴らしい登校と言って間違いない。

「最近、全然雨が降りませんよね。どうしちゃったんでしょう?」
「んー。……確かに。でも、今日辺り、降るかもよ?」

と、僕は太陽を覆う薄暗い雲を見上げた。思えば入学式以降、一度も雨が降っていないのだから、そろそろ降らない方がおかしい。

「体育、お休みですかね？」

「僕たちはグラウンドだから、そうかもね。女子は、体育館じゃなかった？」

「ああ……そうでした。何だか、雨が降っても体育が休みにならないと、損をした気分になりますよね」

否定すべきなのだろうが、僕は大きく頷いた。土曜日に来る祝日と、日曜日に本州へ上陸する台風、それに体育館体育時の雨は、合わせて三大無駄と呼べるだろう。特に台風に関しては、テレビの前で、ゆっくり来い、ゆっくり来いと念を送るほどである。

「体育、嫌いじゃないですけどね」

「そうなの？」

「はい！ 友達も増えましたし、楽しいです。……疲れますけど」

一瞬不思議に思った。けれどそれは、僕が学校に対して抱いている感情と、実は全く同じなのだった。

「……うん、僕もそうかも」

好きな学校が休みになる事を切に願うのは、多分、僕たちがそれを学生の本分だと思い込んでいるからだ。あるいは、思い込むことこそが、本分であろうと信じているからなのだ。学校全体にそんな空気が流れているから、あながち独善的とも言えない。

……朝から考える事でもないか。僕は、一段と黒く見えるアスファルトを、だんだんと踏みつけた。

朝の晴々しい充実した気分を、これ以上ない穏便なやり方ですたずたにしてくれたのは、一時間目の化学の授業だった。

「えー。先週、えー、宿題を出しましたね。えー、抜き打ちで当てますから、えー、答えるように」

これは、非常にいけない。先生の声は、どうやら脳に対して、眠るよう指令を出すようだ。少し前に読んだ本の知識を借りれば、メラトニンの分泌を大いに促しているという事になる。先生はこんな所で詰まらない初歩化学の授業などしていないで、ただちに実験所へ移るべきだ。

「えー。十八番。おはこですね、えー。では、えー、武田、えー、くん。原子番号十八番は？」

突然当てられて、僕は少なからずうろたえた。ええと、十八番。十七番が塩素だから……。

「アルゴン、です」

「その通りです」

何故か今は脳に心地よいチョークの音を響かせて、先生は黒板に大きくArと書いた。良かった。どうも、一つ三分を掛けた自宅学習は、無駄にはならなかったようだ。

「アルゴンは、えー。八偶則により、えー、非常に安定しています。えー。他の物質とはあまり、えー、結びつかないという事です。え

「、余談ですが……」

始まった。どうやら化学の先生は余談好きらしく、先週も授業の三割は余談という程の頻度で授業に取り入れてきている。

先生はArと書いたすぐ下に、先ほどよりはちよつと控え目に、アルゴンフッ素水素化物(HArF)と記した。そして、HArFは、低温のヨウ化セシウムの……と語り出し、僕の意識もそこで途切れた。

「……いや、だからよ。なんで俺らが、好き好んで実験室で昼飯食わなきゃなんねえんだよ」

重郎が、半分呆れた様な表情で僕たちを見回した。

「文化部でも、昼間の活動は認められている」

「俺が言いたいのは、そう言う事じゃなくてよ……不潔だろ？」

「あら、失礼ね。実験の為に、化学実験室はどこよりも清潔なのよ？」

正論のような気もしたが、実験という言葉聞いて皆の食欲はより減退したようだった。特に春花さんは、露骨に舌を出して嫌々と首を左右に振っている。

「……今日は、手巻き寿司セットをご用意しました」

至ってマイペースな多香子さんが、口論と低テンションを全く気にする様子もなく、重箱のように大きい弁当箱を実験机に開ける。……海苔。保冷剤に囲まれた刺身類。同じく保冷剤に囲まれた酢の香りのするご飯。……。

「多香子嬢は……中々こう、凄いのだな」

さすがの佐奈さんも驚きを隠せないと見えて、酢飯を何粒か取っては口に運んで、むむむと唸った。学校で手巻き寿司とまで来ると、僕には異次元過ぎて逆に大丈夫な気がしてくる。そんな冷静な中、皆を見回してみると、さっきとは打って変わってポジティブな表情になっていた。

「手巻き寿司なんて、久しぶりさね」

「わ。マグロもありますよ」

「イカも、ある」

「皆さんの、好きそうな物を詰めてみました」

多香子さんの解説も聞かないままに、皆は思い思いに頂きますと叫んで海苔を手に取り、酢飯を奪い合い、刺身やレタスを巻いて食べ始めた。僕も、あまり余裕を持ちすぎると残り物ばかりになるので、争奪の相手の居なくなった海苔を取って、誰も必要としなかった酢飯を敷いた。

「……おすすめは？」

「胡瓜巻きが、一番ですよ」

一番人気のなかった胡瓜は、わざわざ別のタッパに分けて入れられていた。それをあえて薦めるのは、余らないようなのか、河童巻きが本当に一番美味しいからなのか。どちらにしても地味には違い

なかったが、今更嫌だと言う訳にも行かず、僕は胡瓜だけで巻き寿司を完成させた。

「……見た目には、ちょっと地味だね」

「味も、地味かと」

何やら豪華な海老巻きを作っている多香子さんが、こっちをちらりとも見ずに言う。

「だ、騙された……」

「騙してはいません。ただ、地味なのが一番だという事です」

「じゃあ、どうして海老巻してるのさ」

「……一番を常を選んでいては、いけませんから」

ちょっと言い淀んだのは、恐らく僕の疑念が正しいからに他ならない。つまりは、胡瓜巻きは僕に押し付けられたのだ。可哀想な僕と胡瓜。僕は、同じ身の上である胡瓜巻きに、がぶりと喰らいついた。

……。美味しいのだが、衝撃的な何かはやっぱりなかった。さつさと食べ終えて、僕は二本目の製造に取り掛かろうと海苔を手にした。

「……胡瓜しかないっ!」

既に、刺身類が入っていた箱は、暴君蹂躪、天災多発により大葉とツマだけという惨状になっており、他のレタスや卵焼きなども、全てどこかへと消え去っていた。残っているのは、タップパ胡瓜。カッパ胡瓜っぽくて風流だ、などとは言っていない状況である。

「おめでとうございます。胡瓜に縁があるんですね」

そんな縁は嫌だ。

だが、空腹の音に勝てるはずもなく、僕は二本目、そして三本目も胡瓜巻きという、胡瓜地獄を体験するのだった。

社会科教室を掃除しながら、結局雨を降らす事なく通り過ぎていった雨雲を、窓から眺めた。

いくら何でも、雨が少なすぎるのではないか。入学が、先々週の月曜日。今日まで、十五日間も雨が降っていない。どんよりとした事さえ、今日を除いてなかった気がする。何か良くない出来事の前触れではないだろうか、と、妙に僕の勘は昂っていた。

……。ああ、それよりも、先にしておきたい事があった。

「ね、重郎」

「……ん。何だ？」

あの一件以降、僕と重郎の間には、妙な溝が出来ていた。最初から、二人が付き合うのなら、それで良いと思っている。久美を想っていないと言う訳ではないが、だからと言って二人を祝福しないという法はない筈だ。

「僕は、二人の関係、良いと思うよ」

「……………」

「二人の事、応援してるし」

「……それ、すげえずりーよ。……。ありがとな」

ずるい。その言葉の真意は分からなかったが、僕の差し出した手を、重郎は握ってくれた。多分、これで良いだろう。未だに残る、

僕と久美との見えない溝よりは、ずっと目立たなくなった。

総指揮担当の明菜さんに指差されないようにと、僕たちはまた、それぞれ掃除へと戻った。

七組五班が化学実験室に入った頃には、さも当然のように久美達は揃っていた。

「……三人とも、掃除とかないの？」

これまで、優さんに先んじて到着できた例がない。本人は、化学的に当然だとか、物理的に可能だと言っているが、僕たちが教室から直行してくるような日に、掃除をしてから来ていて先に入っているなんて、現実的に無理だ。何か、反則的な、越権的な、背理的な事をしているに違いない。

「週に三回あるよ、勿論」

だが、久美は即答した。

「でもさ、それだと、いつも先に来てるのっておかしくない？」

「いえす！ いい質問ね。それはごく地学的に、掃除場所を化学実験室に限定する事で、可能になるわ」

「ああ、なるほど……部活に、体張ってるね」

相変わらず地学的ではなかったが、この答えには納得せざるを得なかった。……しかし、昼食もここ、掃除もここ、部活もここでは、その内に化学実験室は、彼女らの基地になってしまうのではないだろうか。

「当然よ。リーダーは、常に最初に来なければいけないものなの。
……それより、ちょっと聞いて欲しいのだけど」

「そうかなあ。何？」

「……あなたの所の子たち、ちょっと個性的すぎるのよ。私、ここ二週間で、自分がどんどん丸く縮まっていくのを感じているわ。これでも、中学生の頃は超絶ムードメーカーとまで呼ばれて……」

……。ただの愚痴だった。でも、優さんを含めて自然科学部には、個性的な人材が揃っているような気がする。こんな所なら、没個性も個性となって、僕でも輝ける……。のかも知れない。少なくとも、今の所その兆候は全く見られなかったが。

午後五時。かなり前から部費も尽きている為、談笑の内に解散となった。部費のない自然科学部なんて、どうしようもない気がする。

「……あ、そうだ。佐奈さん」

たまたま思い出して、僕は佐奈さん呼び止めた。

「ん。何だ」

「お金、返しと思うって」

と言いつつ財布の中を探ったが、どうも穴の開いた硬貨が見つからない。かといって、大きい硬貨もないようで、僕は言い出しておいてやっぱりなかったという恥ずかしい事態を避けるため、止むなく百円玉を二枚渡した。

「おや、利子が付いたか。ルーラコーラでも買いに行くかな」

佐奈さんが重度のコーラ病だという事は、既に周知の事実である。

特に最近のハーブームはルーラ・コーラ・ジュースらしく、僕も朝から飲んでいる姿をよく見かけていた。そのせいか、佐奈さんの事を数学の先生が、ルーラーと呼ぶようになった。

「最近、安い自動販売機を見つけたんだよ。君もどうだ？」

「遠慮し……あ、やっぱり行こうかな」

僕は、誼絵さんの言葉を思い出して、そう言い直した。途中までも、一緒に帰ればお互いの安全が確保できる。それに、佐奈さんと一緒に歩くと、こう、自分のランクが一つ二つ上がった気分になる。ブランド物のバッグを手に行っているような感じだ。

「なんだ、はつきりしないな」

「行く、行くよ」

僕はそう、大いに頷いた。

駒黒佐奈?・3

ルーラ・コーラ・ジュースは、新興飲料会社ルーラの主製品で、このジュースだけで各地に自動販売機を置けるほどの恐ろしい人気を誇っている。一缶百円という、安いとも高いとも取れないような価格も、毎日飲もうというような人々にとっては、かなり安い物なのだろう。僕は、名前通り過去の物になってしまったカコ・コーラを昔から愛飲していたので、ルーラ・コーラ・ジュースに対してはどちらかと言うと、侵略者を見るような目を向けていた。

「どうやら、頭痛にも効くらしい。私も、ここの所頭痛に悩まされていたが、ルーラコーラを飲むといくらか鎮まるからな」

「へえ……」

「君も、二本か三本か買い溜めて置くといい」

とは言え、珍しく興奮気味に話す佐奈を見ると、敵愾心も引いていくような気がする。僕にとっては、日常の中ですらどうでも良い部類に入るような事が、こうして熱弁を振るう程に重要に思えるような人も居るとするのは、どこか不思議だ。

「ちなみに、いくらなの?」

「うむ。一リットルが百五十円だ」

……。牛乳とお酒以外で、一リットルの自動販売機なんてあったんだ。

「……よし、着いたぞ」

佐奈さんに言われて顔をあげると、そこには、ルーラコーラ集合

住宅と呼んでも差し支えないほどの、ルーラ・コーラ・ジュース専門自動販売機の密集地が広がっていた。左端から、『八十ミリリットル・ミニマムサイズルーラコーラ』だけの自動販売機、『二百ミリリットル・スモールサイズルーラコーラ』だけの自動販売機、以降、三百五十、五百、千と続いている。果たしてこれだけ設置するほどの需要が、ルーラ・コーラ・ジュースにあるのだろうか。

「とりあえず……」

と、佐奈さんは迷わず一步踏み出して、千ミリリットルの自動販売機の前に立った。そして、片手で器用に樋口一葉を投入すると、ダース買いのボタンを押す。すると何やら、自動販売機の内部で騒がしい動作音が響き、しばらくしてから完了を知らせるピー、という音が鳴った。下の取り出し口を佐奈さんが開くと、そこにはダンボール箱が一つ、入っていた。

「いやいやいや……ダース買い？」

「そうすると、割り引いてくれるのだよ。千六百円になる」

百五十円が十二個だから……通常だと千八百円だ。二百円の為に、ダース買いする佐奈さんは庶民的である……とは、目の前で段ボールを抱える姿を見ては言えない。

「絶対佐奈さんだけでしょ。そんな買い方するの」

「ダース買いと言うボタンを付けるぐらいだ。そうでもないと思うぞ」

なるほど、一理ある。でも、大人たちが列を成して、この自動販売機でジュースを箱買いしていく様子は、見たくも想像したくもない。

……と言うか、ここまで来ると、一種の宗教なのではないだろうか。

「さ、君も早く」

そう思い始めると、佐奈さんの言葉が悪質な勧誘の言葉にしか聞こえなくなった。

「ん……まだ家に沢山あるし、良いや」

「む。そうなのか。無駄足を踏ませてしまったな」

「ううん、大丈夫」

多少の嘘は仕方ない。何だか、ここで買っただけな気がすると、浮き立っていたはずの心が警鐘を鳴らしているような気がするのだ。何が僕をこんなにも不安にしているのかは分からないが、ひとまず心に従うべきだ。

「そうか？ ……君の家は、どっちだったかな」

「ん、あっちだけど」

「すると、逆方向か」

また明日。それだけ言って、佐奈さんはさっさと歩いて行ってしまった。

（……嘘、バレてるなあ……）

僕は、良心を深く抉られたような心持で、反対方向へと歩き始めた。

幸い、帰り道に怪しい車を見かける事はなかった。どこからも連絡は来ていないので、まず大丈夫だとは思いますが、ちゃんと皆の無事

も祈っておく。

それにしても、ふと不安に駆られたからと言って、大変な事をしてしまったものだ。折角、佐奈さんと仲良くなるチャンスだったのに、わざわざバレル嘘を吐いて、距離を置いてしまった。明日、謝ろう。そう恨みに持つような人でもないはずだ。

そう思うと気が軽くなって、軽くハミングまで奏でながら勢いよく家の扉を開いた。

晩御飯を食べた僕は、自分の部屋へと入って、すぐに携帯電話を開いた。新規作成、宛先は優さんである。

「……やっぱり気になるよね」

そうひとりごちた僕が優さんに送ったのは、ここ最近続いている雨が降らない案件についてである。謎といえば謎で、思い出す度に気になるので、今の内に解消しておこうと思ったのだった。

しかし残念な事に、優さんからの返事は、まさに拍子抜けするような物だった。

『二週間程度の晴天は、珍しくないわ』

……。何だ、そうなのか。継いで、天気予報によると明後日は雨だと教えられると、僕は雲模様についての興味を一気に失った。知らぬが花、とはこう言う事だろうと思った。詰まらない。

お礼のメールを送って、ベッドに寝転がる。……時計を見るが、まだ八時半だ。寝るには、あまりにも早い。

(そう言えば、この時計……)

と、僕は、目覚まし時計が、どうしても鳴らない事を思い出した。前の時計は目覚まし機能だけが壊れ、今の時計に至っては最初から目覚まし働かない。こんな事も、偶然の一致で片付けられる物だろうか。少なくとも、最近のこの二つの時計以外には、目覚まし機能だけが動かなくなったなどという事は、聞いた事がない。

……解明したい。だけど、また新しい物を買って三度続いてしまったら、あまりに怖い。物理的な、実際的な怖さではなく、心霊的に、ごく精神的にダメージを受ける事になる。まさかそんな事はあるまい、と思うには思うのだが、そこに行き着くと最後、それならあえて買わなくても良いじゃないか、という結論に辿り着いてしまう。しかし、気になる。

(……そう言えば、誼絵さんの携帯の電話番号、知らないなあ……)

不思議な事、ことミステリー属、オカルト系については、僕の中では誼絵さんと相場が決まっている。時間が巻き戻るといふ、普通なら理解不能で混乱までするような不思議にさえ、誼絵さんは明確な答えを与えてくれたのだから。

(でも、朋絵さんに電話して繋いで貰うっていうのもちょっとアレだし)

あの邪心のない朋絵さんが、そこまで思い至るかは分からなかったが、逆に言えば朋絵さんにまでロリータ・コンプレックスのレツテルを貼られたら、救い所がないという事だ。……。いや、好きなのはロリーな幼女ではなく、ツンデレな美少女である。金髪で、ツインテールだったりするとかなり良い。

自分でも思考の逸れて行くのを感じたので、軌道修正ついでに目覚まし時計を手にとってみた。

(……やっぱり鳴らないなあ……)

時間を合わせても、試しに『切』にスイッチを変えてみても、叩いても撫でても、全くなる気配すらない。あるいは音がかなり小さいのではないかと思い耳を近づけてみたが、遠くで悲しげに鳴く鳥の声が聞こえるばかりで、ベルの音は全く聞こえなかった。

いくらお小遣いが多いからと言って、高校生の僕にとって目覚まし時計は、中々に高価だ。悔しい。だが、よく見直すと、取扱説明書もどこかお座りな説明しかしていない上に、保証書も付いていない辺り、もしかすると悪質な詐欺だったのかも知れない。会社名は……LR電子。……うわぁ、聞いた事がない。

(……泣き寝入りしかないかな)

別段、時計として難があるわけではない。もう一度見直すと、時間は九時過ぎへ変わっていた。何も、する事がない。泣き寝入る勢いで、寝入ってしまおうと、僕は布団を被った。

十分ほど目を閉じて、やっと眠気が襲ってきてくれた頃になって、僕の脳裏に後悔が走った。

(……今日、ラジオの日だった……)

そう言えば、先週も聞いていない。起き上がってハードディスクに落とすだけ落としておこうかとも思ったが、折角良い感じに温まった布団から出るのは億劫と思い直して、結局そのまま寝に入った。

「……あなたの為に、夢に出てきたんじゃないの。勘違いしないで」

……。目の前には、金髪のツンデレっぽい女の子が立っていた。
夢の中の人物が夢だと教えてくれるのは、明晰夢の内なのだろうか、
などと思いつつ、僕は相槌のように疑問符を浮かべる。

「え？」

「辺りを見回してみなさい。一面の花畑でしょう」

言われるがままに、きよろきよろを頭を振る。おお、確かに、ひまわりがどこまでも、地平線の彼方まで凜として咲き乱れている。
僕は小さく、歓声を漏らした。

「でも、妙だとは思わない？ この花たちは、皆違う方を向いている」

……そう言われてみると、よく言われるひまわりの性質に反して、
片方が東を向けば、片方が西北西を向いているようだ。太陽は……
一応、真上にある。だけでも、上を向いているひまわりは一つとしてない。

「確かに、そうだね」

「……はい、今日はおしまい。別にあなたの為じゃないの、これは本当よ」

少女は、謎のニュアンスを含んだ、謎のセリフを残して唐突に消えていった。

……金髪で、ツンデレっぽい。これは、僕の理想像に近い。だが、

僕はもつと勝気な方が良いし、何よりポニーテールというのが気に入らない。夢の中でぐらい、ままならない物か。

少女が消えても、周囲三百六十度を囲うひまわり畑はそのままだった。……。周囲がひまわり畑となると、一体僕はどこに居るのだろう。どこから来たのだろう。足元を見下ろしたが、足元には靄が掛かって、よく見えなかった。

しばらく、放心する。その内、どこからか音が聞こえてきた。苦しそうな音。すぐにその音は、呻き声だと分かった。

更に耳を澄ますと、それは自分の呻き声だった。

……。全身びっしり汗を掻いていた。

悪夢ではなかった。だが、無性に苦しい。ひどく渴きを感じて、こんな時にと常備してあるスポーツドリンクを一口飲むと、やっと心が落ち着くような気がした。

時計は淡白な音を立てつつ、十二時ちょうどを示している。

(……はぁ。眠って疲れるなんて、馬鹿みたいだね)

ダメ押しにもう一口喉に注ぎ込んで、僕はまたゆっくり、枕に頭を預けた。

駒黒佐奈?・4

目覚めは思いの外爽快で、深夜に一度目が覚めた時の不快はどこかへと飛んでいってしまったようだった。

朝ご飯を食べた後、いつもよりかなり早くに家を出た。朋絵さんに毎日通わせるのはあまりにも思いやりに欠けるし、何より冗談が本当になって、朋絵さんが車に轢かれなくても限らない。それを防ぐには、やはり、こちらから出向くべきだった。

メールでその事を伝えつつ、朋絵さんの家への道を歩いていく。なるほど、空がやけにどんよりとしている。明日辺りに雨が降るだろうという天気予報は、どうやら当たりそうだ。

「あ、おはようございます」

朋絵さんの家の前に着くと、もう朋絵さんは支度を終えて道に出てきていた。

「うん、おはよう」

軽く会釈をして、二人で歩き出した。まだ二日目なのに、まるで慣れているような感じがする。自分で言うのはどうかとも思うが、朋絵さんとは相性が良いような気がしていた。

(……と言うか、朋絵さんが凄い人なのかな。優さんとも仲が良さそうだし)

そう思い始めると、何だか羨ましくなってきた。それだけコミュニケーション能力があって、憎まれない性格だったら、敵を作る事もないだろう。それでいて楽しく過ごせるなら、これ以上の事はな

い。

……。今になって再び、昨日のコーラの事への後悔が盛り上がってきた。結果飲まないにしても、とりあえず買えば良かったのだ。どうしてわざわざ、バレるような嘘を吐いてまで買わない事を選んでしまったんだろう。

「はぁ……」

ああ、しまった。これ見よがしに溜め息を吐いてしまった。

「♪」

「……………」

「♪ ……あれ、どうかしましたか？」

「う、ううん。何でもないよ」

こういう微細に気付かない所も、朋絵さんの魅力の一つだと思う。それから、どうかしましたか、と訊ねて来るその顔も、やっぱりどこか猫っぽくて可愛い。えへへ。えへへ。

「……あの。顔、にやけてますけど……」

「へ……あ、ああ、うん、ゴメン」

……僕も学習しないなあ。結局そこに落ち着きつつ、どんよりとした空を見上げた。

「部費も尽き、時間だけがある……」

放課後、いつも通り集まった僕たちに、優さんは普段よりもかなり情熱的に、声を張って訴えかけた。

「今日は、中間試験へ向けて、勉強会を行おうわ！」

「え、えすけーぷ、おーけー？」

「いえす！ ……あ、いや、駄目よ」

春花さんや重郎のような常連が、いつも通り反対の意思を口々に叫んだ。逆に多香子さんや明菜さんは、既に決まったものとしてカバンから教科書を出し始めている。何と言うか、足並みが揃わないにも程があると思う。

「はいまずは、三角関数」

化学実験室の大きな黒板に、優さんは大きな円を描いた。反対意見はなかった事にしたらしい。そうなる、春花さん達も従わざるを得なくなったようで、二人は渋々教科書を取り出していた。

五分ほど優さんの講義があった後、わざわざ用意したらしい問題プリントが配られた。……。……。……。

「……ひっ。……酷いわね」

……。全体的に、優さんが声を裏返すほどに酷い成績だった。中でも久美と僕の低得点は群を抜いており、満点だった佐奈さんの足を引っ張りまくっていた。

「そうね。三十度と四十五度の正弦余弦ぐらいいは、覚えておけば良いわよ」

「……うー、言語難しい、言い直し希望！」

「……。三分のπと四分のπのサインコサインぐらいいは、覚えなさ

い」

「更に難しくなったやん……っ」

三角関数は、どちらにしても難しいと思う。合成やら和積の公式やら加法定理やらの前に、まずコサインとサインの値の正負が分からない。単位円を描くと先生は言うのだが、単位円を描けば良い事すら忘れてしまうのは学生の常なのである。

「……面倒ですね……」

僕のすぐ隣で、僕より先に多香子さんが本心を口に出した。とても小声で。優さんに聞こえないように。……中々策士だ。

「とりあえず、三角関数を完璧にしないかね」

優さんはそう言って、黒板にもう一つ大きな円を描き始めた。

……。三角関数が完璧になった。科学部としては、数学というのはちよつと違うなあ、と思っていたのだが、優さんによれば数学も自然科学の内らしい。いや、だからと言って、部活動でテスト勉強をする理由になる訳ではないのだが。

「いえす！ ……一応言っておくけれど、明日もって事はないから、ちゃんと来るように」

優さんは、一応勉強会が不評だった事に気付いているようで、勉強会は今回が最初で最後という事になった。

さて。昨日の事もある。僕は、早くも一人で帰ろうとする佐奈さ

んを引き留めた。

「ルーラ・コーラ・ジュース、買いたいんだよね」

「ふむ？ ……ふむ、なるほど。気を遣っているなら、別に構わないのだが」

「いや、普通に、欲しいんだよ」

昨日家に在庫があると言った事には矛盾するが、既に嘘はバレている筈だから、むしろこの方が潔くて良い。佐奈さんはいくらか考えた後、承諾してくれた。

「優嬢の熱意にも、困ったものだな」

「そうだね。……でも、佐奈さんは頭良いから、羨ましいかな」

「そうか？ 私より、明菜嬢や優嬢の方が、ずっと頭脳派だよ」

昨日と同じ道を歩きながら、僕たちはそれなりの距離を取りながら話した。

「……皆、凄いなあ……」

「何。久美嬢の様なのも可愛いものだ。……君の場合は、ちょっと難があるが」

うわあ、酷い。でもまあ確かに、勉強が出来るか、気さくか、どちらかは持っていないと先々困る気もする。その点、どちらも持ち合わせる重郎や、春花さんや、佐奈さんは偉大だ。

そのままいくらか歩いていると、ある時珍しく佐奈さんの表情が大きく変わった。

「……あ、お姉ちゃん。と……あ、彼氏さん？ ついに脱却？」

それと同時に、向こうから、どこか朋絵さんに似た中学生ぐらいの女の子が声を掛けてきた。

「いや、違う」

「そっかー。ま、お姉ちゃんだもんねえ」

女の子は佐奈さんを見つめながら、小さく笑った。佐奈さんはちよっと不機嫌そうにしながら、僕に、

「妹の紗江だ。ほら、前に話した……あれだ」

妹……と言うと、SYOSOで聞いた猫っぽい妹の事だろうか。ああ、そう言えば、朋絵さんに似ていると思えた辺りが、どこか猫っぽいような感じもする。

「ええと……初めまして、武田昴です」

「駒黒紗江です。……ふうん」

と、紗江……何だか大人びているので、敬意を表して、紗江さんは、品定めするように僕をじっと眺めた。そして、今度はさっきと違う明らかな笑みを漏らしながら、

「私の事を話したって事は、候補だったりはするのかな、お姉ちゃん」

「……全くない」

「へえ……」

佐奈さんは、心なしか居心地が悪そうだ。僕自身、佐奈さんの妹である紗江さんから妙な威圧を感じて、何だか冷や汗を掻くような心持がしている。

「ねえ、武田さん」

紗江さんは、僕に向き合った。

「……うん、何？」

「お姉ちゃんの事、もっと知りたくないですか？」

「紗江。ストップだ」

「これ。暇な時で良いですから、連絡して下さい」

差し出された紙の切れ端には、端正な文字で電話番号らしき数字が並んでいた。つい、その勢いに押され、受け取ってしまう。

「紗江！」

佐奈さんが、僕が知っている限りでは初めて叫んだ。

「……紗江、帰るぞ」

「はいはい、お姉ちゃん」

「……………。……そうだな、その紙は破って捨ててくれ」

だが、すぐにいつもの冷静な声に戻って紗江さんの背中を叩いた後、今度は常より低いくぐもった声で僕に言った。

「う、うん。ええと、また明日」

「ああ。また明日」

そう言うと、手を振る事もなく、佐奈さん達は僕に背を向けて歩いて行ってしまった。一人取り残された僕は、十秒ほど迷った後、家へと帰り道を歩き出した。

それでも平常を装っていたのはさすがだが、それにしても佐奈さんが冷静を欠いていた事は明らかである。ああやって叫んだという点でもそうだし、ルーラ・コーラ・ジュースの購入同行を途中で放棄する事に対する謝罪がなかった事についても、佐奈さんらしくはない。そしてその原因が、紗江さんと、紗江さんの知りたくないか、という問い掛けにある事は、ほぼ間違いなかった。

だが……。だからと言って、すぐに紙切れの番号に電話しよう、とはならない。佐奈さんは最後に、捨てるように言った。僕は、頷いた。もし僕が電話をしたら、先のルーラ・コーラ・ジュースの件と合わせて二度、佐奈さんを裏切る事になる。

(でも、掛けないと、何にも分かんない)

僕は、久美の事件以後、情報を得る事に対して、大きな重要性を見出していた。久美について、もっとちゃんと知っていれば、あんな回りくどい事をして、また別の、重郎や春花さんとの軋轢を生み出す事はなかったのだから。

……とは言え、今回はどうだろう。電話した事が佐奈さんに分かれば、いや、分からなくても、僕の心の中でだけであっても、佐奈さんと僕との間に亀裂が生じてしまう。電話する事、情報を得ようとする事自体が、軋轢を生み出す原因になるのだ。

だが、少なくとも、佐奈さんと紗江さんが、姉妹であんな関係でいる事は、健全ではない。朋絵さんと誼絵さんのように、おしどりになるべきだとは言わないが、あんな……外から見たら憎み合っているようにしか見えない関係は、改善されるべきだ。そして、僕が

改善させようとするのなら、やはり紗江さんから話を聞かなければならない。

（……逆に、佐奈さんに電話してみるとか）

そんな考えも一瞬浮かんだが、すぐに消えていった。佐奈さんは隠したがっている。電話したところで、上手くかわされるか、悪い場合には嘘を聞かされる可能性もある。

……こうなっては、致し方ない。佐奈さんへの裏切りになる事は重々承知の上で、僕は、紙切れの番号へダイヤルした。

駒黒佐奈?・5

「……私が勧めたんですけど、紙は破って捨てて欲しかったなあ」

電話番号は、予想通り紗江さんの物だった。僕が一通り挨拶を終えると、紗江さんはどこか潜めた声でそう言ってから、すぐに声色を明るく灯して、

「お姉ちゃんの事ですよね? どれくらい、聞きたいですか?」

と僕に訊ねた。

「んー……詳しくは、良いや。何があったのかだけ、教えて欲しいかな」

「……三年前のお姉ちゃんと、今のお姉ちゃん。全く別人です」

「三年前に、何かあったの?」

「はい。色々」

佐奈さんの、過去について。どうも話は、その辺りに進んでいきそうである。このまま聞き続けようという思いが半分、やっぱり断ろうという思いが半分で伯仲し、僕は慣性に従って話を聞いているだけだった。

「父親が早くに死んでしまって、お母さん一人で私たち姉妹を育てたんです。お姉ちゃんは、とつてもわがままな私の分もお母さんのお手伝いをする、まあ、健気な姉という感じでした。これが、三年前まで」

今の佐奈さんを、そのシチュエーションに当てはめてみる。……

多少違和感はあるが、似合わないという程ではない。むしろ、手伝いを全くしない佐奈さんという方が、僕にはおかしい感じがする。

「お姉ちゃんは、いつでも柔らかく笑っている女の子でしたから、誰かに嫌われるとか、憎まれるとか、逆に恨んだり疎んだりする事はなかったんです。だから、お姉ちゃんが中学校に入って、好きな男の子を見つけて、その男の子と想いあうにも、そんなに時間は掛かりませんでした」

いつでも柔らかく笑っている……ああ、確かに、今の佐奈さんからは、想像もつかない。どちらかと言えば、普段豪快に笑い、時々微笑むというイメージだ。

……に、しても。僕は、紗江さんの言葉を信じて良いものか、迷い始めていた。紗江さんの言葉が、どうも機械的というか、台本を読んでいるように流暢に放たれてくるからだ。余程話し慣れているか、周到に用意していなければ、多分こうはいかない。

「その男の子も片親に育てられた人でした。……私達のお母さんと彼のお父さんが結婚してしまったのが、お姉ちゃんの不幸です」

「えっ……」

「お姉ちゃんの昔の想い人は、今、お姉ちゃんの兄なんです。同時に、私のお兄ちゃんでもある」

……。世の中には、そんな事もあるのか。

「それ切り、お姉ちゃんはある風に、ちょっと人を食ったような性格になりました。兄への恋心と、私への憎しみも、どこかに秘め込んでいるんです」

「紗江さんへの、憎しみ？」

「小学生の私は、お母さんの再婚を強くねだったんです。私が、お

姉ちゃんの恋路を塞いだんですよ」

かなり、複雑な事情のようだ。当然と言えば当然だが、佐奈さんがそんな昔を持っていたなんて、全く知らなかった。……でも。

「……佐奈さんは、実妹を憎んだりするような人じゃないと思うよ」

紗江さんを前にした時の佐奈さんは確におかしかったが、それでも、佐奈さんに限って人を憎んだりは、しないと思う。

「紗江さんだって、佐奈さんから直接、何か言われた訳じゃないんでしょ？」

「それは、そうですね。でも、お姉ちゃんから、私が何に似てるとか、聞いてませんか？」

……確かに聞いている。

「猫、だっけ」

「その通りです。お姉ちゃん、猫嫌いなんですよ」

何も言い返せなかった。確かに、猫を嫌いだと言う佐奈さんが、同じ舌で紗江さんを猫のようだと評するのなら、それは暗示的に紗江さんを嫌いだと表明しているのに変わりない。と、僕は思う。

「とーっと。これで話、終わりです。思ったより、長く話しちゃったなあ」

「……うん。ありがとう」

「聞かなかった方が良かったと、思ってますね」

否定できない。少なくとも今の所、聞いて得したとは、思ってい

ない。

「まあ、また気軽に電話して下さいね。昴さん、良い人そうだし」

僕を置いたまま勝手にそう言って、紗江さんから電話を切った。

紗江さんは決して佐奈さんを嫌ってはいない。ただ、憎まれている、という思いが、ああいう高圧的な態度を取らせるのだ、というのが、一時間後の風呂場での僕の考えだった。

猫の話を出してきた辺り、紗江さんが嘘を吐いていないのは間違いない。だから問題は、紗江さんの認識に勘違いや取り違えがないか、という点だ。つまり、本当に佐奈さんが彼女を嫌っているのか。電話の中では何とも言えなかったが、一度冷静に返って考えれば、それは全く不確実な事である。猫のようでない人をあえて猫を呼ぶのならそうだろうが、実際紗江さんは猫っぽいのだ。ならば、猫のようだと言うのは、当然の事なのではないか。あるいは、照れ隠しという線もある。

どちらにせよ、佐奈さんの思いを知らない限りは、この姉妹関係の改善は難しそうだった。多分、佐奈さんの過去については、僕がどうこうような事ではない。関わらないのが、恐らく最善策だろう。……。思い返してみると、ここ最近だけで、かなりの面倒事に数々首を突っ込んでいるような気がする。世界が云々という件もそうだし、久美の自殺騒動も、自然科学部も、そして今まさに手を出した駒黒姉妹についてもそうだ。高校生とは、そんな物なのだろうか。

(……皆、可愛いからかな)

久美にしても佐奈さんにしても、他の科学部のメンバーにしても、

他の女の子よりどこか映えて見える。重郎も、やはり、他の男子に比べればかなり格好良く、万能だ。

「幸せだなあ」

今まさに、姉妹関係にあくせくしながら過去を苦しむ佐奈さんには悪いと思いつつ、僕はそう呟いた。

昨日聴き損ねたラジオ番組に耳を傾けていると、窓の外から強かにアスファルトを打つ雨の音が聞こえてきた。ちょっとぐらい不審に思えても、大体の事は気のせいだったりする。雨については、この教訓が色濃く出た。

そう言えば、傘はあったっけ。そう思い立って玄関へ確かめに行くと、案の定、かなり前に壊した一本を描いて他に在庫はなかった。明日を考えて買いに行こうかと思ったが、更によく考えると、傘を買いに行く為には、傘がないと濡れてしまう。傘を買いに行く為に濡れるなんて、何とも馬鹿らしい。

(……朋絵さんに借りようかな)

一緒に登校するのだし。朝、傘を二本持ってきて貰えば良い。もう九時を回っていたが、僕は朋絵さんに傘願いのメールを送った。

『ラジャです』

十秒も掛からず、朋絵さんから返信が来た。ありがたい、これです。とりあえず明日はしのげるだろう。僕はありがとう、とメールを打って置いて、携帯の電源を落とした。

何やら、今日は眠たい。色々と考えさせられる事が多く、頭が全体的に疲れている気がする。僕は、ドシツと音を立てベッドに寝転がった。知らない間にラジオは終わっていて、プレイヤは自動で電源を切っている。このまま眠っても、問題ない。

(……変な夢、見たんだっけ)

頭を枕に預けて目を閉じると、ふわっとそんな事が脳裏に思い出された。ひまわりがどうか、ツンデレがどうか言う夢だったが、具体的な内容までは殆ど記憶にない。

(寝たら、また見えるかな)

ぼんやりした頭で、僕は淡くそう思った。

駒黒佐奈?・6

黄色の花弁は、しぼんでいるという訳でもなく、ただどれもが一樣に下を向いていた。前回と同じ花畑には、太陽はやはり真上にある。

「愛とは何ぞや?」

昨日見た、ツンデレ少女を期待して声に向き合おうと、そこに見えたのはいかにもよぼよぼな、腰を曲げて杖をついたお爺さんだった。一瞬おののいて半歩下がったが、そのすぐ隣にツンデレ少女を見つけて、何とか踏み留まる。

「……私だけで良いのに」

「ほっほっほ。何、心配しておる訳ではない」

これは、夢だ。それは間違いないのだが、二日連続で夢を見るというのは、よほど心に残っている光景なのだろうか。ひまわりなんて、ここ数年気に掛けた事はなかったつもりなのだが。

「ひまわりは、太陽が嫌いなようじゃ。のう、少年」

「え……あ、はい」

「では少年。愛とは何ぞや?」

お爺さんは、にこにここと、答えを期待していないような雰囲気僕を見つめた。何だろう。質問の、意味は分かるが意図が分からない。ここに居る僕に、何を問おうとしているのか。一体どんな答えを求めているのか。

「……分かりません」

「ほほ、そうじゃろ。実は、ワシ達も知りはない。何せ、夢じゃからの」

……当然だ。夢の中の登場人物に、夢について説かれると何だか悔しい。

「よし。今日は終いじゃ」

老人の一声と共に、僕の意識は全く昨日と同じ経過を辿って、急速に遠のいていった。

……。朋絵さんが鳴らしたチャイムで目を覚ました僕は、夢中で制服に着替えて、洗面所で軽く口をゆすいだ後、台所に用意してあった朝食には目もくれず急いで玄関へ駆けつけた。

「今起きたって感じですねえ」

「うん。ちょっと最近、眠気が酷くってさ」

「暖かいですしね」。今日は、雨ですけど。……あ、傘、持ってきました」

寝起きでボーっとする頭で、朋絵さんから白い傘を受け取る。ありがとう、とお礼を言ってから早速広げようと頭を働かせてよく見ていると、何やら傘に桃色の汚れがいくつか斑点になって見えてきた。これは……。

「……花柄？」

「はい！ 可愛いですよ」

広げて見ると、白地に薄桃色の桜と薔薇の花が、傘の中央から端までを全て埋め尽くしていた。僕の脳内では、濃い桃色の髪の女の子が、桜と桜吹雪を背景に、こんな傘を差している絵が一瞬で想像された。つまりは、可憐な女の子が持つような傘である。

「僕、何か悪い事したっけ」

「朝寝坊した事ですか？ 昨日、夜更かししたんじゃないです？」

「いや、寝坊の事じゃなくってさ……」

この傘……と言いかけて、ふと朋絵さんに目をやると、何故か朋絵さんはシックな暗い茶色の傘を、肩に乗せて可愛く差していた。

「こ、こっちの傘の方が、朋絵さんには似合うんじゃない？」

「そうですか？ でも、誼絵は、こっちの方が似合うって言うてくれしましたし、私もこっちの方が好きです」

……ふむ。これは、誼絵さんからの嫌がらせか何かなのだろうか。

「ちょっと、恥ずかしいかなあ」

「気にしないで大丈夫ですよ、多分」

と、朋絵さんは僕に背を向け、雨の中を歩き出して行ってしまった。そのまま立ち尽くしていてもどうしようもないので、仕方無く、花柄の傘を広げてその後姿を追いかける。珍しく、というか朋絵さんの柄がなく、今日はちょっと不機嫌なようだ。

「何かあったの？」

「……雨、嫌いなんですよねえ。陰鬱、って感じですよ」

確かに、久しぶりの雨空は、見るに毒々しい鉛のような色を放っていて、少なくとも陽気には全く見えない。傘に弾けて奏でられる雨音のメロディーは、花柄の傘という事を考えなければ綺麗ではあるのだが。

「……そう言えば、朋絵さんってコーラ好き？」

「はい、好きですよ。カコ・コーラ、美味しいですよ」

おお、身近にカコ・コーラ派発見だ。是非とも、ルーラ・コーラ・ジュース打倒の為に、十人ぐらい集めて、佐奈さんに改宗を呼び掛けたい。

「だよね、ルーラ・コーラとか、目じゃないよね！」

「あの、声、大きすぎます……」

……うわあ。花柄の傘を持って、女の子と二人で登校しながら大声で叫ぶとか、さすがに自分でも顔に出るくらい恥ずかしい。

「ルーラ・コーラ・ジュースも、美味しいそうですね。佐奈さんが、言っていました」

「飲んだの？」

「いえ、結局飲まずじまいでしたね」

佐奈さんの布教意欲には、目を見張るものがある。多分この様子だと、自然科学部のメンバー全員にはすでに勧誘を済ませているのだろう。それでいてそんな話を聞かないと言う事は、つまり誰もルーラ・コーラ・ジュース派にならなかったという事だ。カコ・コーラの天下も近いかも知れない。

「何にせよ、早く止むと良いよね」

白地から透かした雨雲を眺め、さっき叫んだのとは打って変わって小さい声で、僕はそう言った。

雨は長続きせず、十二時半現在化学実験室からのデータでは、降雨は観測されなかった。代わりに化学実験室では、ビーカーとアルコールランプを用いた即興そうめん大会で、春花さんの持ってきた水鉄砲が炸裂し、黒板からよく分からない薬品の瓶に至るまで、部屋中が嵐の後のようにびしょびしょになっていた。

「……誰が掃除すると思っているの？」

そうめんをすすりながらそう言う優さんには、いまいち説得力がない。

「ビーカーそうめん……新ジャンル確立の予感！」

「恐らく、久美さんの思っているような展開はないかと」

「アメリカにまで規模拡大！ ついに宇宙へ！ ……え、ない？ ホントに？」

今日の多香子さんのお弁当は、セルフそうめんだった。各々、サイズの合うビーカーと、加熱台、中敷きを用意し、アルコールランプで加熱しながら一口分を茹でては食べ、茹でては食べをするという、およそエキセントリックな人種にしか思いつかないであろう奇

天烈なアイデアだが、これが中々に美味しい。時間が掛かりすぎて、昼休みが完全に潰れてしまうのを除けば、確かに日本中に展開できる程度の物は持っていると思う。

「……ふう。いや、そうめんも久しぶりだと良い物だな」

「そうですね」

その中で一番に食べ終わった佐奈さんは、食後のコーラと称して早くもあのルーラ・コーラ・ジュースの缶タイプ三百五十ミリリットルを傾けていた。

「コーラとそうめんは、ミスマッチそうだ……」

「合わせてみると、中々美味だぞ。一口どうだ？」

「飲んでみる」

明菜さんの素直さと怖い物知らずさは、是非見習いたい所である。

「……やっぱりミスマッチだった……」

……代償は大きそうだけど。

全員が食べ終え、使ったアルコールランプの補給とビーカーの洗浄を済ませると、ちょうど昼休み終了の五分前を知らせる予鈴が奏でられ始めた。充実した昼食ではあったが、やはり時間が掛かりすぎるのがネックになるだろう。

僕はカバンを肩に掛けながら、五時間目何だっけ、と重郎を振り返ったが、姿が見当たらない。と同時に春花さんが、もう行っちゃったよ、と教えてくれる。

（……何か急いでたのかな）

そう思って、次の授業を思い出しながら更に見回すと、もう一人、久美の姿もない。クラスは違うが、多分一緒に出て行ったのだろう。二人は付き合っている。二人は、二人のドラマを繰り広げているのだろう。僕は、キャストに含まれてはいない。

一瞬、かなり寂しい心持がしたのを感じたが、五時間目が家庭科だった事を思い出すと、それもどこかへと紛れて消えていった。

「当然、食いタンのノミ手を狙うのは非常に効率的。連荘もやりた放題、流すのもらくらく。だけど、こんな戦法ではもっちゃん嫌われちゃいます」

家庭科の先生は、先週の非常に真面目な授業とは打って変わって、料理は接待の基本ですという話から、接待と言えば麻雀でも接待麻雀という言葉がありますねという話題になり、先生が先生の麻雀に関する持論を黒板に書き殴って行く授業を、はきはきとした明瞭な声で楽しそうに進めていた。

「そ、こ、で！ 私が今日提案するのは、役牌・ドラの一の二翻戦法です！」

何故かある『役牌』、『ドラ』と大書された紙を磁石で黒板に貼り付け、先生は強く黒板を叩いた。

「これは、ドラが数牌である時に、非常に強い戦法なんです。構造は簡単。一に、役牌を何とかして刻子にする。二に、ドラを何とかして順子に絡ませる。たったこれだけです」

「ドラが対子だった場合、どうするんですかー？」

まただ。先生がこうなってしまったのは、今のように重郎が時々、タイミング良く質問を挟むからだ。どうもその質問は、先生の心に響くらしく、段々と家庭科のレールを大きく逸脱して行ったのだ。

「落とします。大きな手を狙いにいくのは、目を付けられて良い事ないんです。はいここ、テストに出ますよ！」

先生の「テストに出ますよ！」の言葉はこれで四度目で、その度、真面目な何人かの生徒の、ペンを持った手が動いている。いや、絶対出ないと思うなあ。

「望みすぎてはいけません。先生も昔、バイキングで倒れた事があります。ご飯も、量と栄養的な質をバランス良く欲張らずに摂取する事が望ましい訳です」

あまりの騒がしさに、ついに駆けつけてドアから睨み始めた教頭先生の目に負けて、麻雀の話は唐突に家庭科の話へと戻った。何と云うか、教頭先生の目は、穏やかそうなのに何故か威圧的で、何度も修羅場をくぐってきたような感じだった。校長先生があんなだから、苦労しているのだらうと思う。

「まずは先週のビタミンの復習です……。……………」

黒板に書かれた麻雀用語が消えていくに連れ、僕の意識は遠くなり、先生が教科書を開いた頃にはもう、僕のまぶたは完全に瞳を隠していた。

駒黒佐奈?・6 (後書き)

テスト明けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2383x/>

武田君のモッテモテ物語

2011年11月27日18時52分発行